

マイネリーベのマリー
ンに転生したけども詰
んだかもしんない

むぎすけどん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コ〇ミが誇る「耽美系美少年誘惑型乙女ゲーム」の伝説的な悪役令嬢、マリーン・フロイライン・カーレンベルク公爵令嬢に転生したIT会社のOL。

「え、私、詰んでね？没落、待ったなし？」

没落フラグをへし折り、家族を守るために、マリーンは攻略対象グループ『シユトラール』が支配するローゼンシユトルツ高等学園で奮闘する。

目次

耽美誘惑系乙女ゲーの悪役令嬢に転生したけども、すでに詰んだかも shouldn't

1

邂逅

幼馴染みとの再会

ヒロイン登場

シユトラール

お茶会の回

神秘研究部

最初の電話

ヒロインの電話

ヒロインとの関係

8

15

19

24

33

37

41

45

49

ナオジ

魔王、襲来

保健室のお姉さん

嫌がらせ

とあるサバサバ系女子の独白

秋期休暇

湖上の旅

ヴォルヘンビュッテル家

ヴィルヘルムの理由

アイザックという男

耽美って何ソレ美味しいの？

納屋での出来事

料理回

52

61

65

70

73

77

81

84

89

95

104

112

121

門番の告解	126
中間試験	130
媚薬事件	137
デート回	150
クリスマスパーティー	159
宴もたけなわに	167
ヒロインの後悔	179
光と影	192
新年の幕開け	200
短パンの少年	212
スケート回	227
恋の指南	238
馬場の情事	248

白昼の攻防	263
革命の形	271
お見合い	278
お見合い相手	284
Ende	295

耽美誘惑系乙女ゲーの悪役令嬢に転生したけども、すでに詰んだかもしれない

「えー、ですから、皆さんも良くご存じのように…」

どことなく、オネエっぽい校長先生がねつとりした口調で、広いホールのステージで全校生徒に向かって喋っている。

「うふふつ、縦ロールの校長つて、なかなかいいわよね〜」とラビイちゃんと一緒に感心していると、突然、頭の芯が、ぐるんぐるんと揺さぶられる感覚に襲われた。

「何、なんなの!？」

生まれてこの方、16年、公爵令嬢やってるけれども、こんな経験ははじめてだ。

全身をうねるような竜巻がかけぬけてゆく。

ラビイちゃんも「どうしたの?」と心配そうな顔で私を見ている。

ぐわんぐわんと両手足が震える。

それに合わせてラビイちゃんもぶるぶる震えていた。

しばらくして、奇妙な感覚が収まり、完全に開放された時、私はここが前世で私の知っている乙女ゲームの世界だということに気が付いた。

「えーこれって『耽美夢想マイネリーベ』のオープニングじゃない!」

おもわず叫びそうになったが、今日は名門「ローゼンシュトルツ高等学園」の厳粛な入学式。公爵令嬢として、場を乱すわけにはいかないのだ。すんでのところで口をふさぎ、自分を律する。

『あれ、今、わたし、公爵令嬢って、言ったの…?』

確か、私は社会人2年目のしがないIT会社のOLだったはずだ。

ふと、手元を持っているウサギのぬいぐるみを見つける。

私はこれをさつきまで「ラヴィちゃん」と呼んでいた。

背筋に大粒の汗が流れ、顔が真っ青になる。

「いやああああー!」(心の中で叫んでいます)

『よりによって、マリーン!!? 私ってば、悪役令嬢に転生したってこと!』

絶望が私を襲った。

私は史上最悪の悪役令嬢に転生してしまったのだ。

マリーン・フロイライン・カーレンベルグ。

いわずもがな、乙女ゲーム歴史界に燦然と輝く悪役令嬢キャラである。

ヒロインと攻略対象キャラのデートをことごとく邪魔し、エンディング直前で攻略対象キャラに媚薬を使って寝取り、ヒロインを陥れる、悪名高きあのマリーン!

それだけなら、まだしも、ゲームの続編では、親が、国の内乱時に暗躍し、ヒロインの告発によってそれが発覚した後は、一家ともども財産没収され没落に処せられるのだ（ヒドイ）。

1ゲームマーの視点からいえば、今まで彼女に煮え湯を飲ませれていた分、「ざまあ」なのだが、本人に転生してしまった身からすればたまらない。

没落エンドを阻止しなければ、待っている先は不幸である。

財産がゼロになり、路頭に迷った元貴族令嬢に待ち受ける運命はみじめなものだろう。

正直、攻略対象者と結ばれようがしなかるうが、どうでもいい。

一家の悲劇を防ぐためにどうしたらいいか、そればかりを考えていた。

そう一人であれよこれよと考えている最中にも、校長先生の話は続いている。

ゲーム本編でもヒロインが言ってたけど、本当に長いあいさつである。

「王は国民の象徴であり、実際の国の運営は、各地から集められた優秀な5人のシユトラールで行っていますが……」

ゲームプレイ時には何とも思わなかったが、なんていびつな政治形態なのだろうか、とマリーンは思う。

『シユトラール』たちは「家柄が良く」、「成績優秀」であり、「美しい男子」の中からクー

ヘン聖教の僧によって特別に選出される。それらのものがいずれ国政のすべての運営を担っていくことになるのだ。

女からちやほやさされ、恵まれた環境で育ったお坊ちやまたちが国の全権を握っている状態。

当然、シウトラールらの独善的な考えにより国の決定がなされていくことになる。

このゲームの続編では、武器の横流しなどに対する犯罪が『ヒロインの証言』のみによりスピーディに裁かれ、王に次ぐ公爵家の者でさえ、一夜にして、全財産を失った。これはこの特殊な政治体制が可能にしているともいえる。

証拠不十分であろうとも、シウトラールがシロといえればシロ、クロといえればクロということである。

シウトラールであれば、将来の国のトップであり、絶対的権力者であるから、誰も逆らえない。

この学園であれば、なおさら彼らがルールである。

彼らの感情を害したり、逆らえば、一族もろとも社会的制裁にあう。

特に今年は例年と異なり、シウトラール最大数である5人が同学年で選出された。

これは危険だ。

5人のうち誰が何の引き金になるかわからない。

学園で彼らと共同生活を送ることになる生徒たちは今、戦々恐々としている。

入学式の前に、シュトラールを見た女子生徒らが黄色い声援を送っているのを見た。

憧れや恋愛感情もあるのかもしれないが、中には彼らの機嫌を損ねないようにと防衛行為として行っている者も一定数いるのではないかと思う。

実際、マリーンの記憶を見れば、シュトラールに対し『不敬行為』を行ったとされる一族が処罰されて離散する事件が数年に何回かは起こっていた。

これはゲームをやった頃の知識ではわからなかったことだ。

私と私の家族はこの学園で生き残れるのだろうか。

ゲーム内では生き残った。

シュトラールに対し、媚薬びやくを使った明らかなる反逆行為をしながらも、見逃された。

しかし、前世の記憶が戻った今、果たしてゲーム内でマリーンがしてきた綱渡り行為が再現できるか疑問だ。

それに媚薬びやくを使ったマリーンのルートではもしかしたら彼女は発覚後処刑されてたかもしれない。

続編の冒頭ではマリーンは攻略対象の誰ともくっついていないルートのため、その可能性はけっこう濃厚だと思う。

今の学園は独裁国家にいるよりもよっぽど恐ろしい状況なのではないだろうか。

「独裁、…：ね。」

乙女ゲームの世界といえども、1935年のヨーロッパにあるクーヘンという架空の島国が舞台である。

状況は多少違えども前世の世界で起こった歴史をある程度忠実になぞっている。

例えば、現在、隣国とされるドイツではすでに労働者党が国の中枢を乗っ取り、ヒトラーによる独裁制がまさに始まっている。

しかし、それでも、国民の選挙によって選出され、民主的なワイマール憲法が下地に残っていることから、この国よりずいぶんマシな気がする。

いっそ、ドイツに亡命するか、ナチスと繋がっているとされる攻略対象者のルードヴィツヒと手を組んだ方が私にはいいのかもしれない。

ああ、でも、それもダメか！ やっだって結局はシュトラールには違いない。今の時点でナチスと繋がっているのだから、いずれはナチスを併呑する^{へいどん}野望を持っているからだ。

ドイツ亡命だって実は安全ではない。今の時勢、ユダヤ人でなくても、優生保護法に引つかかったり、ことによってはアウシュヴィッツに連行されることもあるかもしれない。ましては、属国に近いクーヘン国からの亡命者には差別があり、本国ドイツ人のよ

うな優遇を受けることは期待できないだろう。公爵家の令嬢であっても不安だ。

それに、日本のように空襲で焼け野原にならないまでも、数年後には第二次世界大戦がはじまってしまう。

そして、ドイツは敗戦国家となる。

亡命する国には適さないだろう。

さて、どうしたものか……

そう、つらつらと思考の渦に飲まれているうちに、入学式は終わり、隣の女子生徒に肩を叩かれていた。

「ちよつと、あなた、失礼でないの？ さつきから、私が挨拶しているのに、無視して！」

「ああ、ごめんなさい。校長の話、長かったし、ちよつとボーとしてて。」

「ふふつ、いいのよ。可愛いウサギちゃんを持つてるわね。貴方のこと、式の間、気になってたのよ。私はヴェルヘミーネよ。よろしくね」

「ああ、大財閥ユーリヒ家の、つて、え！」

私は固まった。

金髪の美少女のその子こそ私の取り巻きになり、私とともに没落の運命をたどるかもしれないヴェルヘミーネ・ユーリヒその人だったのだ。

邂逅

ヴェルヘルミーネ・ユーリヒ。

この国有数の財閥、ユーリヒ家のご令嬢である。

前世がよみがえる前のマリーンの記憶でも彼女の名前は、社交界の常識として知っていた。

…、というか、彼女は、どちらかというと、悪い意味で目立っていた。

親が一代で財を築いた、いわゆる『成金』の一家であるため、経済界での影響以上に、伝統を重んじるクーヘン社交界の中では、一族は軽視されていて、その美貌と社交性にも関わらず、パーティーの中では孤立している状態であった。

…にも関わらず、彼女は、クーヘン王国で行われる、ほとんど全ての社交イベントに姿を現した。

当然、この国の貴族たちの中では口さがない嘲笑と噂話の対象となり、つまはずきにされていた。

思えば、彼女は財閥の商売上のネックであった貴族とのつながりを求め、一家の一人娘として必死に行動していたのだろう。

記憶が戻る前のマリーンはもちろん彼女と話したことがない。

「え、つと、なんか、固まっちゃった？…ごめんね、大財閥家だからって、気にすることないんだけどな…。」

ふと、気が付くと、金髪美少女が困ったように眉をハの形にして、立ちすくんでいた。こんな超絶美少女を困らせては、女がすたるつてもんだ。

「あ、ごめんなさい。私、マリーン。マリーン・カーレンベルクと申します。以後、よろしくお願ひしますね。」

華麗に貴族式のカーテシーを行う。

「カーレンベルク!!公爵様!?!」

超絶美少女は目を白黒させ、今度は顔を蒼白にする。

まあ、そうなるよね。私、箱入りワガママ娘だし、デビュタントとか、最低限の催しだけで、クーヘン社交界にはほとんど出入りしてない。

というか、親が極力、出さないようにしていた。

社交界の新入りなら、私の顔は知らなくても当然よね。

でもって、リヒテンシュタイン家をのぞけば、国王の次席の公爵の家系にいるわけだから。財閥の娘といえども私は雲の上の存在。

新進気鋭の財閥にとって、私たち一家は、喉から手が出るほど、関係をつなぎたいと

ころ。

そんな相手に無礼にもフランクに話しかけてしまったのだから、恐縮するのも当然だろう。

ヴェルヘルミーネはすつかり涙目だ。

「あのう、ユーリヒ嬢。ここは学園なんだし、同じ校舎で学ぶ同士、身分の差は考えないようにしましょう。原則、ローゼンシュトルツでは貴族も平民の差もない決まりになっています。」

まあ、実際には明確に存在するし、シュトラール候補生の権力は絶対ではあるんだけどね。

私たち友達の間ではフランクで行きたい。

ゲームの中でもそうだったみたいだし。

「うっ、ぐすん。」

マリーンちゃん天使過ぎ……。

……こんな私だけど、友達になってくれないかな。」

期待するようにヴェルヘルミーネは私を見つめる。

「私、あまり同世代の友人いないの。」

平民からは財閥令嬢と遠巻きにされるし、

貴族からは、やれ成り上がり財閥だとバカにされるし、…

学園に入つて、本当の友達ができるまでつ、て、ずっと辛かったの…」

すんすん、とヴェルヘルミーネが言葉を詰まらせた。

ああ、すごくわかる。

立場は違うけれど、前世、私もボツチだった。

友達つて、なれつて言われて、なるもんじゃないけど、

ただでさえ、美少女の涙には破壊力がある。

私は一も二もなく了承した。

「よかった。マリーンちゃん。わたしのことはミンナつて呼んでね。」

え！『ミンナ』？

私は少し疑問に思う。

『ヴェルヘルミーネ』がなんで『ミンナ』になるの？

ゲーム上の知識では知つてても、あだ名の付け方としては、少々無理があるような気がする。

普通、『ヴェル』ちゃん、とかではないだろうか。

うーん、この国の名前の略しかたつて、そういうものだろうか…

…ハッ！　そうか。このあだ名はチートだ。

『ミンナ　ナカヨシ』

周囲の好感度を一気に上昇させるココミの裏技の一つである。

そうかー、そうきたか、道理で乙女ゲーのライバルキャラにしては、ハイスペックな容姿だと思ったわ。

「じゃあ、私は『こなみまん』で。」

「へっ…？『こなみまん』って何？」

ミンナは一瞬、呆ほうけた表情を向けた。

私の口から出たのが、よほど意外な言葉だったのだろう。

次の瞬間、

「ぶくくっ！」

と令嬢らしからぬ吹き出し方をした

「ぶふっふっ！　なにそれ、マリーンちゃんとぜんぜん関係ない名前じゃない。どこから来たのっ、ぶくくっ、その『こなみまん』て!?　ぶふふっ、もうやめて…マリーンちゃんの口から、こなみまんって、こなみまんてっ！

マ、ぶふっ、マリーンちゃんはマリーンちゃんのままでもいいんじゃないかな、くすく

す。」

『こなみまん』という言葉の破壊力なのか、

さつきまで、この世の終わりとでも言うような泣き顔を見せていた美少女が、今度はこらえきれないように、口をおさえて、笑い続けていた。

ちっ！

全ステータスUPはダメだったか。

考えてみれば、同じコ○ミだし、ゲームのシステムは酷似しているものの、『好きとか嫌いとか』言う例のゲームのやつとは無関係なのかもしれない。

そんなことも混同してたのか、私は。

そ、それでも、諦めるもんか！

転生者として、楽しんでチートしたいじゃん？

私は上下屈伸を繰り返したり、腕を左右に振ったりした。

いわゆる「コ○ミコマンド」の動きを、自分なりに体で表現してやろうと思ったのである。

これで、わたしも無敵チートになるっ！

しかし、はたから見ると、どう考えても挙動不審者のソレである。

「ふふっ、マリーンちゃんって、噂と違って、面白い人なのね、うふっふっ」

そんな私の様子にツボがはまりだしたのか、ミンナは再び笑い出した。
… 解せぬ。

幼馴染みとの再会

『ココミコマンド』を体現して、一通りのステータスUpを果たしたぜい、と満足した私はミンナと一緒に楽しくおしゃべりしながら、講堂を出た。

え？ABボタンはどうしたかって？

いやだなあ、そこにあるじゃないか、立派な丸い2つのやつがさっ！

ミンナはちよつと引いてたけどさ。：気にしたら負けだ。

「あーら、やけにうるさいわね、と思ったら、マリーンじゃないの。」

何をお、天下のCV：釘宮理恵さまを悪く言うやつはどこのだいつだっ！

：：と、振り向いた先には、背がひよる長く、ちよつと顔色が悪い幼馴染みの子爵令嬢が呆れた顔で立っていた。

オーガスタ・フロイライン・ルクグレーフィン・ヴォルフエンビュッテル。

お姉さまと言ったほうが似合いそうな男勝りの子爵令嬢。

領地が近いこともあって、マリーンとしての付き合いは長いが、昔から何かお互いソリが合わなかった。いわゆる腐れ縁というやつだ。

どうも、私は、前世でも今世でも「私、サバサバしてるんです」キャラを演じてくる

女には苦手意識を持っていた。

本当にサバサバしてたらそれでいい、しかし、彼女の場合、素でそういう振る舞いになつてゐるわけではないし、その実、脳内お花畑で、ブラウンシユヴァイク子爵令息に色目を使つてゐることも知つてゐる。

そして、彼女は彼女で、ぶりっ子ロリータキャラの私を疎ましく思うのか、昔からやけに見下しながら絡んでくる。

お互いさまといえばお互いさまなのかもしれないけど。

前世の記憶が戻つた時、こいつとはあまり関わり合いになりたくないなあ、と正直ちよつと思つてしまつたが、彼女も続編で没落エンドを辿るかもしれない仲間同士。

案外、友達思いなツンデレで、いいところもある。

放置するのは不憫だし、ここは仲良くしても損はないだろう。

「ひさしぶりね、オーガスタ。デビュタント以来かしら。」

オーガスタが目を見開く。

私の返答の仕方が意外だったのだろう。

「し、しばらく見ないうちにずいぶんと雰囲気が変わつたのね、マリーン。」

少々面喰いながら、オーガスタは受け答える。

あれ、そんなに変わったかなあ？ あ、ちよつと語尾伸ばしてたかな。

でも、あのブリっ子、演じるのも意外に疲れるのよね。
めんどいなあ。

「私も16ですもの、すこしは淑女らしくなりましてよ。オーホッホッホッ！」

…ちよつと、キャラ違うか。

マリーンで、よく考えたら、高飛車つてわけでもないしねえ。

でも合格点をもらったのか、すこし、オーガスタは安心したような顔になった。

「…ふう、相変わらずね、マリーン。」

ところで、そちらのご令嬢はどなたかしら。」

あれ、知らないか。

オーガスタなら結構、社交場にも顔出していると思つたのになあ。

隣のミンナはちよつと緊張した様子でカーテシーを行う。

「わ、私は、ヴェルヘルミーネ・ユーリヒで、です。…あの、オーガスタ・ヴォルフエン
ピュッテル子爵令嬢様、でいいんですね。」

「ああ、私のことは、オーガスタで結構。以後、よろしくお願いするわ。」

うん、オーガスタなら、『成り上がり』財閥のユーリヒ嬢であつても、偏見なく受け入
れると思つたわ。

少なくとも、そういうやつではないもの。

ミンナの表情は、ぱあっと明るくなった。

「なら、私はミンナと呼んでくださいませんか！」

そのあだ名好きだなあ。

やはり裏技なんじゃないだろうか。

「ミンナ！これからもよろしくね。」

オーガスタは満面の笑みを浮かべた。

ほら、好感度MAXじゃんか。

うらやましい。

ヒロイン登場

「ねえ、マリオンちゃん、あの子って、私たちの前に座ってた子じゃない？」

ミンナが指さす先には、長い金髪を揺らした、ちよつとぼつちやり目の少女が歩いている。

うーん、覚えてないなあ。

校長先生の縦ロールのインパクトと、前世のOLの記憶がよみがえったので、それどころじゃなかったからなあ。

「私、ちよつと行つてくるね！」

えっ！　と思うより先に、ミンナはその子に向かって駆けていく。

…うーん、この子、一皮剥けたとたん、グイグイ行くな。

まあ、公爵令嬢の私がバックにいるかぎり、どんな身分の子でも不敬には当たらないだろうけどさ。

何だろな、前世、悪役令嬢マリオンとその取り巻き1と2がいるな、ぐらいにしか考えてなかったんだけど、もう、この子、リーダーでいいんじゃないね？

悪役だからって、3人グループを作らなくちゃいけないルールなんてないんだけど

せい。

悪役テンプレの「様式美」ってやつ？

「ねえ、ねえ、あなた、さつき、私の前に座ってた子でしょ？」

「え!! あつ そうだけど…」

マジか。

後ろに目でもあるんだろうか。

まあ、ミンナは超絶美少女だからなあ。

周囲の視線を集めていたことは、想像に固くない。

しかも、私は、そんな美少女を隣に侍らしながらも、目は校長の縦ロールに釘付けだつ

たわけだけでも…

「では同じクラスね、

私はヴェルヘルミーネ、お友達になりましたようよ。」

おお! 言えた。

さつきまで泣いていた、内気なあの子はどこへ行った!?

お姉さん、あなたの成長ぶりには、ちよつときみしく感じるわ。

「ええ、よろこんで。」

私、エリカ・クラウス。」

、とその子が答える。

うーん、なんか聞き覚えのある名前だな。

それになんか、見覚えがあるような…

「今友達になった子が、あと2人もいるのよ！」

ほうほう、ここで私らの出番ですな。

任せんしやい。

「クラウスさん？、私はマリーン・カーレンベルクと申します。ヴェルヘルミーネの友達よ。以後、よろしくね。」

流れるようにカーテシーを行う。

その子は呆気にとられたように私を見つめていた。

ふふふつ、公爵令嬢の威厳と華麗さに^{けお}気負^おされてるのかな？

それにしても、クラウスか？男爵位でそれっぽい人がいた気がするけど、ご息女なんていたのかしら…：

…うん？

。。。あー！こいつヒロインじゃね!?

「あー」と本当に叫びそうになり、隣にいたオーガスタに^{けげん}怪訝な顔をされる。

あぶないあぶない。

そうそう、ヒロインって、ブラウンシユヴァイク子爵の落し胤だねでクラウス男爵に養女として、引き取られたんだった。マリーンが知らないわけだよ。

うーん、ちよつと、ぼつちやり系？

いや、そんな小錦みたいな、つていうほどでもないんだけどね。

うん、ある意味、カワイイかもしれない。

それにこの子、ちよつと似てるんだよね。

まだ、マリーンだった時、生き別れた、子犬の『アニス』ちゃんに。

しばらく、ポーつとしてたら、隣の紫クチビルに肘ひじをつつかれた。

「んっ、ごほん、連れが失礼したわね。

私はオーガスタよ、よろしく。」

オーガスタの所作が綺麗に決まる。

ふんっ、何よ。紫クチビルのくせに。

藤木くんかよ。

前世でも今世でもリアルにそんな人、あなたしか見たことないわよ。

「ねえ、立ち話もなんだし、カフェでも行かない？」

おおっ！前ぜん言ごん撤てっ回かい。

いい提案だ。

いいぞつ、紫クチビルう！

オーガスタが胡乱うろんな目で私を見つめる。

アハ、考えてることが、バレちゃった？

何だかんだで、付き合いが長いからな。

ちよつと、調子に乗りすぎたか…。

「い、いいですわね。そうしましょうよ。」

と私は提案に乗る。

「いいよ、お茶しにいこう。」とヒロインが同意しかけた時、

「きゃーーーーー！！！！見て！！」

と、つんぎくような黄色い歓声が耳に響き渡ったのだった。

シュトラール

悲鳴の発生どころは隣のミンナだった。

「わっ何事!」とヒロイン。

それ、口に出さなかったけど、私も思った。

気が合うな、アニスにやん。

「シュトラールよー!」

「えっ?」

見ると、シュトラールの連中が5人全員揃って校道を闊歩していた。

なんか、朝も同じ光景、見たな、彼らの中でF5ゴツコでも流行ってるんだろうか。

そして、周囲で、なにやらキラキラと光っている。

マジであれ何なんだ?

… オーラというか、気というか。

私が科学研究部にいたら、真っ先に研究対象にするな。

左から、エドヴァルド、ナオジ、ルードヴィツヒ、カミュ、そしてオルフェウスか。

本日も、麗しく結構なことだ。

「あの方達が、シユトラール…。」

とミンナの瞳はすっかりハートマークだ。

美少女がそれをする、効果は絶大だ。

ほんと、この子、可愛いわあ。

『チヨロイン』というか、今まで、美しい貴族に対して免疫がなかったのだろう。

「いや〜ん、

さすがシユトラールに選ばれる方々ね、

ステキー！早くお近づきになりたいわ〜。」

その揺れ動く瞳は真ん中を歩く、紫の髪の長身の男に向けられていた。

ちっ、やはり、ルードヴィツヒか。私のミンナちゃんは渡さないぜ。

…しかし、待てよ。

ミンナとルードヴィツヒがくつつけば、没落フラグの一つはつぶせるのではないだろうか？

ルードヴィツヒ・ヘアツオーク・フォン・モーン・ナーエ・リヒテンシユタイン。

通称：魔王

長身の眉目秀麗、長身の紫髪の男である。

この国で最も有力な貴族である、リヒテンシュタイン公爵の3人いる兄弟のうちの長子にあたる。

現国王を輩出した家柄で、彼の母方も王族から降嫁されている。

家格は残念ながら我がカーレンベルク公爵家より上だ。

このことが実は国内に密かな混乱を招いているのだが、その事情については今は省略し、後述することにする。

このゲームの続編である「マイネリーベ ツッパイ III」は「誇りと正義と愛」で、卒業式に

おいて、彼は、密かに国内に引き入れたナチスドイツ軍を率い、校舎を占領し、クーヘン国内を内戦と多大なる混乱に巻き込むことになる。

彼はいずれ、ドイツ国内でヒトラーをおしのけ、総統にまで上り詰めることになるのだが、この戦争で数えきれないくらいのたくさんの犠牲者が出る、という事実を忘れてはならないだろう。

どう言いつくろうと、彼は「外患誘致・売国」の張本人であることは確かなのである。

ゲーム上で彼が意気揚々と「革命」として演説する場面があるが、頭脳明晰で知られている彼が、「革命」と「クーデター」の区別すらわかっていないことが如実にわかるシーンだ。

これはクーヘン国に対する立派な反逆行為なのだ。

そして、これが原因でクーヘン国内は戦乱に巻き込まれ、最悪、荒廃に帰する。

私やミンナ、オーガスタの一族はこの戦争で、レジスタンス側に情報を売ったり、革命軍側に武器を横流ししたりして、食いつないでいた。

しかし、この陰謀を街頭で聞きつけた『善良な』^{ツツアイ}イーのヒロインによって、密告され、財産を没収され、没落の一途をたどることになる。

つまりは彼がしでかす2年後の卒業式の「『革命ごっこ』を起こさせない」ことが私たちの『没落フラグ』をつぶす一手であるのだ。

むろん、彼のクーデターにも、彼が考えるところの『崇高な』目的があった。

現在、隣国、ドイツは史実通りに労働者党が政権与党を占め、ヒトラー総統により独裁政権がしかれているが、その支配には暗雲の兆しが見え始めているはずだ。

信じられない話だろうが、ジークリッド・カロツサという若き天才遺伝学者によって、ルードヴィツヒのクローンが5人生成され、その者たちが、ナチス政権を内側から食いつぶそうと目論んでいるのだ。そして2年後にはそれは成功していて、ヒトラーはすでに傀儡とされている。

そして、『ヤクト・ヒルシケーフア』と呼ばれる人類最終兵器（私は便宜上、『ララー・スンのエルメス』と呼んでいる）を開発し、人体実験を繰り返すことになる。

この陰謀を調査していたルードヴィッヒは、この謀を世間に明るみに出すために、『戦争』の道を選ぶのである。

『戦争を起こさないため』なら、まだわかるが、陰謀の究明のために『戦争』という最終手段を使う本末転倒のやり方に、マリーンは、改めて虫唾を走らせる。

公爵家の端くれとして、彼のやり方は決して許されるものではない。

彼の本来の目的は、マイネリーベ説明書のキャラクター紹介にあるように、『世界を自分の意のままにする野望を達成する』ことにあつたのだろう。

そうでなければ、「人民の生活」を無視した、あの非情な手段はとれない。話は戻る。

希望的観測ではあるが、もし、ミンナが婚約者として、ルードヴィッヒの馬鹿げた『革命ゴッコ』を止めることができれば、この没落フラグは前提から覆ることになる。

私が今、しなければならぬのは、ルードヴィッヒの野郎と、ミンナの『恋のキューピッド役』として立ち回らなければいけないのかもしれない。

友達としてあの売国野郎は、あまりオススメはできないけどね。

さて、私はお父様から、入学に先立つてこのシュトラールの5人の中から誰かを婚約

者として射止めよ、とのわりとキツめの厳命を受けている。

貴族令嬢としての務め、というのもあるが、

そうでないと、私達が政略的に潰される危険性があるからなのだそうなのだ。

もともと私達カーレンベルク家は、この国、クーヘン国の創始者の家系であり、国王候補ナンバーワンの血筋として、知られていた。

ところが、今の国王のリヒャルトIII世は、隣国、ドイツ帝国の元王家血筋であるホーエンツォレルン家の外戚の血が混じっている。

国王は、もともと、リヒテンシュタイン家出身であり、実は、ルードヴィッヒの父方の祖母こそがプロイセン王家の分家筋になっているのだが、一部の保守的なクーヘン豪族たちからは、国王の即位、およびルードヴィッヒのシュトラーレル就任にはかなりの反発があった。

国王派、およびルードヴィッヒにとって、カーレンベルク公爵領は王族としての正統性があり、反抗の旗頭になり得る、目の上のタンコブであり、彼らはいつ何時でも、取り潰しの機会を狙っているらしい。

極端に言えば、どんな、不名誉なことでもデッチ上げられあげかねない、そんな状況とのことである。

本来、一人子の私が男子であれば、シュトラーレル就任は容易であった。

私が、たとえ、容姿に恵まれなくても、カーレンベルクの政治力があれば、信託と任命を与えるドルイド僧を丸めこむことは可能だった。

この国の宗教もその他の地球史上にのこる宗教同様、例外なく、腐敗していて、シュトラール任命のための献金やお布施が横行していた。

ただ、私は女子に生まれた。

そして、ただ一人の跡継ぎである。

いくら、カーレンベルクの政治力を使ってもこのことは覆らない。

そして、この国の男尊女卑の思想は根が深い。

これがパワーバランスの歪みを招いた。

結局、カーレンベルク家に代わり、リヒテンシュタイン家の勃興を招き、現在の国王とシュトラールがこの家から任命されることになる。

しかし、いまだにこの処置に対し、不満を持つ豪族も多い。

どうにもならないことではあるのだが、国の意見が割れ、戦火がくすぶっている状態には、ある。

まあ、全然、内戦にいたるほどではないんだけどね。

その歪みを一気に解決するために、

そして、一家を政治的窮地に至らせないために、

「女の武器を使え。」とお父様は言った。

シュトラールの1人と婚姻を結べば、少なくとも、国王とシュトラール一派から私達が狙われることがなくなる。身内として考えられるのだ。

ついでに私が女子として生まれてしまったことによって、地位が低迷した我が家の名誉も回復する。

原作のマリーンが自作の媚薬まで投入して、執拗にシュトラールを狙ったのはそういう思惑があつてのことだったのだろう。

実際、そのことがバレたら不敬どころじゃ済まなくなるのだが、

もし、私もいざ追いつめられたとき、最終手段に訴えなかった、とも言い切れないだろう。

まあ、私は、今は前世の記憶を思い出し、21世紀のOLの思考を持っているので、貴族特有の伝統的な解決法に対しては、忌避感を持っている。

結婚相手なんて、自分の好きな相手を選びたいじゃん？

自分勝手に、一癖も二癖もありそうなシュトラールたちなんて論外も論外。

なんとか、2年後にルドヴィツヒのやらかす、「革命ゴッコ」を止め、クーヘン国の内戦の息吹を収束させなければならぬ。

そうでなければ、わが家も、ミンナの家も、オーガスタの家も没落へ向かって突き進

むだろう。

それだけは絶対に避けなければならない。

お茶会の回

どちらにせよ、2年後の惨劇を防ぐためには、シユトラールの何人かとは直接話をつける必要があるそうだ。

しかし、誰にするべきか？

ルードヴィツヒ本人は論外だろう。

彼は、自尊心が高く、基本、信頼する人物でない限り、人の意見を聞かない。彼の「革命もどき計画」を私に止められる自信はない。

第1、彼はカーレンベルク家の没落を本気で狙ってるし、昔からどうも私個人に対しても敵愾心てきがを持っていてるところがある。

彼にはミンナを当てるのが望ましいだろう。

こういうことは、本気で彼を好きになった人が、真っ向から真剣にぶつかって、セラピーに取り組んでいくべき事案なのだ。

ヒロインも考えたけど、彼女はダメだ。

ルーイ（ルードヴィツヒ）エンドで彼女は、彼と共に「革命戦士」となることは決定している。

2年後の戦争を止められなければ、何の意味もないだろう。

やはり、ミンナとルドヴィツヒを恋仲にして、彼女に説得してもらうか…今のところ、これが、私達が助かる最良の選択に思えてならない。

私から話をつけるとすれば、後は

ナオジ?

カミュ?

オルフェウス?

はたまた

エドヴァルトか?

「うーん、誰にするか迷うところだわねえ。」

「えっ?! それどういうこと?」

「早くもシュトラール狙い?」

見ると、ヒロインが、軽くこちらを睨んできている。

まあ、私の場合、シュトラールを、どうにかしないと、意味ないからねえ。

下手にこちらが水面下で動いて、お家取り潰しの危機になっても困るし。

それに、この学校に来る目的なぞ、大抵は、貴族通しのコネクション結びであったり、結婚相手を探し出すことが、主目的の者がほとんどだろうよ。

そんな趣向のことを言ったら、

「その意見もどうかと思うけど……。」

と隣のオーガスタが呆れたようにため息をつく。

まあ、貴女なら、そう言うと思ったけどね。

それが、貴族の実情よ。

しっかし、私の受け答えはどんどん

ゲームのマリーンに近くなつてく気がすんなあ。

前世、意味あんの、これ？

「まっ、とにかく、お茶しに行こう！」

とオーガスタが仕切り直してくれる。

パツと場の空気が柔らかくなった。

私、あなたのそういうところは、好きなのよねえ。

こうして、私たちは、和気あいあいと、オーガスタのハマっているというモカを出す

喫茶店へと向かっていった。

うええ！ このケーキスタンドのタワー、調子乗って頼んじやったけど、ホントに4人で食べ切れるの!?
へるぷみーーー!!!

神秘研究部

「えっ!? マリーンちゃん、どこ行くの?」

お茶会の帰り、ローゼンシユトルツの校舎の方へと戻ろうとする私に、ミンナが声をかけた。

「ちよつと、… ね。神秘研究部のほうに顔を出そうと思ってるの。」

「え!!? 神秘研究部!?!」

ミンナがかなり引いた表情をする。

クールで落ち着きはらったオーガスタとは対象的だ。

うん、わかる、わかるよ。

一般庶民の感覚的には、かなり電波っぽいネーミングの部よね。

事実、前世のOL時代、マリーンのプロフィールで、この部の名前、発見したとき、「コイツかなりヤベーやつだな」、って思ったもん。

でもね、この部、私が入らなきゃしようがないのよねえ。

この時代、秘密結社とか、サバトの集まりってわりとまだ一般的に貴族間で行われていて、

貴族間の社交とか、関係性を作る意味でも、かなり重要なセレモニーが行われていたりする。

ほら、「魔笛」^{まてき}って、モーツアルトのオペラあるでしょ？

あそこで兄弟間の儀式うんぬんの描写あるけど、あれって実は「薔薇十字団（フリーメイソン）」の教義上の話なんだよね。

あと神秘研究ついていわれているけど、錬金術も絡んでいたりして、この時代の最先端の化学を研究していて、後の時代の化学の発展の基礎を作っていたりするのだ。

私の家、カーレンベルク家はクーヘン国のフリーメイソン一派の中でもリーダー的存在だ。

このことが、わが公爵家の政治的影響力の源泉の一つになっている。

特に昨今、ナチスの迫害を恐れて、ドイツにいたメイソン系の秘密結社のグループがクーヘンに逃げこんできている。

その中でも例えば、著名な人物に「法の書」を執筆したエドワード・アレクサンダー（のちのアレイスター・クロウリー）とかもいて、そういうドイツで活動していたオカルト集団をうちがまとめて保護していたりする。

この影響力は意外に無視できない。

そういうわけで、私が神秘研究部をまとめていくことは入学前から決まっていた。

結構、ローゼンシユトルツではポピュラーな活動で、3割近くの生徒が、貴族中心に在籍している。

ルードヴィツヒも私たちのそういった動きを警戒して、科学研究部を対抗して作つてたっけ。

新設なのに、部室まであつて、ほんと、シユトラール特権よね。

… っつかし、ヒトラーってよくわからないよね。

一方でオカルトを迫害しておきながら、自分は神秘主義に傾倒していて、側近に神秘教徒のヒムラーを入れたり、カール・マリア・ヴィルグートなる怪しげな魔術師がいたりとか、『失われた聖櫃^{アーケ}』を探しに行つたり… ってこれは映画の話か。

ちなみに私、マリーンの錬金術レベルは、現状でも、かなり高いほうだ。

しかし、その現在の私のレベルでさえ、「人の心を操る」媚薬を製作するには、気が遠くなるような高い壁が立ち塞がつてたりする。

… というか、そんな効果の媚薬製作に成功した人物って、まだ、この世界に存在しないんじゃないかな？

その困難をわずか2年後には完成させてしまうのだから、マリーンの化学的素養は相当優秀だといえる。

結局のところ、ヒロインが二年間、休日たびに攻略対象者とデートにうつつを抜か

している間、原作のマリーンは薬学研究で弛まぬ努力をしていた、ということなのだろう。

ぶつちやけ、自分には無理っス、はい。

そんなわけで、私はチョロつと部屋に顔出して、なぜか、サバトの巫女的なことやられたりして、その後、幹部と引き継ぎ事項など、打ち合わせたりした後で、マリーンとしては、珍しく疲れ果ててる状態で、女子寮へと帰っていった。

ふひー！！かなりハードな社交だよ、これ。

必要なこととはいえ、疲れるわー。

最初の電話

「♪今日も、鏡のまっえつでー!」

いやー、CV：釘宮理恵、最高だわ。

この音源、かなりレアなんじゃね？

朝から、フニンフニンと、声優の声で遊びながら、髪を整えていると、メイドのメレデイスがかなり驚いた顔で「お嬢様が…歌ってる!」などと放心していた。

そうよね。私、家の中じゃ、かなり寡黙かもくな子だったから、この変化は驚くかもしれない。

生まれた時から、私はいらない子だった。

産声をあげたとき、お父様が最初に言った言葉は、

「なんだ、女子か…」だったそうだ。

小さい頃から私は屋敷の中で息を殺して過ごし続けていた。

少しでも神経を逆立てさせないように、親が私に八つ当たりしないようにと。

私が女子として生まれたことでこの家が凋落ちようらくしつつあるのを知っていたから。外では赤子の頃から仮面をかぶった。

皆から愛されるように、少しでも可愛らしく。

自分でも過剰に感じるものがあつたが、いつのまにか、どこからか、本当の自分で、演じている自分なのか、分からなくなってきた。

親に愛されてないわけではないと思う。

そうでなければ、こんなに贅沢ぜいたくに生活させてもらえない。

護身のぬいぐるみだつてもらっている。

しかし、

「男子だったら、良かったのに。」

と、内心では思われていることは確かだ。

そういう話を直接、お父様から聞いたことは無かつたが、私にはわかる。

お父様は内緒うちづかことが下手で、不器用だから、顔にすぐ出るのだ。

それでも大切な家族だ。

今まで、ワガママ放題だった自分を甲斐甲斐しく世話してくれた使用人たちや、

今まで、独り身で、必死に私をここまで育ててくれたお父様。

カーレンベルク家が没落すれば、これらの人々の笑顔を消すことになる。

どうしてもそれだけは避けなければならないのだ。

心の底で疎まうとまがられていても、私はやっぱり、マリーンとして、この家族を愛している。

迫り来る運命と戦うために、これからの学園生活、必死になって生きていけなければならないだろう。

そう思つて朝の支度を終える。

その瞬間だった。

「ジリン！ジリリン!!」とけたたましく電話のベルが鳴った。

朝の登校前の、ただでさえ、忙しいこの時間に、誰が一体、何の用で、かけてくるんだろう？

「はい、マリーンです。…誰でしょうか。」

自分でも少々、不機嫌な声になっているのがわかる。

…落ち着け、私。

「もしもし、私、わたし！ 入学式の時に一緒にお茶した、エリカよ。覚えてる？」

うん？ あー、ヒロインちゃんか。

うーん、電話番号、交換したっけなあ？

なんで、私の寮の部屋番、知ってるんだらう？

「あくエリカさん。」

今、少し忙しいんですけど、何の用でしょうか？」

「10月6日なんだけど、遺跡に遊びに行かない？」

うん、学校の裏の、ストーンヘンジね。

クーヘン国で『遺跡』といえば、あそこしかない。

気になるよね、アレ。色んな意味で。

「え〜つと、その日は〜。」

私はスケジュールノートを開く。

残念ながら、その日は神秘研究部の集会がある。

さすがに外せない用件だ。

「ごめんなさい。その日はとても大事な用が入ってるの。」

「そう、じゃあまた今度ね」

冷淡な声でエリカは答え、瞬時に電話を切る音がする。

ガチャ、と電話が切れる前に一瞬だけ、舌打ちが耳に届いた。

「ちつ、使えないやつ。」

ヒロインの電話

学園が始まってから一週間が経ったが、
ヒロインの話題が絶えない。

「どうやら、ここ数日、4人のシュトラール達に対し、執拗しつように電話をかけてきているらしい。」

その内容も「古代の息吹いぶきを感じたい」とか「印象派の絵画の見方がわからない」とか、「映画のチケットを持つてるのだけれど、誰を誘うべきか?」といったような、要領ようりょうの得ない質問ばかりで、対処に苦慮しているというのだ。

ただ、ルードヴィツヒだけは、迷惑電話を免まぬかれてるらしい。

なんかムカつくなあ。

それだけなら、シュトラールも苦勞してるのね、で終わってもいいところだが、

問題は、ヒロインの所業は私たち3人にも及んできていて、それがもっと深刻なのだ。彼女は、私たちの電話番号をどこから調べたのか、深夜、早朝、問わず、電話攻勢を

かけてくる。

内容は「一週間後に図書館に行かないか」とか言ったような、そんな緊急性のあるものではないのだが、

それを毎晩、非常識な時間にかけてくるので、たまらない。

3人とも電話番号を一度変えてみたのだが、それすらも翌々日にはつきとめられてしまいう有様。

「困ったわねえ」とオーガスタは疲れたように、ため息をついた。

ここは件のくだんのコーヒーシヨップだ。

オーガスタはいまだにこのモカにハマっているらしい。

「うわあん・マリーンちゃん」と私に抱きつくミンナ。

うはあ、いい匂いがするな。…ムム、私より大きいか、ムムム。

少し堪能しながらも、背中を優しく撫でる。

ミンナの顔を覗くと、泣きはらした目の下に、くつきりと黒いクマが見える。

これは思ったより深刻だ。

ヒロインが、いつも、夜中に電話をかけてくるので、この一週間ろくに寝ていないらしい。

うーん、心配だな。

不眠は美貌の敵というし、どうしたものだろうか。

「どうしたんですか？」

と近くの席に座っていた門番が話しかけてくる。

この人、ローゼンシユトルツ学園の警備を普段担当している方なのだが、シユトラールがいる学校だけに、大変容姿が整っている人物だ。

ゲームでは、クリスマスパーティー時にしか、登場しない隠しキャラで、なかなかのイケメンなので、マイネリーベファンからは大変人気が高い。

この人を攻略するルートは無いのか、と制作会社コ〇ミに要望が殺到したほどである。

その門番は仕事終わりに、やたらと、この喫茶店でお茶することが多いので、最近では、私たちと世間話をする茶飲み仲間になった。

何故か、女子会にも不自然に混ざることのできる不思議なイケメンである。

でも、この人、まだ名前を知らないんだよなあ。

いつまでも「門番」じゃ可哀想だよなあ。

「外井さん」とか？

門番は、私たちから、話を聞いた後、少し困った顔をした。

「そうですね、それは由々ゆゆしき問題だ。」

「：：うーん、私に少し心当たりがあるんですが、

明日、もう一回、電話番号を変更することはできませんか？

たぶん、もうかかってこないと思いますよ。」

私たちは門番を信じて、その次の日、寮の部屋の電話番号を変えた。

すると、あら不思議。

ヒロインちゃんから、電話がかかってこなくなつた。

門番、すげー。

一体どんな魔法を使ったんだ！

ヒロインとの関係

電話攻勢の原因は、もしかしたら、彼女が、人との付き合い方にあまり慣れてなかったからかもしれない。

私たちと友達になれて、嬉しくって、ハイテンションになって、つつい、距離の詰めたを間違つてしまったのだろう。

僭越せんえつながら、そういった経験は、私にだってある。

今や思い出したくもない、黒歴史になつてるけどね。

非常識な時間帯に何度も私たちに電話をかけてくるのだから、まさか、それが私たちの睡眠を妨げ、迷惑になるとは想像できなかったのだろう。

まあ、最初の友達として長い目で、彼女を見て行こうよ。

出会った時に、約束もしてるしね。

そう、私たち3人は結論づけた。

ちよつと怖いし、普段から、つてわけにはいかななくても、

クリスマスパーティーとか、復活祭とか、そういう大きなイベントとかでは、

誰も彼女を連れてくようではなければ、

すすんで、誘って、一緒に連れてってあげよう。

ただでさえ、彼女はクラスで孤立しつつあった。

見境なく、複数のシユトラール達に声をかけてるので、

ある意味、周囲が反感を持つのも当然であろうと思う。

しかし、私たちがバックについていれば、

彼女をとにかく言う人間も少なくなるに違いない。

何せ、私、これでも、公爵令嬢だし？（えっへん！）

… オーガスタ、そんな目で私を見ないで。

けっこう、傷つくから、わりと、マジで。

そんなわけで、私たちは、彼女と付かず離れずの関係を保ち続けようと思う。

変に刺激しないようにね。

なんせ、彼女はああ見えて、シユトラールの親類なわけだし、変に関係がこじれると、
後々怖い。

それにしても、… 彼女、電話攻勢にかまけているけど、ダイエットは、しないんだろ
うか。

いやね、前世、私も、当然、このゲーム、プレイしたことがあるんだけど、

名前を決めた後、最初に変なタロットカードを選ばされるのよ。

それで、そのカードによって、能力値が決まるんだけど、

なぜか、体型まで決められちゃうのよね。

彼女、恐らく、タロット選びを間違えて、あの体型に落ち着いたのだと思うのだけ
ど、

ヒロインってかなり成長スペック高くゲームで設定されてるから、ちよつと運動す
れば、すぐ理想の体型になれちゃうわけ。

現実のダイエットもこうだったらいんだけど、って当時思ったわあ。(遠い目)
何なんだろう、電話に時間を取られ過ぎてるのかしら？

勉強のほうはどうなんだろうか。

授業中の感じ見ると、あまり、熱心、ってわけでも無さそうなのよねえ。

まあ、私が、関与する問題でもないんだけどね。

そういうえば、今のうちに、シユトラールと話をつけときやないとなあ。

何せ、こっちは、私ん家の没落、かかってるし。

うー、気が進まん。

ナオジ

私が最初に話に行く相手はすでに決まっていた。

まずは、ルードヴィッヒの右腕だ。

「朝、確か、ここにきて、弓の練習をしているのよね。」

これは、ゲームのイベントで予習済みだ。

中庭を見ると、東洋系の顔立ちをした美青年が、武道着をはだけさせ、和弓の的当ての練習に精を出している。

ナオジ・イシツキ

：うん、つていうか、私、もともと日本人だし、直司ナオジでいいだろう。石月イシツキ 直司ナオジ。

名前から分かると思うが、彼は、日本からの留学生だ。

日本の華族（伯爵家）出身で、クーヘンには異文化を見聞するためにやってきた、というのが表向きの理由だ。

そして、クーヘン聖教・ドルイドの信託を得た、れっきとしたシュトラール候補生である。

異国の人間でさえも、国の運営を任せ、全権を握らせる度量があるのに、女性の国政

への参加を頑かたくなに認めようとしなさい、この国の、何ともいびつで、根強い、男尊女卑の形が見えてくる。

2年後、彼はルードヴィツヒが起こすクーデターの片棒を担ぎ、クーヘン国を混沌こんとんへと導くことになる。

私たちの没落フラグを発生させないためには、彼を、「ルードヴィツヒの『革命ゴッコ』に協力させないようにする」ことが、必要になつてくるのではないだろうか。

「石月さん……」

振り返った直司ナオジは意外そうな表情で、私を見た。

「……フロイライン・カーレンベルク。」

この国に来てからそんな風に呼ばれることは初めてだ。」

クーヘンでは、男性を呼びかけるとき、ドイツ式に、名字のまえにヘル(H e r r)を付けることが一般的だ。

しかし、直司ナオジの場合、東洋人だからなのか、名字と名前が混同されることが多い。

見も知らぬ、初めて会った女性からナオジ、と呼び捨てにされ、内心苦々しく思っていたこともあつたらしい。

「さん」付けは日本で一般的に使われる敬称であるが、

日本は当時、欧米列強において一段下に見られていた存在。

まさか、異国の女性から、日本式に呼ばれることになる、とは考えてなかったのだろう。

ちなみにフロイライン (Fraulein) というのは、未婚の女性の名前の前につく。

授業中、先生から指されるときは、基本的にこの呼称になる。

しかし、どうも、私の場合、前世での『銀英伝』を思い出してしまって、思わず、背筋がびしりと伸びてしまう。

… 近いけれども、ギリギリ、マリンドルフじゃないからな。

彼は、日本人らしく、大義で動く。

ルードヴィツヒはおそらく、彼のそういった性質をうまく思考誘導させ、クーデターに協力させたのではないだろうか、と私は考えている。

そうであるならば、彼にとつて、もっと重要な大義とは何だろうか？

そんなことは決まりきっている。

私に言わせれば、彼は、こんなところで「革命ゴツコ」に興じている場合ではないはずなのだ。

『五・一五事件』を覚えてますか？」

私の言葉に、直司ナオジは驚きに目を見開いた。

「フロイラインは、3年前に、私の国で起きた軍事クーデターのことを言っているのですか。」

日本の首相が、暴走した軍部の青年将校らに殺された事件は知っていても、さすがに日にちまで覚えているとは思わなかったのだろう。

そもそもこの事件の名称は、事件の当事者であった犯人たちが檄文げきぶんの中で勝手に決めたものだ。

しかし、そんなことまでは、さすがに、国外で報じられている内容ではない。

私も日本人だからね。これぐらいのことは歴史の授業で習う範疇はんちゆうだ。

「そうです。」

当時の犬飼いぬかい首相が犠牲になったあの事件です。

あの時に、銀行や、変電所、警察署まで襲撃されたことは覚えていますか？

…断言しましょう。

これから、あれ規模の、いや、あれ以上の軍事クーデターが日本で起こります。

私の予測では、早くとも、来年には。」

「…何で、そんなことを。」

直司はあまりのことに困惑しているようだ。

「今まで隠してきたのですが、

私は、リユーネブルク伯爵令息と似た性質の予知能力を持っているのです。」

ハツと息をのむ、直司の声が聞こえる。

普通疑うだろ。

なんつーか、ホントに騙だまされやすいな、この男。

ルードヴィツヒが調子に乗るわけだよ。

「あなたは確か、この学園に来るまでは、陸軍士官学校に行っていましたよね。」

それでは、『皇道派』と『統制派』の長年の確執かくしつについてはご存知でしょう?」

この頃、大日本帝国陸軍には、「皇道派」と「統制派」の二つの派閥はばつがあり、両者が対立し、しのぎを削りあっていた。

当時、この2つの派閥はばつを表す言葉はあまり一般的に使われていなかったかもしれないが、陸軍畑の直司に、だいたい、意味は伝わるはずだ。

皇道派こうどうというのは、天皇親政による、武力による、軍政改革を目指し、一方で統制派は当時の支配権力と結びつき、内部から軍政改革を理想に掲げていた。

後に、太平洋戦争にまで繋がる『二・二六事件』は、この二つの派閥はばつの対立が激化し、一方の皇道派の青年将校らが、暴走して起こるテロ事件だ。

幸い、当時の天皇の勅令により、このクーデターの首謀者らは、朝敵^{ちようてき}として鎮圧されることになるが、高橋是清^{これきよ}などの優秀な人材が失われ、この事件がきっかけで陸軍の発言力が強化され、日本は戦争の道へと突き進むことになる。

直司の顔は青ざめていた。

自分の国でこれから起こる出来事だ。

現実を直視しなければ何も始まらない。

満州国でこれから起こる盧溝橋^{ろこうきょう}事件のこと。

日中開戦がもとになり、始まる、欧米各国の経済封鎖と圧力。

A B C D包囲網とハルノートによる最終^{つうたつ}通達。

追い詰められた日本によるハワイ沖での奇襲攻撃。

ミッドウエーでの致命的な敗戦。

ガダルカナル島までの往復8時間の悲愴^{ひせう}なフライトミッション。

疲労^{こんぱい}困憊のベテランパイロットを待ち受ける、容赦ないアメリカ軍の砲撃。

ベテランが死に絶え、新人だらけの零戦隊^{ぜろせん}を包囲し、一方的な七面鳥狩りをするマリ

アナ海戦。

ついに、日本本土にまで、敵襲。民間人ら^{じんゆうりん}を無差別に蹂躪^{あざわら}爆撃される始末。

神風特攻隊とか、人間魚雷（米兵にはバカ爆弾と呼ばれ、嘲笑^{あざわら}われていたつけ。）のくだ

りに入ると、さすがの直司もむせび泣いていた。

うん、気持ち、すっごい、わかる。

自分で語っていても、胸糞感^{むなくそ}、半端なかつたわ。

これ以上、原爆のこととか、語らなくてもいいよね？

最初っから、完全に不利の負けゲーだもんね。

確か、日本の暗号タイプ機が四台ほど、複製^{ふくせい}されてたんだよね。

それで、日本が考える作戦は、ダダ漏れ^も。

ミッドウエーなんか、アメリカ軍は、ただ指定された場所に全艦隊でもって、待ち受けるだけで、良かったなんて言われてるし…

もうちよつと、陸軍が海軍の言うことを聞いていたらなあ…。

「陸軍としては、海軍の提案に反対であるー」なんて言わずにさあ。

…、ってこれはゲームの話か。

全部が全部、陸軍の無謀さが原因じゃないからな。

あと、よく言われてることだけど、空母主体^{くうぼ}の海軍戦力に早めに切り替えるべきよね。

戦艦大和^{やまと}なんて、金かけて作っても、結局は出し惜しみして、大和ホテル^{やまと}なんて、お偉いさん方の歓談^{かんだん}する場にしかなくてないわけだし、最後、沖縄に特攻するだけだし。

「フロイラインっ！私は決めましたっ!!」

愛するべき祖国、家族、そして、同胞たちを守るために、私は、即刻、この留学を取りやめなければならない!

私の父は、志こころざし半ばで帰国する私に対し、激怒することでしょう。

シユトラール候補として、私に期待してください。くださったクーヘン国に対しても、今は、申し訳ない気持ちで一杯です。

しかし、そんなことはほんの瑣末さまつのこと。

母国がこのように最悪の未来に向かって突き進んでいこうとしている、この大事な局面に、私は、こんなところで、のほほんと過ごすことなんてできません!」

お、おう。

：：これは予想以上に、うまくいったな。

直司一人でどうにかなると考えるほど、私も楽観的ではないが、これで、日本の陰惨いんさんな未来を、少しでも変えることができれば、こんなに良いことはないだろう。

直司は涙を流しながら、私の肩を抱いた。

ん、へ?い、息が：：。

「ああ、フロイライン! いや、マリーン殿とお呼びしてもいいだろうか!

あなたあなたの叡智えいち、その素晴らしい能力に私はどれだけ救われたことか!

マリーン殿は、私の祖国の恩人、そして私の恩人だ！　そして、私の……」
た、たんま、たんま！

息、できない。

マリーン、身体、小さいし、つぶれちゃうよ！

それに、直司くん、あなた、いい加減、服着てくれない？

私は、直司の半裸の背中を必死にバンバン叩いた。

「ふ、これは失礼をした。マリーン殿。」

つ、つい、感情が、昂たかぶってしまつて……」

直司は顔を真っ赤にして、私の拘束を解いた。

ふひー！ やつと息がつける。

男の人の力つて、時に怖いよね。

ラビィちゃん発動前に逃れられて本当に良かった。

私はその後、ぶんすかと、直司に向かつて、お説教モードに入ってしまったので、すぐ近くの草むらでガサゴソツと音がして、何者かが、足早に立ち去つてゆくのに気がつかなかつた。

魔王、襲来

「どういう事だ、マリーン！」

怒髪どはつてん天を衝つく勢いのルードヴィツヒが昼下がりの教室に怒鳴りこんできたのは翌日のことだった。

「…… どうされたんですか、ルードヴィツヒ？」

ルードヴィツヒと私は二人とも、王族と繋がる公爵家の人間で、当然、旧知の仲である。

「どうもこうもない、マリーン！」

貴様、『東洋から来た、私のお気に入りの小鳥』に何をしたっ！」

ぶふっ！何その表現。

「マリーン！貴様、今、笑ったな？笑っただろ！」

我が愛すべき《東洋の小鳥》ナオジは、今日限りをもって、ローゼンシュトルツ高等学園を中退。

一身上の都合でシュトラール候補まで辞退してきたんだぞっ！」
おおっ！

兵は神速を尊ぶ。

日本のこれからのために、ぜひ頑張つてほしいものだ。

「私が、理由を聞いても、故郷が危機に瀕してゐるから、とか、

自分は同胞たちのために、母国に帰つて、戦わなければいけないんです、とか言つて、
 儂げに微笑み返されるし、それに、あいつはっ！

あいつは……まるでお前のことをっ……」

ルードヴィツヒは、顔を真っ赤にして、わなわなと震えながら、こちらを睨んでくる。
 「と、とにかく、お前だけは、許さないからな。」

覚悟しておけよ。」

そう言つたルードヴィツヒは、マントを翻し、立ち去つていった。

嵐が去つた後の教室は、シン、と静まりかえつていた。

……ふーっ、やれやれ、いずれは、彼と激しくぶつかることになるとは、思つていたけど、こんなに早く来るとは。

それほどまで、直司の存在はルードヴィツヒにとって、大きかった、ということなのだろうか。

背中に、ジトリと、冷や汗が流れていた。

私は相当、危ない橋を渡っているのだろうか？

この国においてシュトラールの意見は絶対的な力を持つ。

彼に、カーレンベルク家を陥れる口実を作らせてしまったのだろうか。

大丈夫、大丈夫だ。まだ、導火線に火がついた程度だ。

爆破にはまだ至っていないはずだ。

シュトラールに近づくことは、危ない橋を渡っていることと同じことであることは最初から分かっていたではないか。

それにこれは、没落フラグを根本から崩すために、必要な一手であったはずだ。

こんなことで、ゲームオーバーになるとしたら、ハナっからマリーンの没落を防ぐのは不可能だということになる。

これは、もう、ミツションインポッシブルだ。

これからも、私は際どい道を模索していくことになるだろう。

しかし、それをやり遂げなければ、私や、ミンナ、オーガスタの家族や大切な人たちが、全員、不幸になってしまう。

そして、この国は戦乱に巻き込まれ、幾人もの尊い命が失われることになる。

それだけは、この身をもって、防がなければならぬ。

こんなことで動揺してはいけないんだ。

冷静に、対処しろ。

これは爆弾だ。

爆破すれば、確かに一発だが、

手順を踏めば、必ず解除できる。

私は震える手を押さえながら、

改めて、今後のことに、思いを馳^はせるのだった。

保健室のお姉さん

「あつ、痛っ！」

ローファーから、上履きに履き替えようとした時、足の裏に鋭い痛みを感じた。

上履きを見ると、大きな画鋲がびょうが貼り付けてあった。

古典的な嫌がらせだが、思いつきり踏んでしまったようで、傷口から、どぼどぼと流血している。

「マリーンさん、どうしたんですかっ！」

私の不審な様子に気がついた、門番が駆けつけてきた。

「これは、酷ひどい。

すぐに、止血をしなければ！

ちようど良かった。あなたに引き合わせたい人がいるんです。」

あつ、と声を出す暇もなく、私の体は軽々と門番に持ち上げられた。

いわゆる、お姫様抱っこというやつだ。

女子生徒の羨望せんぼうと嫉妬しつとの視線が降り注ぐ中、私たちは学園を走り抜ける。

ううう、お嬢様抱っこなんて、前世通しても、初めてだよ。

… 何だか、恥ずかしい。

「あらあ。男前の門番さん、今日は私に何の用かしらあ。」
入った先は学園の保健室だった。

ナイスバディの白衣のお姉さんが、上目遣い^{づか}に、門番を見つめる。
うわあ、セクシーダイナマイツ！

こんな先生、中学の時にいたら、毎日でも通うわー。

「… あいかわらずですネ、フランツィスカ。」

それよりも、早くこの子に応急処置を。」

「あらっ、この子、ひどい怪我。」

この傷は突起物かしら。

すぐ、消毒して、止血しなければ。

ちよっと染みるわよ」

うっひゃあ。確かに染みる。

しかし、先生は、こんな傷には、慣れているのか、応急処置はスムーズに進んだ。

結局、最後には、片方の足は包帯でグルグル巻きにされてしまった。

ちよっとした大事^{おわごと}になってしまったなあ。

「あら。あなた、マリーンちゃんでしょ、カーレンベルク家の。」

「そうですね、フランシス。」

あなた、この子に何か、言うべきことがあつたんじやありませんか？」

門番が、フランシス先生を睨みつける。

「うう．．．分かつたわよう。」

ほんの出来心よ、出来心。」

「出来心で、済みますかっ！」

教師の立場を利用して、生徒の個人情報いちせいとを一生徒に漏洩ろうえいさせるなんて、前代未聞です

よ!!」

「ごめんって。だつてえ、面白かつたんですもの、あのエリカつて子。」

熱心にあなた達の電話番号、聞いてくるもんだから、つつい教えちやつたのよう。

あの子、それで、何をするつもりなのかな、つてちよつと面白そうで、オホホホホ！」

「全く、あなたつて人はっ！」

これは大問題です。

学園長に報告させてもらいますよ。覚悟することですな。」

「ちよつ、たんま、たんま。それだけはやめて？」

本当、ゴメンつてえ。もうしないからあ。」

そうか、ヒロインが私たちの電話番号を知っていたのは、この人のせいか。

そういえば、この人、ゲームの中では、ちよつとしたお助けキャラで、ヒロインに、攻略対象者の情報や、好感度を教えてくれるんだった。

わかりやすくいえば、『とき〇モ』でいう好雄よしおキャラね。

よく考えてみれば、この人のしてたことつて、生徒の個人情報^{せいの}を他の生徒に晒さらしているわけだから、ちよつとした事案じあんになってしまいうわね。

まあ、しかし、私には、ちゃんとした謝罪（？）らしきものをもらい、もう、ヒロインに情報を教えないことを約束してくれたし、あとは迷惑をかけたミンナとオーガスタに謝ってくれば、私的にはもうそれでいいかな。

「甘いですね、マリーンさんは。」

門番は、呆れたような顔で私を見た。

ヒロインとのことも、門番にとつては、「信じられないほど甘い」処置だ、と言つていた。

こちら辺は私が『ナアナア気質』の元日本人というのも関係しているのかもしれない。あまり、事を大きくしたくないっていうか。

「ところでさー、マリーンちゃん。

ずつと気になってたんだけど、

そのいつも持ち歩いてる、ウサギのぬいぐるみつて一体、何なの？」

フランス先生は、この短時間で、すっかり私の事を友達認定したようである。あー、それ聞いちゃう？

一応、カーレンベルク家の秘匿事項ひとくだしなあ。

ミンナも気になるって言ってたけど、傍目はためから見れば、完全に変な人だもんね。

「これは、私が作ったんですが、中におまじないがこめられてるんです。

… 一種のお守りと申しますか。」

神秘研究部っぽさを出してみただが、… ちよつと言いつつ、諷刺としては苦しいか。

外側は私のお手製だし、中身が、おまじないというのも、あながち、間違いではないだろう。

お父様、心配性なんだよなあ。

ふと見ると、ラビイちゃんの目がキュイーンと光った気がした。

うう、私、なにげに愛されてるなあ。

嫌がらせ

あの画鋏事件以来、上履きを履く前に、ちゃんと中身を確認する癖がついた。

そして、案の定、3日に一回は入ってるんだよなあ。怖つ。

なんか最近、教科書とか、ノートとかの失くしもの、多いし。

体操服が汚れていた時もあったっけ。

え、悪役令嬢よね？ 私。

「わたし、嫌われてるのかなあ。」

ほうつ、とため息をつく。

今は放課後の保健室。

フランシス先生に足の怪我を診てもらっているけれども、ほぼ完治しているそうだし、
包帯も取ってガーゼだけでいい、と言ってた。

やっつと、クツ、履けるー。

「ん？ そんなこと、ないんじゃない？」

あなた、かなり、人望ある方よ。」

と情報通のフランシス先生が請け合う。

ちなみにフランシス先生とはあれ以来、仲良くなつて、怪我のこともあるけれど、私は頻繁ひんぱんに、保健室に寄り付くようになった。

：：べつ、別に、クラスに友達がいなくてわけじゃないんだからね！

彼女の話は、すごく面白くて、特に父親である校長先生の武勇伝を聞くのが私は好きだ。

あの縦ロールにはあんな秘密が：：うぶぶ。

門番とは、学園時代からの悪友らしい。

なぜか、彼の本当の名前を聞いても首を振るだけで何も教えてくれないのだが：：。

「：：うーん、すると、ルドヴィツヒのやつかな。アイツ、私のこと嫌いだし、直司のことで私を根に持つてるし。」

そうそう、直司といえば、先週、日本に発つたよ。

私のこと、すごい感謝していて、必ず手紙を送るってさ。

万一、開戦の運びになって、真珠湾を攻撃する時は、石油タンクを狙え、とか、暗号機b型に過信をするな、とか、「AFが水不足」という通信があつても、絶対に無視しろ、とか、色々、ピンポイントでアドバイスしたよ。

これで少しでも日本の運命が変わるといいな。

本当は、戦争を避けられるのが一番なんだけどね。

「ルーイは違うと思うわよ。どちらかというところ、女の手口ね、これは。」とフランシス先生。

でたよー、「女は陰湿」論、私は嫌いなんだけどなー。

社会人になってみれば、分かるけど、男も敵に回すと、大変陰湿ですよ、ハイ。

個人的には女の数倍は怖いと思う。

でも、この場合は、私もルドヴィツヒが、犯人ではないと思う。

アイツだったたら、本気で私を潰そうと思えば、こんな、チマっこい事をしないで、直接、私と私の家に大打撃を与えるように仕向けるだろう。

正直、そちらのほうが百倍怖かったりする。

とりあえず、今は、そんな実害があるわけでもないし、できるだけ、注意していきましよう、つてことになったわ。

門番とミンナは結構、心配してたんだけどね。

ま、大丈夫でしょー。

とあるサバサバ系女子の独白

私の名前はオーガスタ・フロイライン・マルクグレーフィン・ヴォルフエンビュツテル。

わがヴォルフエンビュツテル家は、クーヘン北西部に位置するファイゲに代々、領地を有している由緒正しき子爵家。

ファイゲは漁港に面している土地で、昔から、クーヘンの漁業を支えていることでも名だ。

また、最近では風光明媚な山岳部も有効活用され、風車などが設置され、クーヘン全体に電力を供給している重要な土地にもなっている。

私の兄、テイルクは元シュトラー候補生で、現在、使長候補として、現シュトラー・クラウディオ様の補佐として実務を担当している。

同学年では唯一のシュトラーであり、容姿端麗、成績優秀者。

私にとって、頼りがいのある、自慢のお兄様。

一方、下の弟、ヴィルヘルムは、引つ込み思案で、少々内気なところがあり、姉としては心配だな、と思う。

逆に、私は男勝りの性格をしているので、父上からは「姉弟の性格が逆だったら」なんてよく言われている。

サバサバした私の性格が受けるのか、バレンタインなんか、女の子なんかに、「お姉さま！」なんて言われて、たくさんのチョコレートを毎年、もらう。

そのせいとか、父上には、入学前に、「ローゼンシュトルツで女らしさを学んで来い！」なんて、言われる始末…。

本当っ、いらぬお世話だ。

女らしさなんて…嫌いだ。

反吐が出る。

私はタツパがあるほうだから、十代になってから、女らしい凹凸が体に色々出るようになってきて、それがすごく醜くて、嫌で嫌でしようがなかった。

なんどもそれを押しこめようと、サラシを巻いていた時もあつたけど、出るものは、結局出て来るし、私はあきらめることにした。

あの女：マリーン、とは領地が近いこともあつて、小さい頃から、交流があつたんだけど、あのブリっ子キヤラが、どうも、好きになれなかった。

いつも可愛い子ぶっちやつて、本当にウザつたらしいたらありやしない。

私の一番嫌いな『女の子してる』、女の子のタイプだ。

それでも相手は、公爵家、それも、建国王・初代リヒャルト王に繋がる正統なる家系。そもそも最初から、うちが対等に關係を断つたり、付き合えたりできる相手ではない。彼女の空気の読めなさや、ブリっ子ぶりに、呆れ半分、我慢しながら、今まで、付き合ってきた。

全く、あの子は、私がいなければ、仕方ないんだから。

そんなマリーンがローゼンシュトルツに来てから、どこか、少し、おかしい。

ブリッ子風な喋り方はすっかり、なりをひそめ、それどころか、新しく友達になったミンナに対し、心から気づかい、クラウス嬢に対しても、寛容な態度を見せたりして、大人らしく振る舞おうとしている。

そんな彼女の様子に、私は一抹の不安を覚える。

私は今まで、この子を見下してきた。

どこか、彼女のことを、無意識に、アラ探しをして、彼女のブリッコぶりやワガママな様子に呆れたふりををして、自分は違うんだ、サバサバしてるんだ、と優越感にひたり、自分の価値を守って安心していたのではないだろうか？

女子が唯一の跡継ぎということで、カールベルク家の地位は低迷したと聞いている。

当然、周りの貴族たちの彼女に対する当たりは強いものだったのではないかと思う。

もし、あのブリツ子の仮面が、周りの心無い彼女に対する悪意から、守るための彼女なりの防衛手段だったとしたら？

自分は今までこの子の何を見てきたんだろうか？

…つたく、本当に、あの子って、ほっとけないんだからっ。

そんなことを考えている時、片方の足を包帯で巻き、スリッパを履いたマリーンが教室に入ってきた。

周りのクラスメイトが「どうしたの？」と口々に心配する中、マリーンは困ったように「大丈夫、大したことないから」とみんなに微笑みながら、言う。

え、何そのケガ？ とても、大丈夫そうには見えないんだけど…。

ふと、なぜか、教室のある方向から来る視線が気になった。

あの方向は、確か…。

そして、私は見たのだ。

エリカ・クラウス男爵令嬢がニヤリと笑いながらこちらをうかがっているのに。

秋期休暇

「もうすぐ、秋休みだねー。」

とミンナが私に寄りかかりながら言う。

ミンナとは席も近いことがあって、休み時間のたびにこうして駄弁りながら過ごしている。

そこっ、役得やくとくいなし。

たしかに、美少女を胸に抱く感覚は、やみつきになるけどね。ぐへへ……。おほん。

そういう場には、最近では、必ず、オーガスタも一緒にいる。

どうやら私たちの中で、3人1組がすっかり当たり前になってしまったようだ。

それにしても、オーガスタ……。あなた、席、ちよつと遠くなかった？

「そうだねー、どっか、行く？ カーニバルも今週末から始まるんだよね。」

学園都市のカーニバルは秋休みの開始とともに始まり、なんと、翌年の2月ぐらいまで続く、長いイベントだ。

カーニバルの初日ともなると、パレードや出し物も目白押しで、これを見に、クーヘン中から人が集まる。

中には、高価なピンクトリユフを使った料理の屋台も出るというのだから、見逃せないだろう。

「今、やってる活動もなかなか面白そうだしね。『橋の恋人』だっけ？」

この頃の活動写真は、トーカー五割、無声十弁士五割といった感じ、まだほとんど白黒だけど、なにせテレビのない時代なので、メジャーな娯楽の1つだった。

私的には、弁士の講談がなかなか面白くて、「これ、絶対、関係ない話でしょー！」と違つた意味で結構楽しんでる。

『橋の恋人』って、ロマンスものなのよね、ス・テ・キー！」

と、ミンナもすっかり乙女の顔だ。

かわええー！お持ちかえりしたい。

「それなんだけどね、マリーン。久しぶりにファイゲうに来ない？」

ヴイルもあなたのこと会いたがってるし。」

お、ヴイルが？ あいつ、オーガスタの弟にしては、可愛いんだよな。

引つ込み思案で少々内気なところがあるけど、本が大好きで、私でも難しいと気後れするような本をあの年ですでに読みこなしている。

ヴォルフエンビュッテル子爵は領主候補としては覇気はきがない、と嘆いているようだが、将来は天才肌の思慮深い領主として、案外、立派につとめあげるのではないだろう

か。

まあ、これからの教育と成長次第だけどね。

私とはウマが合ったようで、前回、来たときにすっかり懐かれてしまった。

っていうか、ブリっ子演技、見事に見破られてしまったなあ。

マリオンとしても、比較的、気の許せる相手として、漠然と将来の不安について、話しあったっけ。

この国の女性のキャリアパスはすごく狭く、限られている。

「女は家庭に入り、夫を支えるものだ」、という概念が広く一般的だし、女性の職業でも高い権威は、ドルイドの巫女だったりする。

妙齢の貴族の女性であれば、なおさら、地位のある男性との結婚を前面に押し出される。

女性官僚など、この国では、夢のまた夢であろう。

「マリオンなら、そんな壁を平気で突破する、そんな気がするんだ。」とヴィルは興奮で、頬を赤くしながら、言ってたっけ。

あの子、年の割りに聡いから、話していると、なんか元気が出て、どうにもならないことでも自おのずから解決策が見えてくる気がするんだよね。

まあ、あくまでも気分的なものなんだけど。

うーん、なんか、楽しみになってきたな。

「…私も、行っていいの？」 おずおずしながら、ミンナが聞いてきた。

まだ、彼女の中で、少し、貴族に対して、遠慮するようなところが残っているようだ。

「もちろん、ミンナ。歓迎するよ！」と、オーガスタが気持ちよく答える。

ミンナの顔がパアつと華やいだ。

それを見ていた男子生徒たちが次々とノックダウンしていく。… 合掌。

「なんだか、楽しい、秋休みになりそうね！」

そんなわけで、私たちは、秋期休暇のしばらくの間、オーガスタの実家のあるファイゲでしばらくお世話になることになった。

湖上の旅

「うはっ！ いい風。」

湖から吹きつける風が、気分を爽快にする。

ここは、アナナス湖。

澄んだ湖面には、魚たちが気持ちよさそうに泳いでいるのが見える。

個人的には『霧の摩周湖』に匹敵するのではないかと思うぐらい、透明度の高い綺麗な湖だ。

ローゼンシュトルツのある学園都市は、四方をこのアナナス湖に囲まれている。

北上して、ファイゲ・トラベオ方面に行くには、定期便の船で、湖を渡って、湖岸にある駅舎えきしやで馬車に乗り換えなければならない。

アナナス湖のクルージングは、貴族の間でも人気の高い観光レジャーになっている。

せっかくなので、甲板かんばんに出て、ミンナたちと水遊びを楽しむことにした。

「なんだか、平和ねー。」

ほうっと息をもらす、オーガスタ。

入学以来、電話ハラスメントやら、ルードヴィツヒ襲撃、画びよう事件とそれに続く

匿名の嫌がらせ行為など、私の身の周りで色々起こった。

ヒロインのこともあったが、大部分は、私の身から出た錆さびというのが大きい。

オーガスタにも巻き込んでしまったり、心配をかけてしまったりしたようで、なんだから申し訳ない気分だ。

この旅が私たちにとって、少しでも気晴らしになるといいな。

「ねえ、マリーン。」

「ん、何？」

「あの子、エリカ・クラウスには気を付けるのよ。」

ヒロインちゃんなあ…。

門番のアドバイスに従い、電話番号を変えてから、私たちがヒロインちゃんから非常識な時間帯にコールを受けることはなくなった。

フランス先生にもキツク言い含めているので、二度とヒロインに私たちの電話番号を教えることはないと思う。

その代わり、前にもまして、シュトラール3人に対しての電話の量が増えているという。

その内容は、ほとんど他愛のないものばかりで

なんでも、コーヒーのおいしい銘柄について聞いてきたり、

上演中のバレエのプリマドンナの感性の是非についてたずねてきたり、
そうかと思えば、「カーニバルで、一時の夢を誰かと共有する」という己の願望を懇々
と語りだしてくるのだという。

私たちの時のように夜中にかかってくることはないものの、忙しいときなんか
にそれをやられると、外面そとづらだけはいいはずの、シュトラールもさすがに我慢ならなくなつて
くるそうだ。

：ゲームでは、何とも思わなかったけど、これって、りっぱなイタズラ電話よね。
例によって、ルードヴィツヒだけは、なぜか、除外されている。

本当に、悪運だけはいいやつよね。

それにしても、ヒロインちゃん、シュトラールの攻略、進んでないのかしら？

なんか、見てると、手当たりしだい、出会った人に電話してるようにしか見えないの
よね。

ひよつとして、逆ハー狙いなのかしら？

：うーん、でも、それにしては、やけに、攻略対象者たちから、鬱陶うっとうしがられてい
るような：。

体型もいぜんとして変わらないみたいだし：。

そうこうするうちに、定期船は湖岸のポートに着岸した。

ヴォルヘンビュッテル家

「これは、これは。マリーン様！」

遠路はるばる、よくぞ、おいでくださいました！

さぞ、お疲れのことでしょう、さきつ、こちらへ：」

湖岸からさらに6時間、馬車に揺られ続け、ヴォルヘンビュッテル子爵邸に着いたころにはすでに夕方になっていた。

連絡がすでに届いていたのか、当主のライヒアルト・ヴォルヘンビュッテル子爵自ら、玄関で待ち構え、揉み手をしながら、平身低頭、マリーンに挨拶をする。

子爵と公爵ともなるとその地位の差は歴然だ。

私があるときは毎回、こんな感じである。

隣のミンナはポカーンとしながら、背では小さいはずの私の袖をギュつと掴んでい

る。
ナニソレカワイイ。

「ヴォルヘンビュッテル子爵。丁重なお出迎え、恐れ入ります。

秋期休暇の間、私どもを受け入れてくださり、ありがとう存じます。」

「いえ、いえ、マリーン様がそのような、お気遣いをなさらずとも…」

ホールに入ったヴォルヘンビュッテル子爵が、あわあわしている。

ん？　なんだ、この既視感デジャヴは？

この構図、とーつても、見たことあるのよねえ。

……あつ、アレか。続編の『誇りと正義と愛』で、子爵がパーティーの途中で容疑をかけられ、手錠をかけられるスチル絵と少し似ているんだ。

そういえば、場所はこのホールね。

確か、レジスタンス側に武器・戦車を無償提供をして、それを実績として、他国にも販売しようとしたのが、没落の原因だったか。

うーん、でも、私、商売って、普通そんなものだと思うんだけどなあ。

むしろ、レジスタンス側に配慮しすぎているというか…。

しかも、それも、まだ、子爵が未遂のところを、ヒロインが「街で小耳にはさんだよ」って証言だけで、子爵家が没落してしまうという…。

ドイツ軍とクーヘン軍を行ったり来たりしているヒロインちゃんだけには言われたくない話だよなあ。

まあ、シユトラールに気に入られれば、この国ではなんでもアリになってしまうんだ

ろうけど、子爵やオーガスタのことを考えれば、何ともやるせない…。

後ろのほうでは、対照的に、『シュトラール候補様』が、不遜な態度でマリオン達を見下ろしている。

公爵令嬢相手に、ハイコラする父親の子爵と、逆にふんぞり返っている息子のシュトラール。

なんとも悲しく滑稽こっけいな構図だが、この国の縮図を見事に表していると思う。

その後ろの美青年、オーガスタの兄は名をティルクといい、6年前にシュトラール候補として選出された英才だ。

ローゼンシュトルツを卒業してからは、現使長のクラウディオ・ブライテンバッハのもとで、補佐として働いていて、順調に、出世街道を突き進んでいるようだ。

シュトラールに選出されてからのコイツの態度の豹変ぶりといい、マリーンの時から、気にくわないところがあったが、前世の知識を知ってからは、その直感はあるが間違っただけはなかったな、と思う。

「ずいぶん、間違えたね、マリーン。」

…まるで、マリーンじゃないみたいだ。」

ティルクの言葉にギクリとする。

私はたしかにマリーンには違いないが、前世の記憶がよみがえってからは、OL時代の別人格が、元のマリーンの性格と入り混じっている状態にある。

さすがに様子がおかしいことを見抜かれてしまったのだろうか？

「…そ、そんなことは、なくつてよ、オホホホホッ！」

困ったときの高飛車お嬢様様である。

今になってみると、ブリツ子演技は色々とハードルが高すぎるのよね。

「ふーん。…やっぱり、マリーンか。」

ふふっ、さすが、兄妹。

あつさり騙だまされてくれるな。

私ったら、ナイス演技！

わたしは…女優！（キラーン）

ふと、横から絶対零度の冷たい視線を感じる。

…オーガスタ、そんな目で私を見ないで、お願いだから…。

本当、おそろしい子っ！

「あれ、ヴィルヘルムはどこ？」

オーガスタが子爵夫人に尋ねる。

「…それがね、あの子、ずいぶん前から、部屋に閉じこもってるの。」

「え!？」

私とオーガスタは思わず顔を見合わせた。

ヴィルヘルムの理由

「ヴィルが部屋に閉じこもってるだつて!？」

オーガスタが驚きながら、夫人にたずねる。

ヴィルはたしかに引つ込み思案なところがあつたが、照れながらも、私にきちんと挨拶するし、引き籠もりというタイプではないはずだ。

「そうなの。」

あなたがローゼンシュトルツに行つてから、一週間ぐらい経つた頃のことだつたかしら。

急に部屋から出てこなくなつて…

…ひよつとして、お姉さんがいないから、あの子寂しくなつたんじゃないかしら。

ねえ、オーガスタ、あなたから話してくれない?

私が聞いても、あの子、何も話してくれないのつ。

うううう…」

夫人が嗚咽おえっを漏らす。

いつの時代も、母親の涙には何かウルツとしてしまうものがある。

「とにかく行ってみよう。マリーンも、来て。」

オーガスタがちよつと強引に私の手をとって、ホールの階段をのぼる。
…私も行こうと思つてたから別にいいけどさ。

ふと、階段上の右奥の部屋に明かりがついているのに、私は気付いた。
「ねえ、オーガスタ。あの部屋って使われてなかったんじゃないの？」

「ああ、アイザックだろう。」

お兄様の友人だよ。

…そういえば、マリーンは会つたことがなかったか。」

あの男がこの家にいるのか！

とんでもない話だ。

マリーンは怒りに身体を震わせた。

ヴィルヘルムの部屋の前につくと、

「この先、許可なきものの立ち入りを禁じる」

と子供らしい字で札に書いてある。

思わず、私はクスリと笑うが、オーガスタに睨まれてしまった。

シーマせんつしたっ！

だってさあ、ちよつと可愛いじゃん、こういうの。
札に構わず、オーガスタはゴンゴンとドアを叩く。
ちよつ！そんなに強くやらなくても…

「ヴィルヘルム！ 私よ。」

姉さんが帰つて来たのよ。

早くここを開けなさい。」

おおつ、ド直球だ。

引き籠もりの弟に対して容赦ねー。

さすが姐さん、センシティブさのカケラねーわ。

そこに痺れる、憧れるウ!!

「放つといってくれよ、姉さん。」

と中からくぐもつた声が聞こえる。

やはり、反抗期か？

「開けなさい！」

ヴィルヘルム・ヴォルヘンビツテル!!

マリーンも来てるのよ!!」

「えっ？マリーンが!？」

その途端、ドアがちよつと開いて、何か中の人と目があつたな、と思うと、私の手が掴まれ、身体ごと強引に中の部屋へと引き込まれる。

「えっ！ちよっ!!」

ガチャンと扉が再び閉まる。

私は予想外のことに対応できず、顔からビターンと床に倒れてこんでしまった。

…うん、こういうところ、姉弟でソツクリだよ。

「うっ、ごめん。」

ヴィルヘルムが心配そうに私を覗き込む。

「まさか、マリーンが来るとは思わなかったんだ。」

え、扉の前のお姉さん、放置ですか？

実の弟にガン無視されるの辛いだろうなー。

さすがに可哀想…。

ゴンゴンゴンつと激しくドアが打ち付けられる中、ヴィルはチツと舌打ちをする。

「姉さんには理解できないよ、うちの状況は。」

マリーン、君なら気がついたんじゃないだろうか。

階段の右奥の部屋のこと」

あつ。

私も察してしまった。

ヴィルは知ってしまったのか。

あの男の素性を。

「英国のスパイが、自分の家に潜んでいて、

クーヘン国を嗅ぎまわっているっていつたら、

流石にいい気はしないものね。」

ヴィルは目を丸くしていた。

「マリーンはそんなことまでわかるのか……ハハッ、やっぱり敵^{かな}わないな。

僕なんか、つい最近気付いたばかりなんだ。

兄さんが、昔から懇意^{こんい}に付き合っていた作家気取りの胡散臭い男が、

まさか、英国の工作員だったとは……

兄さんは国を売り渡すつもりなのか!？」

そうよねー、やっぱり、そう思うよね。

私もこれはマズいと思うのよね。

というか、マリーンとしては許せない。

将来、国の運営を一手に引き受け、絶対的権力を握るシユトラールが、

あまつさえ、外国のスパイと仲良くし、諜報活動に協力しているという現実。

はああ、何で、シユトラールって、こうロクでもないやつばかりが選ばれるのかしら。やつぱり、顔で選んでるのが一番イケナイんだと思うのよね。

シユトラールの選任を与えるドルイド僧って巫女が担当してるんだけど、

昔から自分の好きな顔のタイプで選んでるだけじゃないか、って噂が絶えないのよね。

そう考えると、今の、政治形態のイビツさを招いているのは、所詮、女なのかもしれないわ。

そんなわけで、私はヴィルト、アイザックをこの家から追い出す方策を話しあった。

…といつても、おそらくは、何のヒネリもない、真つ向勝負になると思うんだけどね。

そして、ヴィルは、私がいるなら、と部屋から出てきてくれた。

オーガスタには「どんな魔法を使ったんだ。」と驚かれ、夫人からは、すごく感謝された。

アイザックという男

「プロージット！」

「プロージット!!」

その後、私たちは、ヴォルフエンピュッテル家の夕食会に招かれ、家族一同と乾杯の音頭をとることになった。

なんか、こう、さかすき杯を床に叩きつけたい衝動に駆られるなあ。

帝国フリークの私としては『ジーク・カイザー!』ってな感じで。

…今はやめとこう。

クーヘン産のワインは有名だが、未成年の私たちはグレープジュースで代用する。クーヘンでの飲酒年齢は日本と同じく20歳はたちからなのだ。

でも、私、元OLなんだけどなー。

お酒が恋しい…。

「へー、お嬢さんが、マリーン・カーレンベルクか。」

いけしゃあしゃあと夕食会に混じっているアイザックがマリーンの目の前に座っている。

サー・アイザック・キャヴェンディッシュ。

茶色の分け目ヘアーに無精ヒゲを生やしたイケメン中年である。

雰囲気だけはエ〇アでいうところの加地さんにメガネをかけた感じだろうか？

実際に見てみると、そんなに似てないけど…。

『耽美夢想マイネリーベ』においては、シユトラール以外の唯一の攻略対象者である。

説明書にも載っていない隠しキャラで、ヒロインは、2年目の夏休みに、オーガスタの別荘で彼と遭遇することになる。

正体は言うまでもなく、英国の工作員であるが、もともと、彼は、イギリスの没落貴族の生まれで、この男に愛国心など、ハナからない。

ただ、家族を養い、貴族としての生活を維持するために、『まつとうな仕事でない』情報機関の仕事を選んだ、とヒロインに語っている。

ヒロインは彼の正体を秘密にすることをその場で約束する（この時点でマリーンにとっては、噴飯ものだ）。

彼のルートに行くためには、ヒロインは、学園期間中、英国スパイである彼と手紙の文通をして好感度を上げていくことになる。

その中で、ヒロインは彼の気を引くために、『アイザックへの手紙に、『涙の跡』をつけたり、『キスマーク ムチュ〜』などの小細工を弄しながら、卒業式でのゴールインを目

指していく。

ヒロインのこのような外国スパイとの密通行為は、マリーンにしてみれば、国への重大な裏切り行為であり、スパイ共謀罪すら成り立つのではないかと思える。

未来のことではあるのだが、前世で、この事実を知っている私は、友人として、エリカにこのような反逆罪を犯させないように、未然に防がなくてはならないだろう。

アイザックの家庭事情はマリーンには、わからないわけではない。

特に、私には『没落貴族』というキーワードにピンポイントで共感を覚える。

しかし、この国を守るためには、こんな輩やからを野放しにしていはいけない。

2年後にはルードヴィツヒによって戦争がしかけられ、たとえ、運よく、それを避けることができたとしても、4年後には、ヨーロッパ中を戦火に巻き込む、第二次世界大戦が待っている。

クーヘンの国力、軍事力などの機密事項が、こうもやすやすと外部にもれ、丸裸にされるのはあまりにも危険だ。

それも、クーヘン中枢の政治をにぎる、シュトラール自ら、すすんで情報を与え、協力しているのだから、とんでもない話だ。

アイザック・エンドでは、アイザックは、ローゼンシュトルツ学園の卒業パーティーに乱入し、主人公とダンスを踊ることになる。

そして、国の重要人物が集まり、セキュリティが厳しいはずの学園に英国スパイ・アイザックを入れるために手引きをする人物がいる。

前世で見た、『アニメ版マイネリーベ』によると、その人物こそ、シュトラール候補、ティルク・ヴォルフエンビュッテルその人だということだ。

これ以上の犯罪は、マリーンとして見過ごすわけにはいかない。

「キレイな手をしてるよね、アンタ。
うらや羨ましいね。」

公爵令嬢だから、今まで、苦労という苦労も経験してこなかったんだろうなあ。」
とアイザックがのたまう。

「自分だけが苦労している」と思っているアイザックならではの発言だ。

しかも、そんな奔放なほんぼう発言が自分のチョイ悪でワイルドな魅力になっていると思いついでいるところがあるようだ。

ティルクともどもニヤニヤと顔を合わせて笑っている。

今まで、シュトラールの友人という立場から、誰も彼に何も言えなかったのだろう。

しかし、世の中には、たとえ、思っているても、口に出してはいけなことがあるのだ。

ましては、私はこの家の客人。

ちようどよかった。

非礼には非礼で返すのみ。

私はヴィルとアイコンタクトをかわす。

「きゃ〜!!」

私は前につんのめったふりをしながら、

グレープジュースの杯をアイザックめがけて盛大にぶっかける。

「お、おい！貴様、何するんだ」

「ごめんなさいい！」

私って、ホントにドジですう！」

…うう、久しぶりにこの演技するな。

「たいへ〜ん！アイザック、風邪ひいちゃうわ。

マリーン、困っちゃう。」

「僕が脱がそう。」

すかさず、隣にいたヴィルヘルムが強引にアイザックのシャツを脱がせにかかる。

うん、このために隣に座ってもらったのよね。

私じゃ非力だし、殿方を脱がせるのはやっぱり外聞がいぶんが悪いでしょ？

「や、やめろ」

一瞬の判断が遅れたアイザックの裸の上半身が衆目にさらされる。

「え!？」

「……これは。」

アイザックの肩には、刺青タトゥーが彫られていた。

そこには、英語で『我祖国に捧ぐ』と書かれている。

「ちよつと、失礼。」

呆然とするアイザックから、私は、アイザックの胸にかけられていた、銀色のペンダントのようなものをやすやすと奪い取る。

これは、いわゆる、認識票。

通称、『ドッグタグ』と呼ばれるもので、主に軍隊において、その構成員を識別するために使われている。

この時点で、彼が「売れない作家」というのは大嘘で、どこかの国の軍属の人間だということが明らかになった。

ゲーム上のアイテムだけあって、史実のイギリス軍の認識票（円形・プラスチック）ではなく、材質も形も現在のアメリカ軍に近いものではあったが、識別番号の位置はすぐ

にわかった。

「M I 6 : : 0 2 3。イギリス諜報局のものですね。」

M I 6 は、当時こそ、知る人は少なかったが、

現代では、知らない人のほうが少ないのではないだろうか。

かの有名な 0 0 7 の所属する諜報機関の名称である。

この頃は、戦争省情報部 (D M I) が細分化されて新設されたばかりの頃だったはずだ。

ちなみに M I 1 は暗号解読、M I 2 は中東、ソ連、M I 3 は東欧諸国、M I 4 は地図作成、M I 5 は防諜を担当していた。

「……どういうことか、説明してもらえますか？」

ヴォルフエンビュッテン子爵。」

静かに私が言い放つ。

「ヒ、ヒイイイ……！」

ヴォルフエンビュッテン子爵はあまりのことに気が動転している。

当然だろう。

知らなかったとはいえ、外国人スパイを逗留し、寝食を与え、保護していたのだ。

国家反逆罪として取られても仕方がないだろう。

ティルクがこちらを睨にらんでくる。

やれやれ、自分の状況がまだ呑み込めてないようだ。

「このことは、私から、お父様に報告させてもらいます。

…ティルク。あなたのシユトラール任命はおそろくなかつたものとされるでしょうね。」

とたん、ティルクの顔が蒼白になった。

今頃、自分のしかしたことに、氣付くとは…。

結局、自分のことだけなんだよなあ、この人。

将来のシユトラールがこんなやつじゃなくて、本当に良かったわ。

結局、私のとりなしで、ヴォルフエンビュツテル家の取り潰つぶしはなし、

ティルクのシユトラール内定は取り消しの上、現在行っている補佐つぼの役職も懲戒解雇。

アイザックは捕縛の上、英国政府へ引き渡しという運びとなった。

なんかさー、休暇中なのに、私、手紙書いたり、書類作ったりして、あまり休めてないよね。

そもそも、これって、私の仕事？…中間管理職になった気分なんだけど。

…うん、明日こそ、氣を取り直して、ミンナ達と遊びに行くんだー！

お
ー
!!

耽美って何ソレ美味しいの？

「わー、すごいー！」

「…壮観だわ」

今、私たちは古いにしえから風光明媚ふうこうめいびの観光スポットで知られる、ファイゲ北部きゆうりようの丘陵地帯きゆうりように
来ている。

少し見晴らしの良い場所から見える、風車群ふうぐるが私たちを圧倒する。

学園都市にも、確かに風車はあるが、主に粉ひきなどの農業目的に使用されているものだ。

どちらかというと、中世から見られるような、牧歌的なものに形は近い。

しかし、ファイゲの風車群は、この当時では珍しい、風力発電に利用されるものだ。

なんと、クーヘン国内で使用される電力の半分を供給している、という。

風車・といえ、まず最初にオランダが思い浮かぶかもしれないが、1930年代、
風車で知られるオランダでさえも、風力発電の技術は発展していなかった。

風力発電の最初の発案は、デンマークのラクルだが、電力供給の大きい交流発電を行
う火力発電が行われるようになってからは、デンマークでの風力発電は下火になってい

た。

大型風車の開発の最先端はむしろ、東の共産大国、ソヴィエト連邦にあり、1931年にヤルタ沖に建設されたW I M E D - 30は、1時間あたり100kw近くの電力を供給した。

ファイゲの電力風車はソ連製のものに改良を加え、ファイゲの景観に合うようなスマートな造りになっている。

そのため、ファイゲの風車地帯は新たな観光スポットになりつつあり、さらには近年では各国の電力担当の大臣らがわざわざモデルケースとして、この地に視察に来るほどのだという。

、といったよう説明を先ほどからヴィルヘルムから聞かされてるんだけど、

…この子、本当に11歳なのかしら？

賢いなーとは思ってたけど、ソ連製がどうか、調速装置がどうか、電気分解の効率性とか生き生きと語りだしちゃった時はさすがにどうかと思つたわよ。

いるのよねー、普段、おとなしいのに自分の興味のあることになると急に早口にしゃべりだす子。

さすがのミンナも引いてたなー。

でも、この知識量だったら、今からでもローゼンシュトルツに入学できちゃうんじゃない

ないかしら？

この子が入れば、少なくとも科学研究部はまともになりそうよね。

ちなみに、オーガスタは今日、私たちと同行していない。

今回の出来事は、兄を尊敬していたオーガスタにとつてかなりショックだったよ
うで、「考えたいことがあるので、しばらく一人にしてくれ」と断られてしまった。

ティルクは先日、ヴォルフエンビュッテル家と絶縁状態になった。

スパイ補助ほうじょの国家反逆を犯しているのです、ヴォルフエンビュッテル家としては関係を
断つのは仕方ないとはいえ、マリーンには少し冷たい対応にも思える。

これまでの反応から鑑かんみるに、今まで、子爵にとつて、息子に対し腹に据すえかねる事
が貯まりに貯まっていたのだろう。

出ていくとき、

「覚えてろ、マリーン。」

お前のことは必ず消してやる」

と捨てゼリフを吐いていた。

自分ののでかしたことに反省の色すら見せていないことに少しイラつとする。

正直、もう二度と関わりたくない。

午後からは漁港近くの魚市場フィッシュマルクトへと向かった。

いやー、私、ファイゲで何が楽しみだったか、って、実はこれなのよねー。前世思い出してから、和食が恋しくて、恋しくて…

え、嘘?! クーヘンって、和食、食べれる場所ないんちゃうの? ワー、ショック! それなら自分で作るしかないっ! と一大決心をして今に至るわけ。

和食といえば、魚料理。

マイ氷室ひむろボックスも持ってきたし、私、張り切っちゃおうよ!

「わー、マリーンちゃん、すごい。」

なんか、本格的。」

とミンナが目丸くして、私の氷室ボックスを見ている。

ふふん、もつと褒めてくれてもいいのよ?」

公爵家の財力、まだまだ、こんなもんじゃなくてよ、オホホホホっ!

ゆうげんじつこう
有言実行。

公爵家の財力をここぞとばかりに使い、

魚貝類を氷室ボックスにたんまりと詰め込んだ私はホクホク顔でヴォルフエンピュッテル家に帰っていった。

オーガスタを元気づけるには、まずは胃袋から。

今日は今までの滞在のお礼に私の手料理を振る舞うことにした。

さあ、ミンナと一緒に台所で、れつつ、くつきん♪

「私、調味料、取りに行つてくるわね。」

「うん、わかつた。：マリンちゃんつて、すごいよね。」

料理まで作れるなんて：」

ミンナは私の鮮あざやかな手並みでさばかれた鮭の切り身を見て、目を見張っている。

ふふふん：、まつかせなさいっ！

これでも私、一人暮らし長いのよー。

元OLをなめちやあかんぜよ。

日本の調味料やお米は、日本に発つ前の直司に分けてもらった。

そのお礼に親子丼とお味噌汁とかをサツと作つたら、感激してたなあ。

「：まさか、玉ひでの親子煮を、こんなところで食べれるとは：。」

それに、この味噌汁。

2番だしを取つてるではないか。

まさに日本の味！」

：お、おう。直司がなんかグルメ漫画の食レポ状態に！

「うむ、家庭的なうえに、日本の文化にも造詣ぞうけいが深い。

これなら、母上を説得できるかもしれないな。」

と何やらつぶやいていたが、聞かなかったことにしよう。

いやね、私だって、直司にあんなことされて、さすがに鈍感どんかんってわけでもないし、

帰国の日まで、直司から猛アプローチされてたのはわかってるんだけど、この時期に

日本に嫁入りはなあ。

誠実そうな人だし、太平洋戦争が回避されれば、亡命先として考えるんだけどなあ。

そんなことを、考えながら、お味噌などが保管くわんされてる納屋なやにたどり着く。

「……ん？ 納屋に人影が。

誰かしら？」

警戒しながら、納屋へと足を進める。

ガチャツ、

ギー、

バタンツ

「え!!」

ドアが閉ってしまった。」

真つ暗で何も見えない。

ドアを何度、ひねっても、開く様子はない。

この状況：何か嫌な予感がする。

ゲームの中でこれに似たイベントが思い当たった。

二年目の夏、オーガスタの別荘で：

ここは本邸なので場所は厳密には違うのだけれど、

ヒロインは今の私と同じように納屋に閉じこめられて、そして：

「あつ、火事っ!?!」

いつのまにか、納屋のあちこちに火の手があがり始めていた。

どうしよう出られない。

荷物になるからと、ラビイちゃんも置いてきた。

絶体絶命だ。

その時だった。

ドンドンドン!!

と外側から激しくドアを叩く音が納屋中に鳴り響いたのだった。

納屋での出来事

ガシヤーン!!!

と、もの凄い勢いでドアが蹴破けやぶられる。

「マリーンっ!!!」

お願いだから、返事して!!!」

見ると、血相を変えたオーガスタが、足を振り上げた状態で立っている。

「…ゲホッ、ゲホッ…。」

「マリーンね！」

…ああ、もう大丈夫よ。

今、助けるから。

そこをどいて！」

「…オーガスタ。」

ドカツドカツ

オーガスタが必死になって、脱出経路を確保しようとしている。

ああ、オーガスタが私のために…。

…でも無理かもしれない。

一酸化中毒というか…もう駄目、

…気が遠く…。

「マリーンっ!! マリーン!!」

…うう、マリーン!! しっかりして!!」

「う、うくん…。」

「大丈夫？」

…外に出るわよ!」

オーガスタが私を抱き上げる

「オーガスタ…。」

「黙ってて、煙を吸いこむわよ、

口をおさえてるのよ!!」

…ああ、オーガスタが

こんな頼りになるなんて…。

今まで、サバサバ気取ってて、

いけすかないやつだ、なんて思ってたごめんね。

本当はわかってたんだ。

あなたが友達想いのやさしい人だってことは。

私にはもつたいたいぐらいの得がたい友達だよ。

あなたが私のおさなじみでよかった。

…えっ!! あっ、柱がっ!!

…もう駄目か…。

「グツ!?…ううっ…ええいつ!!」

「オーガスタっ!!」

「ふう、平気よ、これくらい。

いいから黙ってつかまってて。」

燃えさかる柱をなぎ倒しながら、私たちは外に出た。

・・・私たち、助かったのね。

：ああ、オーガスタ、

私のためにあんなに傷ついて…。

：あら、あれは？

見ると、ミンナが必死の形相で、バケツを手にこちらへ走ってきている。

後ろにはヴィルヘルムを先頭にヴォルヴェンビュッテル家の使用人やら、家族のものがバケツを持ってついてきている。

ああ、私は恵まれてるなあ。

こんなに私を思ってくれてる人に囲まれて。

たしかにこの先、私に待ち受ける運命は過酷なものかもしれない。

でも、私はこの人たちのためなら頑張れる。

この人たちの笑顔を私は守らなければならない。

こんなところで私は、死ぬわけにはいかないんだ。

…ん、あ、あれ？

頭が重く…

・・・意識が・・・遠く・・・
・・・遠く・・・

私の体が崩れ落ちるのを感じる。

「はっ、はっはっ？」

気が付くと、ヴォルフエンビュッテル家の寝室に私はいた。

「気が付いたか。」

オーガスタとミンナが心配そうに私を見ている。

どうやら、私は気絶をってしまったらしい。

あれだけ、頑張るって思ってたのに、情けない。

「無理もないよ。」

軽い、呼吸困難に陥おちいっていたんだからね。」

とオーガスタがやさしく声をかける。

火災現場などの酸素が不十分な状態で、炭素が燃焼すると、

無味無臭の一酸化炭素ガスが発生する。

火災が続けば、一酸化炭素濃度が上がっていき、しだいに呼吸が困難になり、やがてガスが人体に悪影響を及ぼし、死にいたらしめる。

1982年に起きたホテル・ニュージャパンの火災では33人が犠牲となったが、そのほとんどが、この一酸化炭素中毒だといわれている。

「…お、オーガスタ。」

私を助けてくれて、本当にありがとう。

け、怪我のほうは大丈夫？」

「ああ、気にしないで。私の方はぜんぜん平気よ。

あんなもの唾つばつけときや、直るでしょ。」

「そ、そんな…」

… 唾つばつけときや直るって、なんて豪快な。

結構、肩にヤケドさせちゃったみたいだけど、あとできちんと治療させなきゃ。乙女の体にキズを残しちやいけない。

「そんなことより、あなたに謝らなければならぬことがあるの。」
オーガスタが切り出す。

「納屋の火災ね。あれ、アイザックとお兄様がグルだったんだ。」
そう言ったオーガスタはどこことなく哀しそうだった。

「え!？」

「うちの納屋にある屋根裏は収納用に空洞になっていてね。
性質の悪いことにそこから外に出入りできるようになってるの。」

「納屋にあなたをおびき出したお兄様は、

外にいるアイザックに合図をして、ドアを金具で固定。

あなたがその音に気を取られている間に、

お兄様は屋根裏に行き、まんまと脱出。

アイザックが納屋に火をかけ、一緒に逃げているときに、

二人にとっては運の悪いことに……」

「アイザックが逃げ出した、という報告を持ってきた

憲兵と私と父上が話しているところにバツタリと遭遇したの。

事情を吐かせた私はすぐに納屋に向かったわ。

あなたをこんなことに巻き込んで、本当にごめんなさい!」

ごめんなさいもなにも、オーガスタは私の命の恩人だ。

たとえば、オーガスタのお兄さんが私を殺そうとしたとしても、

そんなことはオーガスタの罪でもなんでもないだろう。

私は改めて、友人に命を助けてくれたお礼を言い、

オーガスタからの謝罪は必要ない、と強く言った。

贖罪は、公爵令嬢に手をかけようとした2人の犯罪者にやってもらおう。

「あ、あの…変なこと聞いていい?」

「うん、何? なんでも聞いて。」

「オーガスタの別荘、…うん、キルシュにあるやつ。」

あそこにも納屋があつたよね?

あの納屋も同じ構造してるの?」

「そうね。確かに、屋根裏スペースがあつて、同じように点検口もあるわね。どうして

?」

「…う、うん、何でもないんだ。ただ、ちょっと気になっただけ。」

なるほど。

ゲームの中で、ヒロインが納屋に閉じ込められたあの事件。どうも、不自然な点が多いなあ、と思っていたのだけれど、なるべくして起こったということか。

おおかた、容姿端麗ようしたんれいのヒロインに目を付けた、スパイ野郎が、売国兄と協力して、自作自演のマッチポンプを行って、「ヒロインの恩人」として気を惹ひこうとしたのだろう。ヒロインに敢あえて自分の素性をさらし、危険な男のスパイスを感じさせ、一石二鳥になるとでも思っていたのだろうか。

諜報員としてのプロ意識もないあの男の考えそうなことだ。

第一、人の命を何だと思っているのだろうか？

もし万一のことが起こったとしたら…

マリーンはやりきれない怒りに震えるのだった。

料理回

「はーい！ マリーンのクッキングタイム、はっじまつるよー。

おいしい料理でー、みんなー、はっぴ、はっぴ、はっぴー♪」

「ね、ねえ、マリーンちゃん、そのくんだり、毎回、必要なの？」

さすがのミンナも困惑きみである。

「…この子、時々、あざといのよね。」

オーガスタから、零下^{れいか}に達する視線が突き刺さる。

…うっ、その文句は福○遙に言ってくれ。

だって、さあ、OL時代、ま○んちゃんの真似したくても、

痛々しくてできなかつたんだもの。

今のビジュアルの時ぐらい、クツ○ンアイドル、

やらせてくれたっていいじゃない！

滞在最終日の今日こそ、ヴォルフエンビュッテル家の皆さんに

私の手料理を振る舞うことになった。

子爵からは「そ、そんな、マリーン様が自らお手を振る舞われるだなんて…勿体ない。」

などと

恐縮しきれられまくったが、「私からの感謝の気持ち」と押し切った。

残念ながら、秋期休暇用に持ってきた日本の調味料はすべて跡形あとかたもなく焼けてしまっていたが、

直司からたんまりともらっていたので、女子寮にいるメレデイスに必要なだけ持って来てもらうことにした。

ついでに日頃の慰労いろうをこめて、メレデイスにもご馳走ちせうしよう。

さて、和食の基本は「一汁三菜」というのは重々、承知しているのだが、今回は最終日ということもあって、特別な宴席にしたい。

日本の居酒屋風に、お惣菜を、一品、一品、

みんなで摘つまめるような感じで考えている。

あと、魚市場フィッシュマルクトで買い過ぎてしまった、

足の速い食材をなるべく早く消化したい、という思惑おもわくもあつたりする。まずは一品目。

鮭の切り身を用意し、塩を軽くまぶします。

「あら、料理中は案外真面目にやるのね。」

「みんなも、ためして あ・ら・もーど♪」

「…言わなきやよかつたわ。」

白みそと酒、みりんを適量、器に混ぜたら、

鮭の水気を布巾でふき取り、30分ほど漬けます。

フライパンで焼き色がつくまで焼いたら、鮭の西京焼きさいきょうの完成〜！

「いい〜におーい。さつすが、マリーンちゃん。」

ミンナは感心しきりだ。

「や…やるわね。」

オーガスタも見直したようにマリーンの方を見る。

へっへん、まっかせなさい！

クツキンアイドル・マリーン様に不可能はないのだつ（ドヤア）

「…これが、なければねえ。」

とオーガスタが横で、ため息をつく。

この調子で何品か、魚貝系を中心とした小品をつぎつぎに作っていく。

お米なんかも、炊飯器なんか当然ないので、鍋を見ていないといけない。

「はじめチヨロチヨロ、中パツパ、赤子泣いても蓋とるな」だったか。

蒸らし時間含め、2人に説明して、手伝ってもらった。

「…料理って、大変なのね。」

「でも、3人でやるのは楽しいわ!」

ミンナもご満悦である。

ああ、その笑顔、プライスレス!

脳内フォルダに保存しました。

「…ねえ、いくらなんでも、ちよつと、作り過ぎなんじゃないの?」

フィッシュマーケット

魚市場で買ってきた食材を使い切るために

かなりの分量の皿ができあがってしまった。

「まあ、使用人たちの分もあるからね」

「え!? あなた、使用人の分も作ったの?」

「うん、メルデイスも来てるし、

秋休み期間中、お世話になった分を返したいの。

私を助けるために全員一丸となって消火活動をしてくれたし。」

「あ、あれは、元々、うちのことでもあるし…。」

…まあ、いいわ、使用人部屋のほうにも持っていきましょう。」

私たちの作った手料理はヴォルフエンビュッテル家では、おおむね好評だった。素材の味を生かす和食は、質素なものを好むクーヘン人の舌に合っているのかもしれない。

さすが、世界文化遺産だね。

「お、お嬢様が、こんなにご立派になられて……ぐずぐずん」

メイドのメレデイスが感動のあまり号泣してたっけ。

…うん、今まで、心配かけて、ごめんよ。

…しかし、刺身さしみだけは、見事に、誰も手をつけてないな。

解せぬ。

やはり、生魚には抵抗があるのかなー。

いや、私が全部食べちゃおう。

はっぴ、はっぴ、はっぴー♪

門番の告解

私の名は、ユーリウス。

ここ、ローゼンシュトルツ学園高校の警備を担当しているいわゆる「門番」だ。以前は、リヒテンシュタインを名乗っていたが、数年前、ルドヴィツヒとの後継者^{ナリ}争いに敗れてしまい、現在、リヒテンシュタイン公爵家とは離縁状態にある。

家から放りだされて、生活に困り、途方に暮れていたところを、学園時代の友人のツテでエツシエンバツハ家のご厚意^{こうい}に預かり、ローゼンシュトルツ学園の警備担当として迎えられることになった。

現校長、バルトロメウス様には今も頭が上らない。

校長の娘のフランツェスカとは悪友で、今でも週末に一緒に飲みに行くほどの仲だ。

バルトロメウス様からは、嫁にやってもよい、と言われているが、彼女とはいい友達のままではないな、と思っている。

入学式の日、現リヒテンシュタイン家当主代行ルドヴィツヒから政敵^{せいてき}マリーン・カーレンベルクの監視をするように仰せつかった。

言う通りにすれば、リヒテンシュタイン家の末席での復縁も考えてもよい、とのこと

だった。

私には願ってもない話だった。

私に、マリーンの弱点やカーレンベルク家の悪巧みの一端を調査させ、ルードヴィツヒに報告、それを元にカーレンベルク家の没落へ追いやる考えらしい。

マリーンは大抵の場合、ユーリヒ財閥のご令嬢とヴォルフエンビツテル子爵令嬢の3人で放課後、学園近くの喫茶店でお茶会をしている。

様子を伺^{うかが}っていると、年相応の友達思いの可愛い子だ。

とてもルードヴィツヒの言うように、わがままで、悪知恵の働くようなタイプとは思えない。

どちらかというと、隙だらけで、お人好しに見える。

危機意識に欠けていて、なんだか、とても危なっかしい。

見ていると、守りたくなってくるような、そんな……

……と何を考えてるんだ、私は。

「ねえ、あなた、この学園の門番さんでしょう？」

ここでよく見かけるけど、ここのモカ好きなの？」

見ると、三人娘の中で、一番社交的な、ユーリヒ嬢が私に話しかけてきている。

し、しまったあ。

尾行に気付かれてしまったか。

フードちゃんとかぶってたのに。

露骨に近寄りすぎたか。

「あ、ああ。

美味しいよね、ここのモカ。

仕事終わりによく来るんだ。」

セ、セーフ!!

な、何もおかしくないことないよな？

私がここに来たって。

「うふふ…。」

なら、オーガスタと気が合いそうね。

ねえ、こつちにいらっしやいな。

あなたのこと、丁度話してたのよ。」

困惑する私の手を引つ張る、ユーリヒ嬢。

な、何て、押し強い子なんだ…。

「なーに？ミンナったら、何、ナンパしてんの？」

「ごめんなさいね、この子ったら、お節介なところがあつて…。」

いつも、一人でお茶してるあなたが気になってたんですって。」

「い、いや、私は…」

「ゴメンねー、一人でお茶したかったんじゃないの？」

私たちと一緒にじゃいやよね。(シヨボン)」

「っかはおつ、(どきゅーん) い、いや、と、トンデモナイコトデス、はい。」

そんなわけで、私は、この三人のお茶会仲間いつものまにか加えられてしまい、私自身も、結構、楽しんでる。

三人の屈託くつたくのない性格に私はいつものまにか絆ほだされてしまつて、任務のことなんか、正直、どうでもよくなつてきた。

あんな辛気くさいルードヴィツヒの陰謀なんかにつき合つてられつか!

ルードヴィツヒの計略けいりやくでマリーンさんをはじめ、こんなにも、罪の無い三人の女の子の笑顔を壊すことなどあつてはならないだろう。

私はこの子達をどこまでも守りきることを誓つた。

中間試験

学園に戻ってからは、うってかわって、平和な日々が続いている。

私への苛烈な嫌がらせも、今はなりを潜めて^{ひそ}いる。

オーガスタが言うには、お休み中に、とある方面を使ってすでに手を打ったので、もう安心していい、とのことだ。

私のいない間に……学園で、一体、何があったんだ。

……というか、オーガスタ、あなた、お休み中は確か、私と一緒にフォルゲに里帰りしてなかったっけ？

『死せる孔明、生ける仲達を走らす』ってアレかあ？

フフフと不敵に笑うオーガスタを見ると、不穏な^{ふおん}ものを感じるが、嫌がらせがなくなる分には私にとって不都合はない。

結構、ストレスだったんだよね、あれ。

靴の裏の画びよう見るのも、そろそろトラウマになつてきてたし。

人間の悪意ってやつに毎回晒されると、本当に心が参ってくるのよね。

はー、何はともあれ、助かったー。

オーガスタ様様だね、こりや。

火事の時も助けてもらったし。

あの時は、オーガスタ、カッコ良かったなあ。

女の子じゃなかったら、惚れてたな。

確実に。

そんなことをヴィルにチョロつと呟いたら、

急にカンカンに怒りだして、「姉さんには渡さないからなっ！」ってオーガスタに向

かってタンカ切ったのにはビックリした。

…直司のこともあるし、私って、ひよつとして、モテ期が来てるのかしら？

まあ、さすがに11歳の子は無いわね。

5年後も気持ちが変わってなかったら、考えるけどね。

…身長で見ると、今でも釣り合いが取れちゃう所が正直辛い。

さて、もうすぐ、中間テスト。

ここら辺は、乙女ゲームだからか、日本の学校のシステムと似ている。

ローゼンシュトルツ学園 女子部のテスト科目は

「美術」、「家庭科」、「マナー」、「文系」、「理系」の計けい五科目に分かれている。

テスト科目が、文系、理系って…

うん、かなり、大雑把おおざっぱよね。

まあ、この学校の女子の教育理念は

『女として恥じないような立派なレディーになろう』だから、あまり、女子の実学的な教育に力を入れていないことは確かなんだろうけど。

： それにしても、… ねえ。

なんでも一緒にたにしちゃうのはマズイと思うのよねえ。

この国の女性の社会進出を阻むものとして、

教育ってかなりの比重を持つてるんじゃないかしら。

ちなみに、私は、この中間テストに関してはあまり心配はしていない。

まあ、マリーンって、効能の高いびやく媚薬を独力で作っちゃうぐらいだから、もともと、学カスペックが高いのよね。

いわゆる、『リケジョ』ってやつ？

そもそも、成績よくなきや2年生の時、シユトラール委員会の補佐に選ばれないでしよ。

公爵家の権力使いたくても、この学園の校長が国王との親交も厚いバルトロメーウス様ご自身だからちよつとやそつとのゴリ押しじゃビクともしないのよね。

ただし、シュトラール特権であれば、流星に融通が効いてきちやうんだけどね。この国の怖いところよね。

マリーンの趣味が、ぬいぐるみとかお菓子作りとかだつたりするから、何なにげに家政能力とかも高いし。

ふふんつ、ラビィちゃんの外側は全て私の仕事よ（エツヘン！）

『上上下下左右左右B A』のコ〇ミ体操を毎朝実践してるからなのか、最近、授業とかの理解度が以前より良くなつてる気がするし、…うん、これは、何となくなんだけど。

…まあ、それは、あまり関係ないかもしれないけど、一番大きいのは、神秘研究部かなあ。

見つけちゃつたのよねえ。

タロットカード。

ゲームの最初に出てくる主人公の能力補正をするアレ。

部室の本棚で、なんか、後光が射さして空間があつて、すわ『文明アーティファクトの遺産』か！と思つたんだけど、出てきたのはホコリかぶつた汚い箱に入った古ぼけたカード。

でもでも、よく見ると、見覚えのある文字が…

って、日本語かい！

「あなたの守護カードは『隠者』 賢明

影で努力する演歌型

不倫、ヒモ男に注意」

これって、前世の私まんまじゃん!?

… ってか、演歌型ってなによ！

いぶし銀、コブシ効かせますってか!?

「ヒモ男に注意」 って、余計なお世話よ！

どーせ、私はだめんずブリーダーですよくだつ。

… 自覚ありますよ。嫌というほどね。

ムシヤクシヤしたので、その後、色々引いてやった。

後悔はしていない。

というか、『皇帝』とか、『女教皇』とか出始めた時からなんか、体に変化が出てきたっ
ていうか、やけに調子がいいのよね。

タロットひき放題で能力値上乘せて、これってチート確定じゃない？

私の時代ついに来た？

マリーン、嫌われ続けて20年、ついに俺t u e e始まった？

まあ、あまり、調子に乗ると、ヒロインちゃんみたいにブクブク太ったり、リエもかくやとばかりに激痩せするかもしれないので、程々にしてるんだけどね。

とにかく、中間試験は何事もなく終わった。

ランクAはまあ妥当な線なんじゃないかと思う。

ヒロインちゃんは机に突っ伏したまま、「ダメすぎー！」と言ってた。

あなたの場合、まずはダイエツトから…かな？

今のままでも可愛いっっちゃ可愛いんだけどね。

コロコロしてて、昔のアニスみたいで。

私は好きよ。時々ふと撫でたくなってくるぐらい。

うう…なんだかウルつとしてきちゃった。

もうあの子犬のことを考えるのはやめよう。

「私は全然勉強してない」と言ってたミンナはランクBだった。

こういう時の女友達の「全然勉強してない」は経験上、全く当てにならない。オーガスタも当たり前のようにランクAだったなあ。

なんか、私の周り、優秀だなあ。

シユトラール、この人達に任せたいわ、マジで。

私？ 余裕でランクAだったわ。

ふふんっ。(ドヤア)

媚薬事件

「ねえ、マリーンちゃん、いいでしょー？」

「…うーん、そうはいつでもですねー」

「うつつくん、お願いい♡」

…お、おつつ。

せ、セクシーすぎる。

さすがの私も、それ以上は、ちよつと…。

整理しよう。

今、私は、放課後の部室にいる。

そして、『エロの権化』ごんげともいうべきフランス先生に熱烈に迫せまられている。

その距離は、キスもされんばかりのゼロ間隔。かんかく

先生のセクシーさにあてられて、もはや、理性を保っているもやつとの状況だ。

…といつても、残念ながら、私にモテ期が来たわけではない。

クリスマス前にどうしても彼氏をゲットしたいフランス先生が、私に媚薬をねだつてきているというだけである。

神秘研究部ともなると、バレンタインなどの乙女のイベント前には、

必ず、女子生徒からの媚薬作成の依頼が殺到して、日々を忙殺されることになる。

そのため、先輩たちからは、くれぐれも覚悟しておくように、言い含められている。

…しっかしなー。

本当、気が進まないのよねー。

「先生。

媚薬つて、何でできているか、ご存知ですか？」

「え、なになに、秘密のレシピを教えてくださいの？」

「愛液とかかしら？」

「あ、愛液つて！」

キヤー（／＼）
 センセイだったら、不潔ふけつよっ！

「…え、えつと、残念ながら、違います。

今からソレをお見せします。」

私は、神秘研究部のある一画の引き柵だなをガラつと開ける。

「ヒツ、ヒエツ！　なにこれ!？」

覗のぞきこんで、まともに見てしまったフランス先生が素すつ頓狂とんきような声を上げる。

ビビリモード全開である。

「イヤイヤイヤイヤ！　私虫とか見るの本っ当に苦手なのよ!!

それ生きてるの？　い、今、動いた。　イヤーーーー!!!」

…いや、さすがに死んでるし。

今わたしが持っている柵おびただには夥おびただしい数の虫がこれでもかというぐらいに敷しき詰つめられて入っている。

腹には黄色と黒色の斑まだら模様があり、虫に耐性のない人はその場で失神しそうならい、グロテスクなしろものである。

これはマメバンミヨウだ。

『カンタリデス』という、その起源は中世まで遡るといわれるオーソドックスな媚薬を作るのに必要不可欠な材料である。

ちなみに日本にもバンミヨウという名の、山道で古くから『ミチシルベ』として重宝されて続けてきたカラフルな虫が存在するが、中国から名前が間違つて伝えられてしまったもので種類は違うものである。

この虫に含まれるカンタリジンという成分が人体に作用すると、膀胱や生殖器を強く刺激し、利尿、催淫、知覚麻痺の効果が得られる。

その作用を利用し、古来から、媚薬として多く用いられてきた。

今でいうバイ〇グラに近いものと考えたらしくりくる人もいるかもしれない。

神秘研究部で媚薬といったら伝統的にこの『カンタリデス』のことを指す。

「…ねえ、ほかにないのお？」

私、嫌よ。こんなの飲むの。」

…別にあなたが飲む必要はないんだけどね。

でも、そうね、私もこれはオススメできない。

微量びりょうのカンタリジンにはたしかに娯薬ごやくに近い効力を發揮するかもしれない。

しかし、容量を間違えれば、これは劇薬げきやくに変わる。

よく「毒と薬は紙一重」なんて言われ方するけれども、

これはガチものの毒と違っていい。

その致死量ちしりょう、わずか30ミリグラム。

カンタリジンは昔から娯薬としても多く使われていたが同時に暗殺用の毒としても有名である。

また、娯薬としても欠陥が多く、副作用が強い。

この『カンタリデス』を好んで使用していた著名な人物に18世紀の狂人貴族、マルキ・ド・サド伯爵はうこうえんがいるが、彼の乱交パーティーに居合わせた娯婦はその後、膀胱炎ぼうこうえんとなり、排尿困難はいりょうこんなんの後遺症が残ったという。

…それに、ぶつちやけ、私も嫌なのよねー。

これ、さわるの。

キモいとかそういうんじゃないんだけど、よほど、細心の注意を持って触れないと、皮膚に水泡すいぽうというか、水ぶくれができたりして、危険だし、やっぱり毒だから、誤って目

に飛び散ると失明の可能性もある。

なるべくなら避けたいところだ。

バレンタイン前とかだったら毎日でも触れないわけにはいけないんだけどね。

：うう、今から憂鬱だ。

中世から伝わる秘伝の薬なので、その効果も怪しげだ。

たとえ、効果があつたとしても、性欲が出たり、勃起不全が治つたりする類のものなので、乙女が期待するような擬似的な恋愛感情が芽生えるようなものではないだろう。

やはり、お世話になつていゝフランシス先生だから、ちよつとでも可能性のありそうなものを提供したい。

「それなら、これを試してみてください」

私はクリスタル製の瓶に入った、青い液体をフランシス先生に手渡す。

「え？ それは何？」

「これは『ガルキマセラ』といって、私が特別に調査ちようじゆうしたものです。」
ちなみに「ガルキマセラ」というのは私が命名した。

『出会ったら、もうおしまい』といわれる某RPGの凶悪モンスターにあやかっただけなんだけどね。

…正直、あれはトラウマもんだったわ…。

「…えっ、と、これは虫とかは使われていないのよね？」

フランス先生が念を押す。

うん、虫は使われてません。

ちよつと、ファンタジックな材料は使われてますけどね。

「マリーン、おぬしなら、これをうまく使ってくれるはずじゃ。」

つて、うちの実家に居候いせうこうしているエドワードじいさんから無理やり押しつけられたんだよなあ。

土から引っこ抜くと「ギャー!!」ってうるさいやつ。

はい、ハリー・○ッターなんかに出てくるアレです。

伝説のマンドレイク。

マンドレイクって、よく知られているのは地中海沿岸に生えている綺麗な紫色の花を咲かす植物なんだけど、

私がエドワードじいさんから分けてもらったのは古代から生息する純粹種のように、見た目は人參っぽいんだけど、土から出したとたん、ものすごい悲鳴で泣き叫ぶので、超強力な耳当てが必須になってくる。

昔の人は犬を一匹犠牲にして引っこ抜く、なんて考えたみたいだけど、犬好きの私には絶対に無理な話だわ。

うう、アニスにやん…。

超レア種だから、育てるのものすごい手間がかかってるし、魔力とかも必要になってくる。

私は幸い潤沢じゆんたくにあるみたいで、私の魔力を養分にすくすくと育っていった。

でも本当世話するの大変だから、数を増やそうにも、まだほんのちよつとしか培養ばいようできていないのよねえ。

この伝説のマンドレイクを使った媚薬は昔から効能が高いことで有名で、聖書の中で女達のいさかいが生じるほど。

理論上は可能なのよね、理論上は。

問題はあまりにも、もったいなさすぎて、今まで一度も試してなかっただけで。

でも、フランスス先生には、とつてもお世話になつてるし、一番可能性のありそうなものつて、もうこれしかないのよね。

：正直、どうなるかわからないのだけれども。

まあ、悪い結果にはならないでしょう。

『ガルキマセラ』を受け取ったフランスス先生はホクホク顔で部室を去つて行つた。

その夜。

ドンドンドンドン！

という音で私は目覚めた。

…うん？ あつれー？ おかしいなあ。

メレデイスはもう下がった時間だし、一体誰だろう？

…ま、まさか、ヒロイン？

警戒しながら、ドアを開く。

そこには、門番が顔を真っ赤にしながら、立っていた。

「ま、マリンさんっ！ 夜分やぶんに大変申し訳ない。

す、少し、休ませてもらえないだろうか…。」

男を女の一人部屋に入れるのは、と一瞬迷ったが、大変切羽詰せつぽまった様子ようすの門番に、
思わずうなづいてしまった。

「お茶をどうぞで」

「え、ええ、すみません…」

門番は腕に爪をつきたてながら、ブルブル震えている。

…あれ、どうしたんだろう？

風邪とかじゃなければいいんだけど…。

結局、このままの状態で、帰すわけにはいかないと判断した私は門番をベッドに寝かせて、代わりにわたしはそのままソファで寝た。

朝、起こしに来たメレデイスが死ぬほど驚いて、ベッドに寝ていた門番を、太ももに常備しているクナイで一気に刺し殺そうとしたときは必死で止めた。

門番の具合はすっかり良くなっていて、私に平身低頭、謝ってきた。

「…ほ、本当に申し訳ありませんでしたっ!!」

昨晚、自分はどうかしてたんです。

たしか、フランツイスカのやつと一緒に飲んでたんですけど、途中でなぜか動悸どうきが激しくなってきた、

…そして、どういうわけか急にマリーンさんの顔が見たくなって、

自分で抑おさえよう抑おさえようと何度も思ったんですけど、もう、本当にどうしようもなくなつて…」

見ると門番が慟どうく哭しながら顔を手で覆っている。

…うん？ フランシス先生と飲んでて？ 気分が高揚した…つてこと？

…なんかソレって、すごい身に覚えがあるような…。

私が渡した『ガルキマセラ』か！

先生がどうしても落としたい彼氏さんって、門番さんのことだったのかあ。

それで、昨日、一緒に飲みに行ったときに門番さんの飲み物にいっぶくも一服盛ったという訳ね。

…でも、それなら、なんで、目の前のセクシー先生じゃなくて、私の部屋にわざわざ来るんだろう？

…解せぬ。

デート回

「で？ マリーンちゃんは門番さんと一夜をともしたってこと？

きゃーーーーーー!!」

今、私たちはクリスマス用に装飾そでしよくされた大通りのイルミネーションを見に来ている。ミンナは私の横で「媚薬事件」の顛末てんまつを聞きながら、さつきから大興奮し切りである。「まったく、マリーン。

あなたには、警戒心というものがないの？

相手が奥手おくての門番だから、手を出せなかったのでしょうけれども…

…『男は狼』なのよ。」

オーガスタは逆にももの凄くすじ、不機嫌そうな顔をしている。

はい、それはもう反省してます。

メレデイスからはあの後すぐに大目玉をもらったし、
「旦那様に報告させてもらいますー」と言われた時は、

それはもう血が凍るかと思っただわよ。

門番さんの身がすごく危険になるような気がしたので、それは必死に阻止しました。

門番自身からも、

「マリーンさん。自分で言うのも何なんですけど、こう、ホイホイ簡単に男性を部屋に入れてしまう、というのは…。」

今度からは絶対に、絶対につ！やめてくださいね。…自分以外の男を部屋に入れるのは。

…と、とにかく、何があつてからでは遅いんですからね。」
と怒られてしまった。

…うーん、私、彼からはもつと感謝されてもいいはずよね？

窮^{きゆうじょう}状を救ったわけだし？

…解せぬわ。

「…ふう…マリーンのそのおおらかな性格は死んでも治らなさそうね。

…まったく。目が離せないんだから…。」

とオーガスタは隣でブツブツ言っている。

ここに来る前から、オーガスタの機嫌は悪かった。

もともと、彼女は人混^{ごみ}みが苦手で、「秋休みにカーニバルを見に行こう」、という私の

申し出にも難色を示していた。

今回、ミンナがどうしても行こうよ、お願いっ！って、上目遣いで頼んできたので、さすがのオーガスタも断れなかったようだ。

学園都市のメイנסトリートを埋め尽くすクリスマスのイルミネーションは幻想的でとても綺麗だ。

私にとつては、前世の職場近くにあつた、丸の内の○菱地所のライトアップの思い出がよみがえってくるようだ。

ミンナも先ほどから恍惚な表情をして、街の色どりに華を添えている。

うーん、眼福、眼福。

さて、クーヘン国において、クリスマスはどちらかというとな宗教的側面が強い行事になつている。

こちらへんは、『恋人たちのイベント』として俗物化して定着した日本とは多少趣きが異なるものになつている。

元来、クーヘン国では土着の精霊信仰を持っていて、キリスト教とはまったく異質の原始宗教が民間で信じられてきた。

しかし、6—9世紀ごろ、イスラム教との対立の激化の中で、旧ローマ帝国の宣教師

らが、次々とクーヘン国に流入するようになる。

クーヘン国内において、一般に、死後の世界などの死生観しせいかんが生まれたのはこの頃からだだったといわれている。

こうして、土着の精霊信仰とキリスト教が混ざり合った結果、クーヘン固有の新たな宗教が誕生した。

現在、『クーヘン聖教』とよばれているものである。

日本の宗教でたとえると、『神仏習合しんぶつしゅうごう』のようなものだろうか。

そのため、クーヘン聖教において、イエス・キリストは信仰上、とても重要な聖人として考えられている。

この辺は、キリストを24人目の預言者として定義しているイスラム教に通じるものがあるだろう。

ローゼンシュトルツ学園でも12月24日には、生徒全員参加でイブ礼拝をとりおこない、そこで聖人キリストの誕生日を祝福することになっている。

「は、退屈だわ…。」

オーガスタが不満を私たちにぶつける。

電力風車の改良に総力をかけて取り組んでいるファイゲ州出身のオーガスタにとって、クリスマスマスのイルミネーションは『電気の無駄』にしか思えてならないのだろう。それは、わかる。

：しかし、そんな言い方をしなくてもいいんじゃないだろうか？

ミンナはこのイルミネーションを私たちと見に行くのをとても楽しみにしていた。しかし、こういった人の感情には特に敏感な子だ。

今や、さつきまでのウツトリとした表情とはうってかわって、オーガスタの機嫌を損ねていないか、顔をうかがって、オロオロしている。

：はー、言いたくないんだけど、仕方ないかなあ。

オーガスタもサバサバ系を卒業して、最近すいぶん丸くなったと思っただけだなあ。

「いい加減にしなよ、オーガスタ。」

私は強い口調でオーガスタに言い放つ。

普段、あまり見せない私の様子にオーガスタはびっくりしたように私の方を見てい

る。

「たしかに、イルミネーションって、『ただ光っている』だけよね。

それは、あなたにとって、とーとーしても、つまらないことなのかもしれない。

…でもね。

こうやって、3人で、同じ時間を共有して、バカなことを笑い合いながら、くつちやべっている。それだけで、とても貴重な時間に思えてこない？

ここににいる人たち全員そう。

本当はね、イルミネーションだって、花火だって、花見だって、綺麗とか面白いかなんてどうでもいいの。

気の合う友達と仲良く楽しい時間を過ごしたい。

そういった人たちがここに集まってるの。

『電気の無駄』とあなたは思っているかもしれないけれど、クーヘン中からこの『電気の無駄』を見に、友達や家族を連れて学園都市に集まってきているの。

その経済効果、ちよつとでも、考えたことある？

そして、オーガスタ、あなた、ミンナがどれほど、このイルミネーションに私たちがと

行くことを楽しみにしていたか、わかっているの？

：今のミンナの顔、あなたに見えてる？

ハツとオーガスタがミンナの今にも泣き出しそうな顔に気付く。

オーガスタは今になってようやく、自分の不用意な態度と発言に後悔をしたようだった。

「ご、ごめんなさい。」

マリン、ミンナ。

：私、恥ずかしいわ。

マリンに言われるまでぜんぜん気付かなかった…。

：今まで、退屈で何が楽しいのかわからないと思っていたのだけれど、

こういった情緒しやうちよもたまにはいいものね。」

柔らかに微笑ほほえむオーガスタ。

うん、こんなふうに自分の間違いに気づいたら、すぐに軌道修正きどうしゆして素直に反省できるところ。

私は好きよ、オーガスタ。

気を取り直した、私たち3人はその足で映画館へと入った。
今は『光と影』という名前の実験映画をやっているらしい。

…うーん、ちよつと失敗したかなあ。

こういうものこそ、活動の講師こうしゅくが必要だと思うのだがなあ。

実験映画といえ、サルバドール・ダリの『アンダルシアの犬』という短編映画が有名だ。

目をカミソリで切り取る最初のシーンが衝撃的だった人もいるだろう。

シュールレアリスムの不条理な世界観が体現されていて、映像の時系列もバラバラでストーリーもあつてないようなものである。

『アンダルシアの犬』は、まだ20分か、そこらの映像だから視聴に耐えられたものの、それを2時間ぶつ続けで見せられることを想像してほしい。

まー、拷問といつていいだろう。

「…始めにあのシーンが来るとは思わなかったわ。」

とオーガスタの言げん。

うん、最初のシーンは本当に衝撃よね。

『アンダルシアの犬』ではカミソリに目ん玉だったけど、こちらは首実検くびじっけんそのまんまでもんなあ。

それを考えると、どちらかというところと三島由紀夫の『憂国』に雰囲気は近いのかしら。

「ラストは良かったわー」

とミンナ。

この子、どんなくだらぬものにも、良いところを必死で見つけようと頑張るのよねえ。

本当、天使みたいな、いい子。

あー、いい加減、ノワールとか見たいわー。

…まだなのかしら？

クリスマスパーティー

今日はクリスマス。

学園主催のパーティーの日である。

イブ礼拝が終わった後の2日間、ここローゼンシュトルツ学園ではクリスマス休暇となる。

その最初の日のクリスマスには、毎年、学園側で特別会場が用意され、1年の慰勞いろうを兼ねて、生徒たち、職員ともども参加できるクリスマスパーティーが催される。

日本の会社でたとえと、忘年会みたいなものかしら？

私たちは学生だし、お酒を上司から強制されるなんてこともないのでその点はもう安心しているのよね。

…いやだわ。前世の嫌な記憶がよみがえってきてきたわ。

切り替え、切り替え！

さて、私はお父様から、今夜のためにわざわざドレスを送られてきているのだが、

…これって、本当に大丈夫なんだろうか？

「…ネグリジエ…？　じゃないわよね？」

ゲームをやっているときはなんとも思わなかったけれども、パーティーでマリーンの着てくるドレスって、いやに扇情的せんじょうなのよね。
媚婦的しよぼうというか、なんというか…。

良く言えばピンクのキャミソールなんだけど、…見ようによつては、…下着？
これで、シュトラールの一人でも落として来い、と言ったお父様の迂遠うえんなメツセージ
なのかしら？

…だとしたら、すごく重い。

政略的に仕方ないかもなんだけどさあ。

はあ。でも、腹くくって着るしかないわよね。

私が着ると、そんなにおかしくないのかな？

「お、お嬢様、お似合いですよ、ご立派りっぱになられて、ううう…」

メレデイスは感激のあまり涙を流している。

…うん、きつと大丈夫よね。

早く支度しなくちゃ。

コンコン

「はーい。」

ミンナとオーガスタが部屋の中に入ってくる。

「さ、クリスマスパーティー会場へ行きましょう。」

「楽しみよね〜」

「ま、マリーンちゃん、その服は…。」

ミンナがぼかーんと口を開けて、私の方を見る。

『『お前は注目されるはずだから、公爵家としてこれくらいのもを着ておきなさい』つて、お父様を買ってくださいったものなのだけれど…やっぱり、変かな？』

「… うん、うん。」

とーつても可愛い過ぎて、思わず放心ほうしんしてしまっただけなの。

マリーンちゃん大好きっ！」

ミンナが私に抱き着いてくる。

うへへへ… このドレスもなかなか捨てたもんじゃありませんなあ。

「… 車が来たようよ。」

「さあ、行きましょう。」

オーガスタが、その様子を見て、呆れたように私たちを促す。

「それじゃ、しゅっぱーつ!!」

と、私が言おうとしたとき、

ふいに、自分が、何かを忘れていているような気がして、違和感を感じる。

「どうしたの、マリーンちゃん…」

私の様子に気が付いたミンナが心配そうに声をかける。

「う、ううん、なんでもないの。」

「それでは行きましょうか。」

「て、T型フォード!!!」

「そうね、いやよね、こんなオンボロ車。」

「い、いやそうじゃなくて、T型フォードだよ!!」

「本物の!」

その販売年はじつに1908年。20世紀の初めも初めである。

自動車の歴史を語るのに、絶対に外せない最初の量産型自動車だ。

人類史上、自動車の普及に最も貢献した自動車といえば、この車がまず一番手に上がるのではないだろうか。

2人乗り、4人乗りの違いはあれど、およそ30年間にわたって、T型はほとんどモデルチェンジがなされていない。

たしか、3年前にヘンリー・フォードが生産中止を発表したばかりだったはずだ。

…ちくしよう、シボレーのやつめ。

そのまま、頬ほおずりをしそうな勢いの私にミンナとオーガスタの顔が引いている

「私、これにずっと乗っていたい。…いや、むしろ運転させて」

「ま、マリーン、駄目よ。ほら会場に着くでしょ。」

「マリーンちゃん、車の運転まで、できるんだあ。」

ミンナは別の意味で感心している。

苦笑いする運転手に交渉する私をなだめすかし、オーガスタに引つ張られながら、私は会場へとドナドナされる。

い、いいんだもん、帰る時に絶対、満喫まんきつしてやるぞー

会場の前には門番が立っている。

うんうん、やってるな。

… 考えてみれば、これがこの人の本職なのよね…。
すつかり、私たちの茶飲み友達が板に付いてたなあ。

「ま、マリーンさんっ

その恰好かっこうは！」

ふと気が付くと、門番が『筋肉に魅せられた外井雪之丞』のごとく顔を真っ赤にしな
がら私たちを凝視ぎようししている。

「いけませんっ！」

ほかの男に襲われたらどうするのですっ!!

さ、さあ、今すぐ、わたしのマントを着てください。

絶対にパーティーの間中、これを外さないでくださいね。」

そうはいつてもな、暑いよ、絶対。」

「絶対にですよ」

門番の射殺さんばかりの必死の形相に、観念した私はありがたくマントを借りることにする。

私の恰好、そんなに変かなー。

そんな、私たちの様子にミンナはクスクスと笑っている。

「あらあら、お熱いこと。ヒューヒュー。」

「…独占欲の強い男ね。」

と逆にオーガスタはツンとしている。

「そ、そんなんじゃないのよ。」

門番さんは、ただ、私がパーティーで変な目で見られるのを心配してくれているだけよ。」

私は必死に門番のために弁護する。

門番も、オーガスタ達に、勘違いされたら、たまつたもんじゃないだろう。

「…やれやれ、門番も気の毒ね。」

「全くよね。」

ミンナとオーガスタが二人で以心伝心したかのように、同時に顔を見合わせ、肩をすくめ合う。

何、そのシンクロ率？

いつ、習得したの、その技？

なんか、私だけ、取り残されてるんだけど…。

ひっどーい。

私だって、それ覚えたいよっ！

宴もたけなわに

「ええ、

それでは皆さうん。

今日はお集りいただき、感謝いたします。

どうぞ、存分にお楽しみください。」

フランシス先生のお父様こと、縦ロール校長、バルトロローメーウス・エツシエンバツハ様が、ねつとりとした口調で、クリスマスパーティーの開催を宣言する。

ば、バラ、持つてるよ、この人っ！

何で!?!…そして、匂い、嗅いでる。

さすが、このゲーム、耽美たんびをうたうだけあるよねー。

現実にこんな人、いないでしょ。

遠目に見ると、フランシス先生がやれやれ、とした表情をしている。

…ちよつと、恥ずかしいよね、こんなお父様。

さすがに同情するわ。

私の渡した特製媚薬『ガルキマセラ』については、後日、フランシス先生から、凄い

感謝された。

「マリーンちゃん、あの媚薬、すごいわ！」

今まで、あの人、私のこと、見向きもしなかったのに、

急に顔を真っ赤にし出して、本当、可愛かったわあ。

あともうちよつとのところだったのに。

急に用事ができた、つて言つて、逃げられちゃったんだけども…

次は、ぜーつたいに、逃がさないわよお。」

…その人、その後、うちに電撃訪問してきたんですけどね…。

門番さんも、ご愁傷さま。

これは、もう、先生に確実にロックオンされてるわね。

…それにしても、わっかんないんだよなあ。

成分上では何も問題ないはずなんだけど。

なんで、薬を盛った目の前の先生の方でなくて、私の部屋へわざわざやってくるのか

…？

なにげに私の自信作だったんだけどなあ。

…まあ、今後の課題として、考えておくか。

…うん、でも、まあ、先生の相手が門番だつて分かつたら、ますます、『カンタリデ

ス』のほうじゃなくて良かった。

あの人に、私達は、ずいぶんお世話になってるし、すっごい、いい人なんだよね。
膀胱炎ぼうこうえんで苦しむあの人を見たくないよ。

今日だって、私に恥をかかせないように、わざわざ自分の上着を貸してくれたくらいだしね。

本当、いい人。

と、そんなことをつらつらと考えてると、

「やあ、どうだ、

楽しんでるか？」

と、金髪の美少年がふいに私に話しかけてきた。

おやおやおや、これは珍しい。

ずいぶんと意外な人物が声をかけてきたものだ。

オルフェレウス・フュルスト・フォン・マルメラデー・ナーエ・ゲルツ。

侯爵家の嫡男であり、金髪、碧眼、眉目秀麗にして、シュトラールのリーダー的存在。

このゲームにおいて、王道中の王道の正統派王子様キャラといってもいいだろう。

…まあ、実際は王子ではないんだけどね。

ゲームのパッケージでも一番目立つところにいるのが彼だ。

領地こそエアートベール内にあつて、私の家の所領にも近いんだけど、彼との関わりは今までほとんどなかった。

その代わり、彼のお姉さんとは小さい頃からずいぶんと仲良くさせてもらったものだ。

すごく、綺麗なお隣のお姉さんで、マリーンのことをとても可愛がつてくれた。

ちよつと、暴走すると、私のことを着せ替え人形状態にしたけれども、ずいぶん面倒見の良い、優しい人だったよね。

…本当、惜しい人を亡くしたよなあ。

2年前、結婚を目前に控えた、彼の姉、ロベルティネ・フルスト・フロイライン・ゲルツは王都を襲つた凄惨なテロに巻き込まれ、その命を落とした。

当時の私も、ずいぶんとショックを受けた事件だ。

実の弟、オルフェウスの心傷はいかばかりのものだっただろうか。

「こうして皆の笑顔を見てみると、今世の中を包む暗い影が幻の様だとは思わんか。」

…ふむ。こいつなりに、世の中の不穏な動きを感じ取っているのだろうか。

第一次世界大戦後のヴェルサイユ体制下の世界は現在、完全に破綻状態にある。

当時、フランスがドイツに要求した賠償金の支払いは1320億金マルクという多大なものだった。

これは、当時のドイツの国家予算の約20年分にも及ぶ非常識きわまりないもので、ドイツ国民の生活を極限まで切り詰めさせ、搾り取り、苦しめるものだった。

さらにフランスは、それだけでは飽き足らず、その後、債務不履行を理由に、ドイツ最大の工業地帯であったルール地方を占領。

当時のドイツの重工業産業の8割を生産していたルール工業地帯をフランスに占拠されたドイツの経済はもはや、たちゆかなくなっていた。

このように強欲さと不均衡さが入り混じったいびつな世界の中で、ナチス労働党をはじめとするファシズムが民衆の支持を得て、台頭していき、やがて、周辺諸国を巻き込みながら軍国化へと走りだしていくのはまさに歴史の必然であったといえるのではないだろうか。

「オルフェレウス。」

「オルフェと呼んでもらって構わない。マリーン嬢。

姉とは生前ずいぶん親しくさせてもらったからな。」

「…では、オルフェ。」

あなたには見えていますか？

今、あなたがいるシュトラール委員会。

次世代の国家を作るその本丸とも言うべきはずのところに

今、あなたが言っている、後ろ暗い影がまさに包みこもうとしていることに。

…あなたの身近に今まさに起こっていることに、

あなたは、気が付いていますか？」

オルフェレウスは嘆息をつく。

「…ルーイのことを言っているのか。」

アレも少々過激なところがあって、なにかを企んでいるように見えるが、

彼なりに国を思っていることだ。

私とは思想こそ異なっているものの、目指す理想は同じ仲間だ。

マリーン嬢が気にするようなことは何も無い。」

…やはりだ。

正直、がっかりした。

こいつには本質が見えていない。

今、一番身近にある危機にすら気が付いていないのだ。

それで、「世の中を包む影」とは。

笑わせてくれる。

「オルフェ、あなたはロベルティーネ様の悲劇をまた繰り返したいのですか。」

オルフェレウスは今度は私の顔をまじまじと見る。

「どういうことだ、マリーン。」

こととしいだいによつては…。」

オルフェレウスは剣の柄に手をかける。

『宝剣ドウレンダール』だ。

代々王家に伝わるもので、陛下から直接賜ったものだという。

今、彼が抜刀して、私を傷つけたとしても、シユトラールであれば、お咎めなしにできはるはずだ。

私がシユトラールに対し無礼千万にも不敬行為を行つてきたので、やむなく斬つてし

まった、と証言するだけでよい。

事実、私はそれに近い発言を行っていると自覚している。

…でも、私は賭けたい。

ゲーム本編で、彼はルードヴィツヒを諫めようとした唯一の人間なのだ。

シユトラール内での発言権も実家の地位の割に高いし、国王からの信任も厚い。

ちようどいい。

ミンナもルードヴィツヒを覗きに行くと言っていたし、

オーガスタもコソコソとブラウンシユヴァイク子爵の息子を眺めに行っているようだ。

二人のいない今、未来のことを話してもいいだろう。

「あなたがたつた今、『仲間』だとおっしゃった、ルードヴィツヒ・ヘアツオーク・フオン・モーン・ナーエ・リヒテンシユタインは、近い将来、ドイツ軍を引き入れ、クーヘンに潜ませ、反旗をひるがえし、クーデターを起こそうと画策しています。

もし、それが実現すれば、国は戦乱に荒れ、多くの民草が犠牲になるでしょう。

あなたは、ロベルティーネ様の悲劇、いやそれ以上の惨劇をこの国に招くことになつ

ても、…それでもいいのですか？」

「…そ、そんな、ばかな。」

さすがのオルフェウスもあまりのことに狼狽ろうばいしているようだ。

「信じるも信じないのもあなた次第。」

しかし、現実から目を背けてはいけません。

私は、この4か月、カーレベルク家の情報網を使い、ルードヴィツヒを探らせていました。

彼は、現在、『学術研究』と詐称し、カーレン国内のドイツ系貴族や軍事企業のお偉方と密会を繰り返しています。

話の内容から察するに、目的はカーレン内部の軍隊を秘密裏に掌握するためだと思われるます。

また秋期休暇の間、彼は、ナチスの高官と会っています。

これらは、調べればすぐにわかる事です。」

この報告を受けたとき、私はやっぱりね、と思った。

カロツサ博士の陰謀など、彼の野望実現のための都合のよい口実に過ぎなかった。入学して間もないこんな時期から、彼は国への反逆のために動いていたのだ。

「…う、うそだ。」

まだ言うか。

「早々に科学研究部に調査を入れることを私はおすすめします。

おそらく、ルードヴィツヒはあそこを隠れ蓑に反乱軍を組織するはずです。

本当にあなたがシユトラールとして、国を思うならば。

お姉様の悲劇を、国全体に引き起こしてはならないと本気で願うならば。

…止められるはずです。

ルードヴィツヒの馬鹿げた陰謀を止めてください。

プロツチエンの領民を守るものとして、クーヘン国民としてお願いします。

私たちのクーヘンを戦火に巻き込まないでください。」

私はオルフェウスに頭を下げる。

領民や国民の命に比べたら、私の頭なんて安いものだ。

さあ、どう出るか。

「… エドと相談してみる。

マリーン嬢、ご忠言、感謝する。」

… やれやれ、この期に及んで、お友達と相談か。

先が思いやられるなあ。

しかし、これで、一歩前進かな。

こう見えて、オルフェウスのシユトラール内の発言力は高い。

彼をもし味方に引き入れられたとしたら、今回のクリスマス会での収穫は大きいだろう。

： それにしても、他に何か忘れてる気もするのよね。
まー、私のことだし、どうせ、大したことないでしょー。

ヒロインの後悔

今日はクリスマス。

学園主催のパーティーの日！

今日のためにお養父様ととうに、今の自分の体型に合ったドレスをおねだりしたの。

しぶしぶだったけど、カワイイ義娘むすめの幸せのためよ。

仕方ないじゃない。

早く支度しなくっちゃ。

コンコン

「はい。」

「ぎ、クリスマスパーティー会場へ行きましょう。」

…出たー！

ミンナよ。

ルーイ様エンドで必ず邪魔してくる女よね。

いつも、自分中心で、私、この女、大っ嫌い。

早く、続編になって、没落してくれればいいのに。
今に見てなさい。

祝勝パーティーで飲み物を取るついでに、あなたのみすぼらしい姿を発見して、
心の中で嘲笑あざわらつてやるんだからっ！
ほんと、今から楽しみよねー。

「きや、楽しみ〜」

出た出た出た〜！！

私の心の敵。にくつきマリーン！！！！

GB○版で何度、エンディング直前で寝取ねとられたことか！！！！

この恨み、晴らさしておくべきか…

大大大大っ嫌いっ！！！！

「マリーンはあ、

きつと注目されちゃうからって、

お父様、ドレスを買ってくれてえ。」

あなた、それは自意識過剰つてもものよ。

シユトラール様全員あなたのことを引いた目で見てるのよ。

わかつてるの？

…そして、そのウサギのぬいぐるみ、パーティーにまで持っていく気？
すごい根性だね。

…ほら、オーガスタも呆れた目で見てるわよ。
姐さん、ほら、早く言っちゃってください。

「…車が来たようよ。」

さあ、行きましょう。」

「それじゃ、しゅっぱーっ!!」

……………

って、なるはずだったのに、

何で、何で、何で、何で、何でっ!!!

誰もむかえに來ないのよっ
!!!!

考えてみれば、入学当時から、何かが、おかしかったの。

マリーンのやつ、ブリっ子キャラのくせに、挨拶が妙に大人びていて、

私、アレっ？て一瞬、思ったの。

9割がた、私のこと、マリーンが勝手につけたあだ名で呼んでくるかなあ、って思っ
て身構えてたのに、全然、言っ
てこないし。

あー、でもでもでも、実際に見る、シユトラールの方々、キラキラして素敵だったなあ。

今までゲーム画面ごしにしか見れなかったんだけど、

左から、エド様、ナオジ様、ルーイ様、カミュ様、そして、オルフェ様!!

きやーーーーー!!

みんな、ほんと、ス・テ・キ。

マリーンじゃないけど、本当に誰を狙うか迷っちゃう。

これだけは、この世界に転生できて良かったと思うわ!

マリーンったら、早くもシユトラール狙いみたいだったから、

睨んでやったの。

あなたただけには、二度と寝取られるもんですかつ!

．．．とはいえ、あいつら、こつちが構ってやらないと、すぐに爆弾かかえるのよね。

下手にほつといて、爆弾が破裂すると、攻略対象の好感度も下がっちゃうの。

だから、そこを手を抜いてはダメなの。

ほーっっつんと、めんどろっ!!

なにが、悲しくて、大っ嫌いなマリンなんかとデートしなくちゃいけないのよっ!!
早速、フランスス先生に、電話番号を教えてもらって、電話をかけまくってるんだ
ど、

なんか、すごく、反応が悪いのよねー。

すごい眠そうな声を出してきたりとか、

今、忙しいんだけどお、何？

とか、言って来たりとか、ほんと感じ悪っ！

しまいには、

「その日、大事な用がある」とか

「あなたの為に時間を作る気はない」とか言われるのよ。

わたしだって、あなたたちのために貴重な休日を使いたくないわよっ！

もー何よ、使えない奴めー。

…なぜか、シユトラールたちにも相手にされてないのよね。

私、ちゃんと誘惑ゆうわくしてるよね？

森を女の子一人で散歩しちゃ、キケンよね、って言っても、

「心配なら、誰か友人を誘って行くといいと思うが。」

ですって！

キーーーーー！失礼しちゃうわ。

あ・な・たを、誘ってるのよ、私はっ！

そんなこともわかんないの？

本当に男って鈍感どんかんよね。

でも、そんな無頓着むどんちやくなところもステキよね。

そんなことを繰り返すうちに、なんか、女の子たちから電話番号を替かえられちゃった。フランス先生も1回目は教えてくれてただけど、2回目からはどうしても教えてくれなくなったの。

もーーーー、本当、使えない奴。

厚化粧あつけしょうババア！

本当、何かが、おかしいのよねえ。

ゲームと違って、本当に調子が狂っちゃう。

今頃はルーイ様に呼ばれて、『革命をもたらす駒』になってくれって、懇願されるのに。

私、ルーイ様の革命だったら、喜んで、協力しよう、と思つてたのに……。

：…なのに、全然ルーイ様が出てこないの。

おかしいでしょ？

そればかりか、マリーンのやつ、私の前世の相手、ナオジ様に粉をふっかけやがつて

！

ある日、私は、早朝のイベントをこなそうと、中庭でナオジ様の弓の練習をポーツとなつて見てたの。

そしたら、ナオジ様が前世の運命の相手である私を思い出して、

「どこかで……自分はあるあなたにお会いした気がします」って、声をかけてきてくださるのよね。

キヤーキヤーキヤー!!

前世からの運命って、なんかス・テ・キよね。

：？ あれ、でも私って、平成から転生しているわけだから、その辺はどうなるのかしら。

まつ、いつか。細かいことは。

やっぱり、ロマンチックよね〜。

そんなこと思ってたら、マリーンがズカズカと割りこんできて、

何か知らないけど、ナオジ様を泣かせるし、コイツ、一発殴ってやろって、息こんでたら、

今度は、ナオジ様のほうからマリーンに抱き着いてきたのよね！

ちよつと、そこ、私の位置！

今すぐナオジ様から離れてよっ！ この泥棒猫!!!

もー、知らないっ！

やられたら、やり返すのみよ！

次の日から、マリーンの上靴うわぐつに画びようを入れたり、

体操服を汚してやったり、

あの子が必死になって書き写してたノートを破いてやったわ。

ふふん、ざまあ！

せいせいしたわ。

あの子ったら、ヒーヒー言いながら包帯ほうたい巻いて足ひきずってたわ。

本当、笑えるわよね。

秋休みがはじまってからは、マリーンの部屋の前にクソ爆弾をおいてやろうと思ったんだけど、

あの子、どういうわけか、いないみたいだし、

みんな、あの子の部屋の場所を決して私に教えようとしなのよね。

なによ、もー、みんな、大っ嫌い！

それどころか、いきなり『オーガスタ様親衛隊』と名乗る女の子の集団に囲まれて、「お姉様のご友人にこれ以上、手を出したら、どうなるか…」

わかってるわよね…？」

なんて、ドスのきいた声で脅おどされるし。

…本当、怖いわ。

身の危険を感じちゃう…。

中間テストの結果はランクEだったし…、

私、ヒロインよね？

こういうものって、勝手に能力補正されるんじゃないの？

…。

記憶を封印しようかなあ。

もー、クリスマスなのに、なんで誰も迎えに来ないのよ〜！

それでも、友達？

っふん、クリスマスパーティー？

興味ないわ。

こっちから願ひ下げよ〜〜。

…でも、本当は、行きた〜〜〜い!!!

…うん？

自分で行けばいいじゃん。

会場の場所、わかってるんだし。

歩くとけっこう遠いけど、みんなにちゃんとマップが配られてるんだ。

よしっ、行こう。

ふう、結構、歩くと時間かかるわね。

でも、女は根性よっ！

これぐらいで、素敵な王子サマを諦めきれないわっ！

あ、…あれは、門番さんっ！

やっぱ、素敵よね〜〜♡

この門番さん、このクリスマスパーティーの時にしか出てこない隠しキャラなのよね。

それで、私の容姿ステータスが一定以上超えると、顔を赤らめちゃって、「な、何でもございませぬ。」なんていつて通してくれるの。

かつわいいー！

攻略したいなあ。ゲームの中じゃないんだし、できるよね？

ん？ あれ、でも、フードを被ってないわね。

…おかしいな、たしか、スチルでは…。

…でも、緑髪もなんかステキよねー。

うん？ こうして見ると、誰かに似てるような…。

門番さんは、私の顔を見た途端、一瞬、嫌な顔をした。

…なっ、何よ。

「…クラウス嬢ですね。

申し訳ございません。

貴方の身なりでは会場に入ることは出来ません。

お引き取りください。」

えくくくく!!!

ここまで来たのに…

もーもー、何よ何よ何よ何よ何よ

みんな、大大大大大大嫌いっ

!!!!!!!

…私、一体どこで間違えたのかしら…。

やっぱり、マリーンたちの爆弾がいけないのかしら。
はやく、なんとかして電話番号を手に入れないと…。

光と影

俺の名はエドヴァルド・マルクグラーフ・フォン・ゼクト・ブラウンシュヴァイク。気軽にエドって呼んでくれ。

片っ苦しい貴族っぽいことは苦手なんだ。

好きなピアノも人前では弾かねえようにしている。

だって、らしくねえだろ？

…しよせん、『貴族のまね事』なんだ。

俺の家は子爵家だけど、俺は本当の貴族じゃないからな。

うちの親父は若い頃、ずいぶん、やんちゃだったらしくて、

ほうぼうに女作って、遊んでたらしい。

俺はもともと、キャラバン出身で、いわゆる『流浪の民』るろうたみってやつ。

3歳まで、母親と暮らしてたんだけど、ある日、オットーのやつがやってきたんだ。

…おっと、オットーってのは、うちの親父の名前な。

本人は奔放ほんほうのわりにずいぶん貴族的な名前だよなあ。

子爵家に引き取られることになった俺は、同じく親父の愛人の子に生まれた妹と一緒に

に、ゼクトにあるブラウンシュヴアイク邸で暮らすことになったんだ。

まあ、私生児しせいじってやつだから、当然、継母ままははからは毛嫌いされてたよな。

俺の黒い肌にも原因はあつたのかもしれないけどな。

継母ままははのヒステリーに親父も根負けしちまったのか、妹はその後、愛人の母のもとへ送り返されちまった。…だったら、最初っから引き取るなつて話だよな。

アイツ、今頃どうしてるかな？

…アイツの母さん、あの後、出家したつて、聞いたけど、修道院で元気にしてるんだろうか？

…それで、俺は唯一の男子つてことで送り返されることもなく、そのまま子爵家の一員になつたつてワケ。

上にも姉ちゃんが3人いるんだけど、男尊女卑のクーヘン国では跡継ぎにはなれねえらしい。

…大人の事情つてやつ？

俺には妹がいるし、後継者ナリエつて名乗る気はサラサラねえんだけどな。

今回、俺の幼なじみで大親友のオルフェがローゼンシュトルツ学園へ進学するつてことで、俺も一緒に行くことになった。

シユトラールってやつにも興味はなかったが、選ばれちまったもんはしょうがねえ。親父のやつ、感激のあまり、泣いてたけどな。

何やら、うちの子爵家の立場が向上するつつって大喜びしてたけど、

そんな貴族の事情なんざあ、俺にはわかんねえな。

オルフェと一緒になら、正直、どうでもいいや。

そんなオルフェが学園主催のクリスマスパーティー以来、熱に浮かされたように何かを考えることが多くなった。

原因は何かわかつてる。

マリー・フロイライン・カーレンベルク。

あの公爵家のブリツ子娘がオルフェに何かよからぬことを吹きこんだに違いねえ。

そういえば、アイツ、自分の立場がわかつてねえのか、何やらオルフェに失礼なことを言つて、剣で切りかかれそうになつてたな。

オルフェがそこまでするってえことは、よつぽど、性悪なことを言つたに違いねえ。

アイツのことはもともと嫌いだったんだ。

いつも可愛い子ぶつて、俺が一番嫌いなタイプだな。

大体、あのウサギのぬいぐるみは何なんだ。

いい加減、そういうの卒業しろよな。

正直、見えて、恥ずかしいぜ。

「オルフェ。」

オルフェのやつ、物思いにふけてて、俺に返事をしようとしねえ。

「オルフェ!!」

!?

エドか…。」

「どうしたんだよ。」

深刻な顔しちまって。」

「少し考え事をな…。」

オルフェの目は憂うれいに満ちている。

かわいそうになあ。

「マリーンのやつになんか言われたんだろ?」

「…。」

オルフェは押し黙っている。

「…ルーイのことについてか？」

オルフェは、ハツとした顔で俺の方を見る。

当たり前か。

「お見通し…か。」

さすがだな。エド。」

「ま、ながくいつきあいだからな。」

「…そうだな。」

オルフェも出会ってからの俺との思い出をかみしめているようだ。

以心伝心ってやつ？

「…エド、彼の考え方は

ただ人々を恐怖に陥れるようにしか思えないのだ。

私は…彼の考え方を正したい。」

「なあ、オルフェ。」

世の中じゃ

いろんなヤツがいるんだぜ。

善の人間もいりや〜、

悪の人間もいる。

でもよ、この世の人達全部に

自分の考え方理解しろったって、

そりゃ〜無理な話だ。」

「……………」

「だからよ、そういう思想の違うヤツらと、どう接して行くかを

考えたほうがいい…。」

「!?!」

「おまえの輝きはさ、

まぶしすぎる光だ。

光には必ず影がついてまわる。

光が強ければ強いほど

暗い影がな。」

「その影とも

上手くやっていかねえと

いつかその影に飲み込まれちまう。」

「…そうなのだろうか…。」

「…それとな、マリーンをあまり信用するな。

アイツはな、公爵家でワガママ放題に育った

根っからの性悪しょうわる女だ。

ブリっ子のふりして、俺たちをつけ狙ってるぜ。

ナオジを日本に送り還かえしやがった黒幕もアイツだってわかってるだろう？」

「…。」

「ま、そんな堅苦しく物を考えすぎるな。

また、男子寮みんなでパイ投げでもしようぜ。

あれ、楽しかったよな。」

「…そ、そうだな。

エド、ありがとう。

なんだか、迷いから覚めた気分だよ。」

「いいってことよ。

俺たち、友達だろ？」

それから、俺たちは、男子寮で行うパイ投げ大会について話し合った。

オルフェもすっかり気が晴れた顔をしている。

：それにしても、マリーンか。

あの女、ろくなことしねえ。

はやく、何とかしねえとな。

新年の幕開け

早く街に行かなくちや。

今日はジルヴェスター大晦日の日。

ミンナたちと噴水広場で待ち合わせしてるんだつた。

ちなみに12月31日はここクーヘンでは一般的に『ジルヴェスター』と呼ばれてい
る。

カトリック教の聖人である聖ジルヴェスターにちなむものでドイツ語圏ではそう呼
ばれることが多い。

本場ジルヴェスタードイツの大晦日のバカ騒ぎほどじゃないけれども、ここクーヘンも負けてはいな
い。

「きや〜！」

「わー、街はお祭りムードで一杯ね！」

いやー、しゅちにくりん酒池肉林とは、よく言ったものだ。

まさか、実際にこの目で目撃することになるとはね…。

噴水広場に着いた瞬間、ムワツと、ワインのほうこう芳香が漂ってきた。

この匂いを嗅いだけでも、私なんかは酔ってしまえうだ。

ここクーヘン王国キルシュ州学園都市の古くからの習なわしで、大晦日ジルヴエスターには、今年出来たワインを噴水へと流し込む。

それぞれがグラスを持ち込み、ワインをすくいとり、花火を見ながら、新年の訪れをお祝いする風習になっている。

…しかし！　しかしだ…。

クーヘン王国でも日本と同様、お酒は20歳を過ぎてから、という現実。

な、なんてことだ。ヘビの生殺しではないか、これでは。

お隣ドイツでは飲酒年齢はとっくに超えてるのに…。

乙女ゲームだからって、こんなところまで、日本の法律に寄せなくなっているいいじゃない！

くそー、あと4年後、待つてろー！

私はワインの噴水を横目でにらみながら、みんなたちとグレープジュースで乾杯する。

「プロージット！」

「プロージット!!」

…うん、ここで、ガチャーンって、地面に叩きつけたくなってくるのよね。

これは、もう私のサガね…。

あの時、若いトウルナイゼンが『自由惑星同盟最後の年に！』なーんて口走って：

…懐かしいなあ。神々ラグナロクの黄昏作戦。

カイザーが、それから、疾風ウオルフの銀影を窓から見つめながら、失われた赤毛の盟友に思いを馳せるのよねえ。

「…まあ、ろくでもないことを考えていそうね。」

隣のオーガスタが私の妄想を途中で打ち切る。

なにをお！ 銀英伝を悪く言うなし。

ジーク・カイザー！

ホーフ・カイザーリン！！

銀河帝国に栄光をつ！

今日のミンナはお気に入りの緑のセーターを着ている。

『童貞殺し』と私は呼んでいるが、ボディラインが綺麗に見えるこのセーターを着ていると、ミンナがまるで女神のようだ。

…しっかし、こうして、見ると、ミンナってやはり大きいっていうか、なんというか…ムムム。

世の中って、時に、不公平よね。

コ○ミのミナ効果かしら、やっぱり。

…私にも、分けてほしいよお。

ぐっすん。

ちなみにヒロインは今日は私たちと一緒にいない。

前回のクリスマス・パーティーの時もそうだったけど、

いつのまにか、私の頭の中にヒロインの存在が消え失せてしまっていることがあるのよね。

今回、初めて気が付いたんだけど、そういう時ってたいてい、クリスマスパーティーであったり、みんなで新年会行こうよ、って計画しているときで、

後日、あれ、なんで友達で誘おうって言ったのに、誘ってなかったんだらうって気付くの。

本当、不思議よね。

それで、改めて、前世のゲームのことを思い出したんだけど、

たしか、このゲームって、『カリスマフレーム』なるものが存在してたのよね。

条件によってクラスの人気者になったり悪女になったりするらしいんだけど…。

ヒロインって、ほら色んな人に見境なく粉かけてるって聞くし、たしか、悪女認定されるもパーティーに参加できなかった気がするのよね。

なんか新年のフラグもそれでダメだった気がする…。

あと、容姿ステータスが一定条件を満たさないと、とき○モでいうところの外井システムが発動して、門番にはじかれちゃうのよね。

ヒロインちゃんも、そろそろ、ダイエツトしなきゃねえ…。

まあ、私はそのままでも可愛いと思うんだけどね。

アニスにやんみたいで…。

…：うええええん、アニスちゃーん、なんで私を置いて天国へ行っちゃったの？

私、とつても、可愛がってたのに…。

「マリーンちゃん、どうしたの？」

急に涙目なみだめになった私をミンナがかがみこんで心配する。

「う、うん、大丈夫よ。」

ちよつと、昔のことを思い出しただけ。」

「また、あの子犬のことを思い出したの？」

そういうところはちつとも変っていかないのね、マリーン。

もう、いい加減、忘れなさい。」

うう、だつて、だつてさあ。

マリーンのことを最初に理解してくれた一番の友達だったのよ。

忘れようにも、忘れられないの。

最初にヒロインちゃんの顔見たとき、マリーン、ちよつとビックリしちゃったのよ。

：もしかして、あの子の生まれ変わりなんじゃないかって。

だからさあ、ヒロインのこと、なんか他人事には思えないのよねえ。

アニスちゃんのことだからついつい自分が何とかしなくちゃって思っちゃうのよ

ねえ。

エリカ・クラウスっていう人とアニスちゃんとはまったくの別物だつてわかつてはいるんだけど…。

「…まったく、門番じゃないけど、あなたつて、本当にお人好しね。

あの子が今学園で孤立してるのだから、自業自得じごうじとくなのよ。」

そうは言ってもなあ。

「友人として、はつきり忠告しておくわ。

エリカ・クラウスにはこれ以上近づかないことね。」

オーガスタが断固^{だんこ}として言い切る。

…お、おう。

それにしても、ヒロインちゃん、オーガスタにずいぶん嫌われちゃったよね。やっぱ、最初の電話被害が大きかったもんね。

あと、もうすぐで、今年が終わる。

今考えると、激動の一年だったなあ。

まさか、自分が前世では21世紀の人間で、

私が今住んでるこの世界が、『ゲームでやったことのある世界』だとは思わなかったよね。

まさに驚天動地、空想科学小説の世界だよ。

…カーレンベルク公爵家が2年後に没落の憂き目に合うことが判明するし、

なんとかその原因であるクーヘン内乱を阻止しようと、首謀者ルードヴィツヒの右腕

である直司^{ナオジ}を日本へ帰したり、オルフェウスに働きかけたり、色々してるけど、

…私、うまくやってるかな？

来年は少しでも没落フラグを減らしたいな。

「ねえ、12時ちようどに、

恋の願い事をするとか叶うっていう

おまじない、やってみない？」

…私はちよつと遠慮しとこうかな。

正直、今の私は人生がかかってて、恋愛って気分にはなれない…。

「そんな子供みたいなこと言つて、
所詮^{しよせん}迷信よ。」

でもゲームとしては

楽しめるわね。」

とオーガスタ。

…おつ、これは、いつもの「ドライな私、カッコいい」を演じてますな。

長年の付き合いから、どうしてもわかつちやうのよね。

オーガスタの通常運行つうじょううんこうってやつですか。

ふっふっふっ、こちとら、ブラウンシユヴァイクの息子さんにご執心しゅうしんだつて調べしらはつ
いてるんですからねっ！

どうだつ、紫クチビルっ。

「…んー、まっほんっ、」

オーガスタが咳せき払いをしながらこちらを睨にらんでくる。

ちっ、気付かれたか。

「じゃあ、

やってみましょう！」

とミンナが私たちに微笑ほほえみかける。

か、可愛い…。

恋する乙女ってわけですか…。

ルードヴィツヒめえ。

「あ！

カウントダウンが始まる。」

∴ 3, 2, 1

「Frohes neues Jahr (新しき良き年を)！」
パーンっ！
と花火がはじける。

1936年がはじまった。
今年はベルリン・オリンピックも開催される。
直司の手紙に書いてあったけど、

妹がどうしてもそれでここに来たいのだと駄々をこねて困っているらしい。

直司もちゃんとお兄ちゃんしてるのね、ってちよつとほほえましくなったわ。

妹ちゃんの期待にこたえて、頑張つてチケット取らないとな。

ベルリン・オリンピックといえば、宣伝相せんてんしょうゲッペルスの独壇場どくだんじょうよね。

歴史上、初めて、聖火リレーが行われたオリンピックで、後の大戦時の侵攻作戦の時に、その時調査されたルートをそのまま使われちゃったりして。

はじめて、テレビカメラの入った中継が行われたのもこのオリンピックだったけ。

リーフェンシュタール女史の記録映画『オリンピック』はベネチア映画祭で金賞まで取ったほどのよねー。

… うーん。

私は、ナチスのことは嫌いなんだけど、ちよつとこのオリンピックは妹さんと一緒に見に行きたいかな。

今だつたらIOCの圧力とボイコット運動の影響で去年制定された悪名高いニユルベルク法も軟化してるわけだし、比較的、安全な国よね。

チケット、…手に入れたいよねえ…。

そんなことをつらつら考えてると、

「みんな、

誰との恋の願い事を

したのかしら」

とミンナが可愛らしく聞いてくる。

「あつ、マリーンちゃんは言わなくてもいいのよ。

わかってるから。ウフフフフ…」

…うん？

えっ、どゆこと？

「秘め事がいいんじゃない？」

オーガスタが冷淡に言う。

「…私にも聞いたたりしないで頂戴ね。」

ふふふ、顔真っ赤にしちやって。

ツンデレさんだから。

あなたの気持ち、ちゃんとエドヴァルトにも伝わるといいね。

短パンの少年

冬期休暇も終わり、神秘研究部も来月に差しせまったバレンタインに向け、本格的に忙しくなってきた。

ハンミヨウウから出る液を絞る作業では、部長である私の指示のもと部員たちの安全管理を徹底している。

…とはいえ、ほんと気が抜けないのよねえ。

媚薬の原液に混ぜこむハンミヨウウも微妙な量だし、些細なミスが命取りになりかねないので、毎回ハラハラものである。

ああ、こんな時にコマゴメピペットがあればなあ。

もう発明されてるはずだし、直司ナオジ、送ってくれないかしら。

直司の実家って、表参道のいいところにあつて、駒込こまごめにも結構近いのよね。

…まあ、当時の交通手段から行くと、今ほど手軽に行ける距離でもないのかもしれないわね。

ダメ元覚悟で、今度の手紙の返信の時に聞いてみることにするか。

…それにしても、バレンタイン。

2月14日に女の子の方から意中の相手に贈り物をする習慣。アレって、日本のチョコレート会社の販売戦略だったのよねえ。

具体的に名前をあげると、モ○ゾフさんの。

…なっ、何で、クーヘンでも『乙女の重要イベント』になってるのよっ！

海外じゃ、あくまでも、恋人を大事にする日であって、むしろ男性のほうから女性に花をおくったり、メッセージ入りのラムネを恋人同士で送りあたりする微笑ましいイベントよ。

…まあ、もともと日本人の発想で考えられた乙女ゲームだから仕方ないかもしれないな
いけどさあ…。

日に日に憔悴しやうすいしていつてる部員たちの身にもなってほしいのよ…。

…私、含めてさあ…。

…はあ、ダメだ。心労しんろうマックス来てるね、これは。

プリンちゃんとギムネマちゃんは元気かしら…。

メンドクさいと思ってたけど、今や私の癒いやしだよ…。

私は現実逃避げんじつとうひがてら、中庭にある温室へと足を運ぶ。

ちなみに、『プリン』と『ギムネマ』というのは、私が今、温室で育てているマンドレイク達の名前である。

マリーンの名づけセンスは基本食べものやスイーツ関係のものが多く、『ギムネマ』とはずいぶん渋い名前しぶいをつけたものである。

…今はやりの『タピオカ』ちゃんなんてどうだろうか…。

女子高生っぽくて、おっシャレじゃなくいつ？

…だ、ダメだ。疲れすぎて自分でも頭が正常に働いていないのがわかる…。

…すでにノイローゼ寸前なんだろうか？

は、早く、温室に行かなきゃ…。

わたしのオアシス！

ガラス製の扉を開けたとたん、ムツとした熱気が私を包む。

温室効果で部屋の温度が一定に保たれている。

人類が発明した叡知えいちの中でもかなり優秀なほうだと思う。

「…はあ。」

なんか疲れちゃったなあ…。」

私はふう、と吐息といきをつく。

「…落ち着く心…。」

聞き覚えのある声が温室に反響する。

「え!？」

…この声、もしかして、最○記の人？

誰もいないと思ってた私の背筋がビクッと反応し、一瞬にして固くなる。
緊張はすでにMAXに達している。

「…ギボウシの花たちが、

君が自分が必要としているって

言ってる…。」

と短パンの美少年が私に向かってさらに声を重ねてくる。

ギボウシは、縦に一列に並んだ花を咲かせる。

橋などの欄干らんかんにある擬宝珠ぎぼしにその形が似ていることからその名がつけられた。その花言葉は『落ち着き』である。

カミュ・パールツグラーフ・フォン・ジルヴァーナー・リユーネブルク。

白髪に赤い目をしたアルビノの少年であり、シュトラールの一人。

クーヘン北東の州、トラベオのジルヴァーナー領を治めるリユーネベルク伯爵家の次男である。

ちなみに名前は、カミュではなく、カミュ。

つづりにすると、同じなんだけどね…。

…カミュでもないのよ、まぎわらしいけど。

下は赤い短パンにガーターベルトでまとめあげ絶対領域をかもしているのに、上はガツチリとした赤い軍服調の服で固め、橙色のマントまでガツチリまといっている。

温室では暑そうな恰好に見えるが、当の本人はすすしそうな顔で花に水をやってい

る。
『短パン効果』よね、きつと。

上でたまりにたまってしまった熱を下の短パンに向かってきつと出してるのよ。

…て、今の私って、相当に疲れてるのね…。

「きつと疲れた心を

この花が癒いよしてくれるよ、マリーン。」

「…え、私の名前を知ってるの?」

伯爵家のあるトラベオは私の家の領地があるエーレントバレーの少し北にいったところに位置している。オーガスタのいるファイゲにも近い。

それでも、カミュとは今まで面識はなかったはずだ。

「…知ってるよ。」

ルイーから君の話をよく聞く。

裏でコソコソと動き回っているんだってね。

…エドも憤慨ふんがいしていたなあ。

オルフェをそそのかした性悪女ししょうわるだって。」

あー、結局、オルフェレウスはお友達のエドヴァルドくんに説得されちゃったってわけ。

あの日以来、シュトラール方面に何の動きもないから、どうしたのかなあ。って、ちよつと気になってはいたんだけど…。

何というか…、本人の意思が弱いというか、考えが足りないというか…。

おおかた、お友達のエドヴァルドくんが繰り広げる抽象的な人物論に煙を巻かれた形だっただろうけど…。

ちよつと調べればリードヴィツヒの陰謀の証拠なんて簡単につかめるだろうになあ。

…私、ヒントまで出したよね？

…本当、失望させてくれるよね…。

「しかし、びつくりしたよ。

きみが来るとき、急に花たちがうれしそうにソワソワしだしたんだ。

一体、誰が来るのかと思ってただけ…

…マリーン、どうやら、きみはこの植物たちにとっても愛されてるようだね。」

カミュには特殊な能力があつて、花たちとも会話ができる、と聞いたことがある。そんな能力、私にもあつたらいいのにねー。

あの子たちのご機嫌きげん取るのつて、けっこう大変なのよ。
意思疎通いしそつうできるとすつごい楽なんだけどなあ。

まあ、でも手間のかかる子たちほどカワイイつていうからね。
最近では温室で過ごすのが私の楽しみになつていた。

「…花は正直だからね…。」

今まで、きみのことを近寄ちかよりがたい人だと思つていたけど…。
ずいぶん綺麗な心を持つているようだ…。

…今日、ここへは？」

私は、自慢の子たちをカミュに紹介する。

「…マンドレイク。」

しかも、ずいぶん希少種だね。

たしか、それって、相当な魔力がなければ育たないはずなんだけど…。

…もしかして、君にはぼくと同じ能力ちからを持っているの？」

カミュの持つメインの能力は『未来予知』である。

アルビノ持ちの虚弱体質の上、このような特殊な能力を持つていたので、小さい頃から伯爵から屋敷の外へ出ることを禁じられていたらしい。

この学園に入学するにあたっては熱心な家庭教師による説得が伯爵の心を動かし、実現したものと私は聞いている。

…うーん、でもその病弱な身体でシュトラールって、果たして勤まるもんなだろうか。一応、この学園のシュトラール候補はこの学園都市全体の市政を任されているはずなんだけど。

やっぱり、噂に聞く通り、シュトラール補佐が書類とか政務せいむのほとんどをやっていて、シュトラールたちはただ会議に出てハンコ押すだけといったことなんだろうか。

いわゆる、お飾り役職ってやつね。

そうでなければ、市政の運営を片手間かたてまにドイツ首脳陣と交渉を繰り返し、反乱軍を組

織するなんて芸当、ルードヴィツヒにできるだろうか？

…なんだか、2年目のシュトラール活動がすごく不安になってくるわね…。

…しかし、これは、私にとって、好機なのかもしれない。

ルードヴィツヒはカミュに甘いところがある。

彼の反乱にしたって、カロツサ博士のカミュをはじめとする超能力者たちを酷使する人体化学兵器、メーヴェ：じゃなかった…ヤクト・ヒルシケーフアに反発したことに端を発している。

だからといって、クーヘンの市民たちを巻き込んで、戦争をおっはじめようぜ、なんて考えは、到底理解できるものではないんだけどね。

「…みんなに内緒にしてくださいね。」

同じ能力を持つ者として、その危険性はわかるでしょう。」

私は人差し指を口元に置く。

カミュは一瞬おどろいた顔を私に見せた。

「…やっぱり、そう言うと思つたよ。

僕と同じだもん。

嬉しいなー。

今までそういう人いなかったから…。

これは僕たちの秘密だね、マリーン。」

無邪気に笑うカミュ。

…ふう。

仲間意識もあるんだろうけど、こういう子って、一度懐ふところに入ったら、とたん友好的になるものなのかもしれない。

「…でもね、マリーン。

きみはルーイと敵対するつもりなのか。」

次の瞬間、カミュは厳しい表情になる。

カミュにとって、ルードヴィツヒは古くからの友人である。

リヒテンシュタイン家とリユーネブルク家は遠縁にあたり、幼い頃、ルードヴィツヒ

はリユーネブルク家を訪問したことがある。

その時に病弱の自分を構い、一緒に遊んでくれた優しい友人としてのルードヴィツヒの記憶がカミュの中で強く残っている。

こういう幼い頃の刷り込みは、案外強かったりするのだ。

そういえば、ゲーム上でもエドヴァルドと直司がルードヴィツヒの陰謀についてカミュに相談した時も、カミュはルードヴィツヒの人間性を説いて、彼を弁護していたように思う。

エドヴァルド対策を怠ってしまった間違いの轍をここでまた踏むわけにはいかない。

「そのルードヴィツヒが、あなたの故郷、トラベオを焦土しょうどの地とし、クーヘン国中じゅうりくを蹂躪じゆうりんするのである。戦乱の世を作ろうと、画策しているとしたら、どうしますか？」

私はゲームに出てくる『焦土化した故郷を目の前に呆然とたたずんでいるカミュ』の一枚絵のCGスチルを頭の中で思い浮かべる。

カミュは目を見開いた。

「……ま、まさか。

ルーイがそんな…。

信じられない…。

…うん、でも、きみは嘘はついてない。

それはわかっているんだけど…。」

カミュは嗚咽おえっを漏らしている。

信じていた旧友の国への裏切り行為にショックを受けているのだろう。

私も少しやり過ぎた。

彼の能力を利用し、悲惨な映像を見せてしまった。

私にとつても、封印したい過去だ。

未来永劫、『過去』にしなければならぬ光景なのだ。

トラベオ焦土化作戦は私のお父様も関係している。

その戦端はたしかにルードヴィツヒによって開かれたものだが、

トラベオに武器を運び込んだのは、父、マンフレート・カーレンベルクではないかと

推測できる。

その証拠となるものがIIツヴァイIのヒロインがビルネの街で耳にした私とお父様の会話の

一部であり、そのヒロインの証言がもとになり、わがカーレンベルク家は全財産を奪われ没落する。

身びいきもいいところだと思うが、現時点で、あの温厚なお父様が平気でトラベオを焦土化する作戦に参加するような人間にはマリーンにはどうしても思えない。

しかし、その可能性は否定できないと思う。

もし、私が最悪、ルードヴィツヒを止められずに、戦争を起こされた場合、今度は私は全責任をもってお父様を止めなければならぬだろう。

没落フラグうんぬんもあるが、なにより、マリーンが許せないのだ。

あの凄惨なトラベオの光景をこの現実の世界によみがえらせるわけにはいかない。

カミュはしばらくの間、私の前ですすり泣いていたが、
やがて、

「…わかった。

ルーイには僕から話してみることにするよ。」

と決意した表情で私に言った。

…これは、いい方向に進んだのではないだろうか。

平和を愛するカミュならば、もしかしたら、と私は思っていた。

彼にはちよつとした読心能力テレパスがあつたようだが、私の『予知能力』の根源こんげんが何かまではわからなかつたようだ。

途中で気がついて本当に良かった。

あとはエドヴァルドさえどうにかすれば、私の王手、ということになる。

ルードヴィツヒ、見てろよー。

あなたの陰謀、阻止してみせるわ。

スケート回

「わわっ、きやつー！」

ミンナが私に抱きつく。

ここは学園都市のスケート場。

バレンタインデーも目前に迫^{せま}ってきていて、神秘研究部内も次から次へと舞い込む女子生徒からの媚薬^{びやく}製作の依頼にピリピリしている。

気晴らしにカーニバル最終日の催し物を冷やかしに行こうかとも思ったが、人混みが苦手なオーガスタの件がある。

こういった苦手意識は無理をさせずに少しずつハードルの低いものから慣れさせていったほうがいい、と私は思う。

だって、オーガスタとこれからも色んな所に行きたいじゃん？

無理をさせず、ちよつとずつ、ね。

オーガスタに私たちと過ごした楽しい記憶をドンドン植え付けよう！

そんな作戦を今から考えている。

当のオーガスタは、今日は晴れ晴れとした表情をしていて、私はちよつとホツとして
いる。

またこの前みたいなひと悶着もんちやくはごめんだよ。

しかし、『スケートのひもむすぶまもはやりつつ』、なんて、昔の人もよく言ったもの
だ。

まさか、結んだ後にこのような楽園パラダイスが待ち受けていようとは…

「ま、マリーンちゃん、離さないで…。

ああつ、もうっ!!」

私はスケートが苦手なミンナの両手を握りながら、一緒に滑すべっているのだが、
さつきからミンナが転ぼうとするたびに、私に密接みっせつにくっ付いてくるのだ。

その時にあたる、あの二つの感触かんしよく。
たまりませんな。

ムフフフ… 役得。役得。

「…マリーン、あなた、滑すべれたのね。」

とオーガスタが呆れたように私たちのほうを見る。

…あ、そうか、マリーンって、ゲームでは、滑れない設定だったんだっけ。私って小さい頃北海道の釧路くしろってところに住んでいて、スケートの盛んな町さかだったのよね。

小学校の校庭にも冬場には普通にスケートリンクが張られてたり、家の近所にも「柳町スケート場」っていう、オリンピックの選手も訪れちゃうくらい有名なスケート場があつて、学校が終わるたびに滑りに行つてたの。

教室にも通つてたけど、ほとんど、自販機じはんきから出るココア狙いだったわね。

ようっし、久しぶりだし、ちよつと本気出してみようか。

私はミンナにちよつと待つてもらい、自由にスケートリンクを駆け巡る。

靴があまりフィギュア向きに作られてないので、なかなかコツがいるが、マリーンの若い身体の影響なのか、すこぶる調子がいい。

クルクルと時折ステップを混ぜながらも、外周を回りこむ。

タッチロールというやつだ。

氷をすべる事自体は昔の人もやってたんだけど、円を描くような優雅なすべりはオランダで始まったのよね。

うん、今、人少ないし、ちょっとやってみようか。

後ろ向きに滑りながら、左足インサイドエッジで踏み切る。

踏み切り時と着氷時に足がハの形になるのがこのジャンプの特徴だ。

おつ、いつもフワツとしか飛べなかつたのに、今回はキツチリ決まったな。

マリーンの身体能力、すごい。

ふふん、四回転飛んだ安藤美姫ほどじゃないけど、我ながらなかなか上手く飛べたほうじゃないかしら。

目を丸くしてこちらを見ているミンナとオーガスタに自慢げに視線を向ける。

そんなドヤ顔を晒している私に、とつぜんパチパチと拍手する音が聞こえる。

見ると、チョコビ髭ひげを生やした初老のダンディなおじさんがこちらに近寄ってくる。

なんだなんだ、またナンパかな？

最近多いのよねえ。

あの喫茶店のボーイに、なんか妙に目をつけられて、仕事そつちのけで電話番号とか聞かれるんだけど、門番さんが必ず追い払ってくれるのよね。

本当、助かるわ。

いい人よね。

「いやあ、お嬢さん。

スケート、上手だねえ。」

「ありがとうございます。」

「今のはね、私が考えたジャンプなんだよ。

まさか、こんな若い子が素敵に飛んでくれるとはね。

思わず、拍手してしまったよ。

「…ええっ!!!もしかしてサルコウさんですか!!?」

ウルリツヒ・サルコウ。

1908年のロンドンオリンピックの金メダリスト（当時は夏季に行われた）。

世界フィギュアスケート選手権での10回にわたる優勝。

スウェーデンの英雄で、フィギュアスケート界において、その名を知らない人はいないほどのレジェンドとっていい人物である。

先ほど、私が飛んだ、『サルコウジャンプ』はその名がしめすとおり、もともとこの人が考え、大会で成功させたものである。

「ほほう、私の名前を知ってるのだね。

こんな若いお嬢ちゃんにまで知られているなんて、

私もずいぶん偉くなったもんだ。

うん、いかにも、私が、サルコウだ。

よろしく頼むよ。

お嬢さんの名前は？」

「私は、マリーン・フロイライン・カーレンベルクと申します。」

私は優雅にカーテシーを行う。

「あなたが、カーレンベルク公爵様の！」

いやはや道理で…。

実に優雅で気品のあふれた滑り方だと思いましたな。」

急に手をすり合わせ、へつらいの表情を見せる。

私が名前を言うのと、多くの人が見せる反応がこれだ。

国の内情を知るクーヘン貴族であれば、さらにそこに加えて蔑みのかかった皮肉を混ぜてくる。

彼らはバカな私にはわからない、とても思っているのだろう。

もうすっかり慣れてしまったことだ。

ちつとも気にならない。

「…いや、しかし、その若さでそれだけ滑れるというのは、ものすごい才能の素質だ。

うむ。ヒトラー嫌いが、今回は幸いしたな。

ちよつと、サボって、ここまで羽根をのばしに来たんだが

まさか、こんな島国で、このような素敵な逸材に出会うことになるとは…。

… どうです。わたしのもつとでオリンピックピックを目指しませんか？

今、ドイツで開かれている大会は無理でも、

あなたの実力をもつてすれば、次のサツポロ大会には必ず間に合うはずだ。

こんな政情の不安な地域にいるより、私のいるストックホルムの整った環境でトレーニングするほうがよっぽどいい。

どうです？

なんなら、スウェーデンの帰化申請までやってもいい。

そしたらわがスウェーデンのメダルは確定だ！

やつほーいっ！

君の公爵としての身分は保証しよう。

それは約束する。

もし良ければ、私から今度、カーレンベルク公爵様に話をするでしょう。

うん、そうしよう。

そうと決まったら…」

どえええ！

めっちゃ、凄いい勢いで話が進んでるんですけど…

ちよっ、ストップ、はると、しゅとっぺん！

…うん、しかし、なるほど、スウェーデン亡命は一つの有効策かもしれない。

もともとヴァイキングとして有名なノルマン人が興した王国であったスウェーデンは、17世紀の国王、グスタフ・アドルフによって大国へと急速に発展を遂げた。

三十年戦争の結果、ウエストファリア条約によって、一時期はバルト海全域を支配す

る強豪国になる。

しかし、その後、18世紀、ロシアとの北方戦争に敗れ、19世紀にはフィンランドを失い、その領土は一気に縮小する。

それからは、東方の大国ロシアの脅威に脅えながらも、第一次世界大戦、第二次世界大戦中も中立に貫き、比較的、安定した国だったはずだ。

オリンピックを指しながら、大好きなフィギュアスケートに打ち込みながら平和な日々を過ごす。

しかも、次の冬期オリンピックの開催地は私の前世でいうところの故郷である北海道だ。

スウェーデン代表のオリンピック選手として堂々と故郷に錦を飾るのも悪くない。まさに私にとって理想の生活ではないだろうか？

目指せ、真央ちゃん！

トリプルアクセルを習得して、世界を圧巻するぞっ！

しかし、ハッと私は思う。

…残された家族はどうなるだろうか。

私は父の顔、メレデイスの顔、それと私を大切に思ってくれてる使用人たちの顔を次々と思い浮かべる。

私がいなくなったことで、ルードヴィツヒの戦争を止められなかったら、彼らは確実に没落へと突き進むことになる。

…ミンナは、どうなるだろうか？

彼女の笑顔を曇らすことだけは絶対に避けたい。

…オーガスタも最初はいけ好かないやつだと思ってたけど、今や私にとって、かけがえのない親友だ。

前世を知ったからには、もはや、ヴォルフエンビュッテル家とユーリヒ家の没落を阻止することは私の責務になっている、といえるだろう。

「大変、自分には、もつたいない話だとは思いますが…」

私はサルコウ氏に丁重にお断りを入れる。

「…そうか、そうだろうな。」

公爵家の娘ともなると、色々しがらみもあって、大変かもしれないな。

：しかし、私はあきらめませんぞ。

国際スケート連盟会長として、あなたの才能をこんなところで腐らすのは見ていられないのです！」

何やら思いつめた表情でチョビ髭の男は去っていった。

気が抜けた私にミンナが飛びついてくる

「マリーちゃん、すごいーい！」

スケートの会長さんからスカウトされるなんて。

：でも、マリーちゃんが遠くへ行かなくて本当にホントに良かったア……。」
ミンナはウルつとした表情で私にしがみつく。

「：： やっぱり、ダンスよりスピードよ。」

オーガスタもホツとした表情で私を見つめる。

どうやら彼女なりに、かなりヤキモキしていたようだ。

うん、私、あなた達を置いてどこにも行かないよ。

恋の指南

あれからサルコウさんからの熱心な勧誘の電話が父の元に来ていているらしい。
いはく

『お嬢様の才能は本物だから是非スウェーデンにある私のスポーツクラブで練習をさせたい。』

『できればこちらでの公爵位を残したまま帰化させて、スウェーデンで4年後の札幌大会を目指して、ミツチリと指導したい。』

熱烈なラブコールを受けて、父もやぶさかではない心持ちになってきているらしい。
ついでに夏のベルリンオリンピックのチケットを何枚か送ってくれた。

親しい友人でも連れて、一度本場の空気を味わってみてはどうか、とのありがたい申し出だ。

本当は今ドイツで開かれている冬季五輪の方に行ってもらいたかったみたいだが、さすがに会期が間に合わなかったようだ。

『棚からぼた餅』とはこのことをいうのだろう。

チケットどうしようかなーって悩んでいた時期だけに、私的には喜びもひとしおだ。

： っかし、4年後の札幌大会か。

あの時はすっかり失念してたけど、日中戦争勃発のため、たしか中止になってしまふのよね。

直司ナオジが上手くやってくれれば、もしかしたら『バタフライ効果』かなんかで盧溝橋事件ろこうきょうじけんを防げるのかもしれないけど、そこまで私は樂觀視をしていない。

今月、起こる二・二六事件にしたって、直司は四方巡り回って奮闘しているようだが、『歴史の矯正力きょうせいりき』というものには抗えない可能性がある。

そういうSFものってよくあるよね。

色々やってても、結局は『終着点は同じ』だという。

そう考えると、私が今やっても何も無駄なのかなあ。

でも、ルードヴィツヒ側が少し動きにくくなってきているようだなあ、つてところは最近ひしひしと感じるのよね。

密偵から報告が来ていたけれども、カミユとの話し合いでルードヴィツヒはすっかり気落ちしてしまい、この頃は科学研究室に閉じこもりぎみらしい。

ルードヴィツヒの心の拠り所よきどころであるシュトラールの仲間たちを次々と説得していったのが功を奏したのだろう。

右腕であった直司を日本に帰してしまったのが一番大きいと私は思う。

彼はああ見えてシユトラールの中では有能なほうだ。

ゲーム本編で、ルードヴィツヒがクーデターを起こすに当たって、彼はかなり重要な役割を果たしていたのではないだろうか？

オルフェレウスにしてもエドヴァルドがいなければ、基本は私寄りだ。

エドヴァルドさえどうにかすれば、彼も重い腰を上げてくれるのではないだろうか。

さて、エドヴァルド対策のほうだが、私の中ですでに結論は出ている。

「オーガスタ、あなた、ブラウンシユヴァイク子爵ししやくの息子さんのこと好きでしょ？」

昼下がりの中庭。

私たち3人は仲良くランチ中だ。

「……っ、なっ！」

唐突な私の質問に

オーガスタは目を白黒させた上に、すぐに顔を茹ゆでダコのように真っ赤にさせた。

わつかりやすいんだからなあ、もう。

普段ツンツンしてるだけに、そういった表情、スゴく可愛いわよ。

エドヴァルドとオーガスタを恋仲にしてしまったうえに、オーガスタのほうからエドヴァルドに働きかけ、あわよくば、ルードヴィツヒのクーデターを止めるように説得してもらおうようにしむける…。

…まあ、それは樂觀的に見た場合の話だが、少なくとも、エドヴァルドを抑えてしまえば、オルフェレウスが動くことが楽になる。

ヒロインをくつつけるという方法も考えたが近親相姦みたいで、色々とマズいだらう。

それに私個人としても、友人の恋を応援してやりたい。

ミンナは隣でニヤニヤしながら聞いている。

こういう恋バナが好きな子なのだ。

「そつ、そんなことないわよっ！

エドヴァルド様なんて、私っ、興味なんか：：！／／／カアアア

いやー、普段がアレだけに、凄いギャップだな、こりや。

私が男なら、今すぐ抱きしめたいぜ。

かつわういー！

「オーガスタ、私と何年の付き合いだと思ってるの？」

小さい頃からずっとあなたを見てきたわ。

あなたが熱い視線を向ける先には必ずその誰かさんがいるの。

この間のクリスマスパーティー、あなたは一体どこに行っていたのかしら？

あなたの態度は、はた目から見ればものすごく分かりやすいのよ。

それに：：」

「ちよつ、ちよつと：：」

私はオーガスタの制服の懐ふところをガサガサと探る。

：： うん、ここじゃないか。

ではお胸のほうか：：

「マ、マリオンちゃん、何してるの!？」

ミンナは顔を両手で覆おおいながらも、指の隙間すきまから私を凝視ぎよじしている。

うん、今、私がやってる事って変質者よね。

それは自覚している。

… おつ、こんなところに裏ポケットが。

ほうほう、しかし、オーガスタもなかなかこれでポリユームが…

… じゃなかった。煩惱退散っ！

獲ったどー！！

私はオーガスタの胸の裏ポケットにあった一枚の姿絵を取り出す。

オレンジの髪、浅黒い顔。

言い逃れができないくらいエドヴァルドの特徴を精巧に捉えている絵である。

… 一体、誰に描かせたのやら。

愛しい人の姿絵をずっと自分の胸ポケットにしまっているとは…こう見えて彼女はものすごく乙女な子なのだ。

まあ、これはフランシス先生に教えてもらったん情報なんだけどね。

あの先生、人の色恋沙汰が三度の飯より好きだって人だから…

「… ううう、わ…わかったわよ…。

わ、私はエドヴァルド様のが好き。

… 一目見たときから、彼に惹かれていたの。

あの人のガサツに見えて、優しいところが好き。

まるで少年のようにキラキラした目をしながら、その実、男らしいところがあつて…。」

うわあ、おつとめー！

一旦、認めてしまったオーガスタがエドヴァルドについて語る熱量がスゴイ。

顔を赤らめながらも、次々と出てくるわ出てくるわ、エドヴァルドのこと。

…、そ、そんなふうに見えてたのか。

『恋は盲目』というからなあ。

「ねえ、デートとかに誘わないの?」

おおつ、ミナ、いいこというな。

こういったカポーが最初に行くところとして、一番手堅いのは、やっぱり映画館だろうな。

今やってる映画といえば……アレだ。

『ミスターピーン』

中国人のコミックリリーフがカメラを片手にフランス各地で騒動をひき起こしていくコメディ映画。

その内容もさることながら関係各所から抗議が来そうな映画のタイトルに私は戦慄を覚える。

……コ〇ミ、いくらなんでもその名前は安直な上に杜撰すぎやしないだろうか？

日産元社長にどことなく雰囲気似ているあの鼻の大きな英国人に許可をちやんと取ったんだらうか？

ちなみにPS2の移植版ではローワン・アトキンソン氏から抗議が来たのか、諸般の事情の末なのか、

『ミスターズーン』にそのタイトルが変更されていた。

……大して変わらないがな。

しかし、コメディ好きのマリーンとしては、大変、興味を持っている映画だ。皮肉の効いた白黒サイレント映画の『黄金狂時代』でさえ大爆笑する女だ。

我ながら笑いの沸点ふってんが低いようで情けない……。

まあ、前世でもお笑い番組を見てる時、彼氏が隣で呆れてたっけなあ。自分でも時々、途中から何で笑ってたのかわかんなくなる時もあるし。

「き、きつとシユールで、面白そうよ。二人で行つてきたら？」

「で、でも……、エドヴァルド様になんて言えばいいか……」

「大丈夫よ。」

『今度のバレンタインと一緒に映画を観に行きましょう。』

それをあなたがいうだけで、相手はイチコロよ。

オーガスタは綺麗きれいなんだから。

クールビューティっていうのかしら。

そういう普段クールを気取ってる女が自分にだけすり寄ってくるっていうのは、そりゃあ、男にとつちや、堪たまらないものよ。

あなたに誘われてなびかない男は改めて鏡で自分を見つめ直した上で眼科にでも行ったほうがいいんじゃないかしら。」

「……そ、そこまで言う？」

オーガスタは私の物言ものいいに少し引いた表情をしている。

「マリーンちゃんの言う通りよ。

女は度胸。フアイト！」

ミンナも私に乗っかってきた。

相変わらず可愛いなあ。

「…わ、わかったわよ。…」

今日の乗馬部のときに彼に聞いてみる。」

うおっしやあ！

私とミンナは顔を見合わせる。

もちろん、私たちも陰ながら彼女の恋の行方を見守るつもりだ。

ウヒヒヒヒ… 楽しみだなあ。

馬場の情事

「ああ、マリーン様、ミンナ様。

オーガスタ様をお待ちですか？」

ミンナと一緒に乗馬部の馬場ばばへと向かうと、厩務員きゆうむいんのシユテファンが馬にブラシをか
けているところだった。

オーガスタを迎えに行くのに馬場には良く立ち寄るので馬の世話係であるシユテ
ファンと私たちは顔見知りだ。

しかし、…この匂い…。

懐かしいよなあ。

私が北海道の釧路にいたころ、友達の家が酪農やってて、よく牛舎に遊びに行つたつ
け。

ケモノ臭いというかク○臭いというか…。

子牛の誕生に立ち会ったときは感動したな。

牛を追いやるための電線に感電したのも、牛に蹴られそうになったのも、今となって
はいい思い出だ。

「…それなんだけど、シユテファン。」

ちよつとここらへんでいい塩梅あんばいの隠れられるところ知らない？」

私はかくかくしかじかと事情を話す。

「ええ!？」

オーガスタ様がエドヴァルド様を！

よ、よろしいでしょう。

私が案内します。」

シユテファンを先導に馬場周辺を見渡すことができ、かつ隠れてる事がわかりにくい芝生しばふに案内される。

「…ここならまあ、大丈夫だと思います。」

私は残りの仕事を片付けなければならぬのでこれで失礼いたします。」

うん、ちよつと離れてるけれどもここならギリギリ会話も聞き取れるんじゃないだろうか。

ミンナも満足そうにコクコクと可憐かれんにうなづき、私と一緒に芝生にしゃがみこんだ。

シユテファンは頬を赤くして、ウツと何やらうなづいていたが、ごまかすように首を振つてその場を走り去っていった。

ミンナの魅力はシユテファンにはちよつと刺激が強すぎたかな。

オーガスタ達の帰りがいつも少しかかっているようだ。

おそらく、今日は障害飛越練習ではなくクロスカントリー（耐久）のコースをまわってたのかもしれない。

30分くらいして、少し足がしびれてきたかな、と思ったときにオーガスタとエドヴァルドが馬上で談笑だんしやうしながら、馬場へ戻ってくるのが見えた。

ミンナは私の腕をギュつとつかむ。

私もミンナのほうを振り向き、コクリとうなづく。

ふふ

私と一心同体って感じね。

エドヴァルド・マルクグラーフ・フォン・ゼクト・ブラウンシュヴァイク。

子爵家の跡継ぎでオレンジ色の髪に浅黒い肌をした美少年である。

ゼクト領はマリーンの家うちの所領にも近いので、何度か顔を合わせたことがあるが、

『オーガスタがやけに媚こびている想い人』という以外には、印象が薄い。

特筆すべきは、この人のお父さんであろう。

その名も、オットー・フォン・ブラウンシュヴァイク子爵。

ウツヒョー！ 銀英マニアの私、歓喜。

あの悪役と同姓同名とは…。

…かと言って、彼は門閥貴族の筆頭で『ガイエスブルク禿鷹の城』にこもったりするタイプでもないんだけどね。

むしろ性格はほんぼう奔放。

あちこちにこだね子種バラまいて歩く石○純一みたいなやつだ。

…うーん、リップシユタット戦役でいうと私はやっぱりオフレッツサー將軍が好きかな。

最後に忠誠心を見せて一矢報いるアンスバッハもいいと思うけど、キルヒアイスがなあ…。

…しっかし、このゲームを製作したコ○ミスタッフさん、相当な銀英好きと私は見たね。

公式ホームページにも自家用機の名前は『ブリュンヒルト』と書いてあったらしいし…

…おっと、いけない。注意がそれてしまった。

「…それでよお、俺のアルテアがよー。」

エドヴァルドが馬上でオーガスタに笑いかける。

オーガスタがそれを聞いておほほ、と受け答える。

その目はすでに『恋する乙女』だ。

おおつ、話してる内容はここからじゃよくわかんないけど、なんか二人ともいい感じじゃん。

同じ乗馬部だからね。話に通項も多いのかもしれない。

馬場に着き、馬を降りた二人はシュテファンに後を託す。

今日は彼が2人の馬をつないでくれるようだ。

不意にオーガスタの表情が思いつめたものになる。

： おつ、来るぞ。

私たちはこれから起こるラブロマンスを聞き逃してなるものかと前のめりになって耳をそばだてる。

「あ、あの、エドヴァルド様、こ、今度のヴァレンタイン、もし良かったら…」

「そこにいるのはマリーンか！」

「テメエ、一体、何をたくらんでいやがる。」
急にエドヴァルドが声を張り上げ、私達のいる芝生しばふの方を見る。
隣のミンナの肩がビクツと跳ね上がる。

… あつちやー、見つかったか。

コイツ、二階から飛び降りて平気でいられるぐらい身体能力高い奴だった。
何メートル先の物陰ものかげに何かがいるかってことぐらい簡単にわかるのかもしれない。

私の名前まで当てたのは驚きだったけど…。

うちの密偵たちには今まで私のためにずいぶん無理をさせてしまっていたのかも
ね… 反省、反省。

オーガスタは呆れたように私たちの方向を見る。

「どういふことよ」といった目をしている。

「ゴメンゴメン」と私もまた彼女にアイコンタクトを送りながら、

ミンナと二人で罰が悪そうに茂みから姿を現す。

「いや、私たちに構わず、あとは若いおふたりでごゆつくり。

オホホホホ……」

私とミンナは何事も無かったかのようにその場をそそくさと立ち去ろうとする。

「おい、こら、ちよつと待てや、マリーン。

オルフェルスに何を吹きこんだ！

ルーイが何をしたっていうんだ。

ナオジが日本へ帰ったのだつてお前のせいだつて話じやねえか！

お前、俺たちを使って何を企んでたくらいるんだ。」

「……企んでたくらいるのは、そのルードヴィツヒ・ヘアツオーク・フォン・モーン・ナーエ・リヒテンシュタインだとしたら？

彼は現在、学園内の科学研究部室を根城ねじろに国家転覆こっかてんぷくの反乱くわだを企てています。」

「な、なんだと……。」

こうなつたら全部ぶちまけよう。

エドヴァルドは少々頭が足りないところがあるが、その分曲がったことが嫌いなので、真正面から向き合えばなんとかなるかもしれない。

「不思議に思わないのですか？」

科学研究室内で今何が行われているのか。

今年、ルードヴィツヒによつて特別に立ち上げられたはいいけれども、その内部で科学らしい実験や研究がなされている様子にはとても見えない。

ドアは外部の人間が入ることのできないように完全にシャットアウトされ、伽羅の妖しげな匂いが廊下にまで漂っている。

一度、中に入れてもらつて、目の当たりにする光景は玉座にふんぞりかえつたルードヴィツヒとそれにかしづく学園生徒たち……」

「そりゃー、アイツはちよつと妙ちくりんなどころがあるが……」

「それでは、シュトラールの立場を利用して軍事工場の重役と密会を重ねているわけは？」

クーヘン国内の軍部貴族と頻繁に会い、クーヘン国内の兵の編成について細かく詰問していることは？

ナチスの高官とこの秋、打ち合わせをしたことは？

先月、科学研究室内に機関短銃のサンプルが密かに持ち込まれたとしても？

…オルフェレウスからは何も聞かされていないのですか？」

やれやれ、オルフェレウスは何も調べていないのか。

これだけ裏で派手に動き回っても何も気づかないとは……。

しかも同じシユトラール委員会のメンバーである。

仮にルードヴィツヒが科学研究室内でドンパチ軍事訓練をしていたとしても、コイツらにとつては「ルーイが何かやつてるなあ。」と思う程度の平和な学園風景なのに違いない。

「な、なんだと……、そんなことが……。

すると、ルーイは本気で国を裏切るつもりで……。」

エドヴァルドは絶句する。

単純なコイツにはこのような事実の積み重ねが一番良く効く。

あとは科学研究部のガサ入れが正常に行われれば、ルードヴィツヒは敢え無く御用となるはずだ。

「ようやく、わかったようですね。

それでは、私が彼の企みを阻止しようと……。」

と私が言いかけた時だった。

甲高い声かんだかが私をさえぎる。

「コイツの言ってることは全部ウソよ!」

見ると乗馬服を着たヒロインちゃんがエドヴァルドに向かって飛びついてくる。

エドヴァルドが受け止めきれずよろめく。

ヒロインちゃん、乗馬部に入ってたのか……。

「……エリカか。」

「しかしな……。」

「だって、こいつ転生者だもん。」

きっと、ゲーム知識を使って、シユトラールのみんなをタラシ込んで、逆ハーを狙ってるに違いないわ!

ナオジだってコイツに抱きついてたのよっ!

私の前世の相手だったのにつ……」

「前世……ゲーム……転生?」

「何のことを言ってるんだ?」

エドヴァルドは戸惑った顔をしている。

私も、混乱している。

うん？

今の発言から考えると、ヒロインちゃんはおそらく私と同じ『このゲームをやったことのある転生者』だったのだろう。

だったら、前世はこのゲームの発売日の『2001年4月以降の人』であって、前世の直司との悲恋ひれんの相手でないだろう。

私みたいに前世と今世の人格がうまく具合に融合してしまったのだろうか？

彼女の前世と前前前世とかが入り混じってしまったとか……ラドなんちゃらが言うように……。

……いかん。思考が完全に変な方向にズレてしまっている。

冷静になろう、私。

クールになれ、マリーン！

……ってこれはまた違うゲームか。

「……あなたねっ！」

私のルートをことごとく邪魔して、

自分ばっかりいい思いしてさ！

爆弾処理しようにも電話替えられちゃうし！

厚化粧ババアには知らん顔されるし！

オーガスタ親衛隊には睨にらまれるし！

ナオジ様は私を置いて日本に帰っちゃうし！

オルフェ様は私のことを構ってくれないし！

カミュ様は私のこと心の醜い人間だつて罵ののしつてくるし！

ルーイ様は私の前に全然姿を見せないし！

エド様は、結局のところ、私のお兄ちゃんだしっ！」

「えっ、そうなのか…？」

エドヴァルドがビツクリしたようにヒロインの顔を覗のぞく。

…ああ、ゲームの終盤で明らかになることがここにきて、ヒロイン自身の口からネタバレされちゃったわけね。

そう。

ブラウンシュヴァイク子爵がほうぼうに愛を振りまいた結果、さる貴族の愛人に娘が生まれる。

同様にキャラバンの愛人に産ませた子がエドヴァルドで、3歳の頃、二人ともブラウンシュヴァイクの家に引き取られることになる。

しかし、それが正妻の反発を招くことになり、1年後、娘は母親の家に返され、女子しかいなかった子爵家で唯一の男子であったエドヴァルドはそのまま跡継ぎとして子

爵家に残ることになる。

娘の母親は醜聞のためその後、修道院に出家。残された娘はクラウド男爵家に引き取られることとなった。

この娘こそ、エドヴァルドの生き別れの妹である、エリカ・クラウス、つまりヒロインちゃんなのである。

：ていうか、1年も一緒にいたんだから、エドヴァルドも妹の名前ぐらいちゃんと覚えてろよなあ…。

妹のために後継^{ナレエ}を名乗らないなんてところもあるのに、案外薄情なところがあるんだよねえ。

しかも、上に正妻の娘が3人もいるんだから、継承的にはふつうそっちが先じゃない？

「全部、あなたのせいなんだから、このー!」

ヒロインは腰に刺してあった剣に手をかける。

えっ!?

やば。

乗馬服に溶け込んでいて、完全に目に入ってなかった。

っていうか、アレって、『宝剣ドウレンダール』じゃん！

オルフェレウスが国王から賜たまわった剣。

何でヒロインが持つてるの？

…ま、まさかつ！

ヒロインは宝剣を振りかざし私に向かって斬りつける。

ミンナは恐怖で動けないでいる。

エドヴァルドが呆然とそれを見守る中、オーガスタが走り出し、身を呈して私を守ろうとするが、この距離ではとても間に合いそうにない。

その時だった。

私が抱えているラビイちゃんの目がキラーンと光ったのだった。

白昼の攻防

「お嬢様、危険なの？」

ボク、頑張る。」

そう言ったラビイちゃんは私の元を離れヒロインに向かって駆け出す。

… あっ、あれは！

『真剣白刃取り』。

ラビイちゃんがその両手をピクピクさせ、ヒロインの宝剣を捉えている。
実力はほぼ拮抗きっこうしているように見える。

ラビイちゃんはもともと私が森で見つけた妖精だ。

エーアトベール州ブロッツェン領の私の家の邸の近くにはまだ人の手に触れられていない綺麗な森がある。

カーレンベルク家代々からあそこの森は絶対に手を加えてはならぬという言い伝えがあり、普段から立ち入り禁止になっている場所であった。

可愛がっていた子犬のアニスちゃんを失って以来、自暴自棄になっていた私は、その日、邸の人間に何も言わずに家を出て、導かれるままにその森の中に入ってしまっただ。

今考えてみれば、ここで遭難して死んでしまえばいいや、という気持ちだったのだろうと思う。

泣きながらズンズン進んでいく私に、森の妖精が声をかける。

「どうしたの？」

ボクでよかったら、相談に乗るけど…」

それはかつてイギリスのコティングリー村の姉妹が見た妖精とほぼ同じ形状をしていて私をひどく狼狽させた。

「あなた達、実在したの？」

新聞では妖精なんて嘘っぱちだって…」

「もちろんさ。だから、ここにいるんだよ。」

本当のボクは心の綺麗な人にしか見えないんだよ。

君のことが気に入ったんだ。

何かボクに役に立てることはないかな？」

「じゃあ、私の話し相手になって。」

ずっと私の友達でいてくれる？」

「お安い御用さ。」

むしろボクからお願いたいぐらいだね。

ずっと友達でいよう。ね、いいよね。

君の名は？」

「私、マリーン。」

よろしくね。妖精さん。」

「ボクはラビィさ。」

よろしく、マリーン。」

それからというものの、私はその森に入り浸るようになった。

ラビィちゃんは私にできた第二の親友になっていた。

そのうち邸の人間に私が森に入っているとところを見られて、お父様から大目玉を食らう

ことになった。

私が妖精と会つてることを話すと、血相を変えて、

「このことはカーレンベルク家の秘匿事項だから、決して誰にも話してはならん。」と私に言う。

「そうかあ、マリーン、やはりお前だったのか。数代前から言われていたんだ。

興盛を誇るわが家にもそのうち未曾有の危機に襲われる時代が来る。

その時、黄泉の国から蘇りし少女が森の妖精と共にその難局を乗り切るのだという。

しかし、それは数多ある可能性の中でもとりわけ低く、数百分の一の運命のものと決まっているらしい。そのためにもあの妖精の森を必ず残しておけとね。」

その後はトントン拍子に話が進んだ。

私と妖精のラビイちゃんは專屬契約を結ぶことになった。

血と血で取り交わすもので誰にも破れない不可侵のものだという。

それから私がラビイちゃん用の触媒を作ることになった。その当時はあまり手芸に慣れてなくてとても苦労した。試作はかなりの数にのぼった。

結局、ラビイちゃんが最終的に気に入ったのはピンクの布地で作ったウサギのぬいぐるみだった。

母国イギリスで追放処分を受けたことにより、家に一時滞在していたエドワード・ア

レクサンダー氏によって、埋め込みの儀式が粛々と執り行われた。

その後彼はドイツに渡るものの、ナチスの迫害を受け、我が家に舞い戻ることになる。以来、私とラビイちゃんは切り離せないものとなった。

お父様が言われるには、「いかなる時をもつてしてもその妖精を放してはならん。その妖精は必ずお前と我が家を守ってくれるものだからな。」

それと私に一對のバラのコサージュを渡してきた。

「これを頭に付けなさい。これは妖精とお前の契約を証明するものでもある。…これが使われることがないことを祈ってるのだが…。」

対人用に触媒を作ったのだが、案外ラビイちゃんはウサギのぬいぐるみを入ったみたいで、誰もいない時はその姿のまま、私と会話している。

学園都市の森に出かけた時はそこに住んでる妖精たちに大層うらやましがられたぐらいなので、なかなかの自信作である。

そのラビイちゃんがヒロインと鏢迫り合いをしている。

片方は剣で、

もう片方はぬいぐるみの両手だ。

「な、なんなの。」

コイツ、急に動き出して、

気持ち悪い……。」

「ボクのお嬢様を害しようとするなんて許せない。お前は消えろ。」

「シヤ、シヤベツタアアア!!!」

狼狽するヒロイン。

うん、その反応、マ○クのCMのあの子より白眼剥むいてるから。

その隙について私は宝剣を奪い取る。

オーガスタも私のところに来てヒロインを取り押さえた。

「正直、驚いたわ。」

そのぬいぐるみ、完全にあなたの趣味だと思ってたから。」

「……これを作ったのは一応私。」

「護身用です。」

「……私あなたを少し誤解していたわ。」

まあ、こんなぬいぐるみを四六時中持ってたなら、ちよつと頭のイつちやった娘だとは

思うわな。

だって、ラビイちゃん、これしか気に入らなかったんだもん…

ヒロインはその場で憲兵たちによつて捕縛された。

シユトラールの国宝級の私物を盗みだし、さらにそれで公爵令嬢を斬りつけた罪は重いらしい。

恐らく投獄は確定だろうが、刑期は裁判であらそわれることになるだろう。

即日にエドヴァルドとオルフェレウス主導のもと、科学研究室がアポ無しで調査された。

突然の訪問にルードヴィツヒも対応できず証拠隠滅が図れなかったようだ。

ナチス首脳部との対話記録、武器商業者とのやり取り、また実際、クーヘンを占拠する場合のシミュレーションの模式図などあらゆる反逆の証拠となるものが見つかった。

さらに機関短銃のMP-38が数点見つかった時はオルフェレウスも頭をおさえていた。

また部員の多くは隠密に場所を移して、軍事訓練を強制されていたらしい。

科学っぽいものといったら、優秀な遺伝子を追及する研究というのが一応行われてい

た。

見てみると、カロツサ博士のやっている研究にほとんど近いものだということがわかった。

：： 自分のやってた研究とかぶってたから気に入らなかったとか？

結局、彼は民衆を犠牲にした上で何をやり遂げたかったのか、マリーンには今をもつてわからない。

とき○モの紐緒さんみたいに真面目に科学してくれば良かったんだけどなあ……。

ああ、そういうやあの子も高性能ロボットで世界征服を考えてたんだっけ？

：： まあ、それぐらいのほうが愛嬌あいぎょうあつていいやね。

：： えっと、これで、没落フラグも全て叩き潰したことだし、一件落着つてことなのよね？

革命の形

「マリーーン！お前っ!!」

昼下がりの女子教室。

紫色の髪をしたボロボロの恰好の青年が突如乱入し、場が一時騒然となる。

彼がここに怒鳴り込むのは二回目か。

元シュトラールとはいえ、国家転覆の反逆罪を計画した張本人が数ある包囲網をすり抜けてここまでやってくるということは、学園にかなりのセキュリティ上の欠陥があるのではないだろうか。

クーヘンの憲兵らにしても、一度、エセ英国スパイを取り逃がした前科がある。

『新シュトラール候補』として、学園都市を安全な町にしていくのも私の務めだろう。

「ルードヴィツヒ?…一体どうやってきたんですか。」

「どうやってもこうもないっ！　なぜ、お前はいつも我の『革命』を邪魔するんだっ!!」

『革命』…?」

ルードヴィツヒ、あなたは支配される側なのですか?」

「そんなわけなからう。

私はシユトラールだ。

私の『革命』によつてこの国は、合理的に独裁制へと移行し、新しく生まれ変わるはずだったのだ。」

「では、やはり厳密に『革命』とは呼ばせんね。

革命とは *Revolving*、つまり反転すること。

今まで、被支配者側だったものが既存の支配階級を打ち倒し、全く新しい政治体制に移行させることです。

貴方の場合、支配者側のシユトラールとしての権力を持ちながら武力でもつて現政権のトップを入れ替えようと思いました。これは『権力闘争』であり、『クーデター』と呼びます。

また卒業式の日に合わせてドイツ軍をパラシュート作戦で降下させ、クーヘン国民の生活を脅かそうと計画しました。これを一般に人は『テロ行為』と呼びます。」

「て、テロだどっ！」

ルードヴィツヒは目を引ん？くようにして私を睨む。

無論、私の今、ここで言っている『革命』とは狭義の意味での定義だ。

古来で中国で使われた『易姓革命』は単に王朝が交代する意味で使われてたし、

エネルギー革命や産業革命など、物事が短いスパンで変革するときにもこの言葉が良く使われる。

しかし、元シユトラールであるルードヴィヒが軍を持って国の主要機関を制圧し、人々の生活を脅かすことを私はどうしても『革命』などと呼べないのだ。

それは私にとって、国を乗っ取るうとするクーデターであり、テロ行為なのだ。決して内部から何かを変革しようとする動きではない。

ましては今回は外部からのドイツ軍を使い、クーヘン国を蹂躪しようという考えだった。

外患誘致の売国行為と聞いていい。

革命なんていう大層な言葉は間違っても使いたくない。

「私はあなたの売国テロ行為を未然に防いだのですから、問題ないでしょう。」

「…ば、売国だと…、この我を…。」

：し、しかし、今のドイツにはカロツサによる『優生計画』が進んでいる。

たとえ、人々に売国奴呼ばわりされようと、

我はその恐るべき計画を阻止せんとばかりに『シャツハブレット・ブレーメ・ゲノツ

セ（黒百合の同士）』を組織しよう…」

「…そのカロツサの計画について、私も調べたのですが…、

どこにそこに戦争の理由があるというのです?」

「…えっ!」

ルードヴィツヒは絶句している

カロツサの『優生計画』というのは平たく言うと優れた遺伝子の持つ人間だけを集めて、世界を支配しようという考えである。

実際のナチス・ドイツ政権もゲルマン民族を優秀な種と位置づけ、ほとんど似たような考えを持っていた。

いや、歴史的に見て、ヒトラー支配下のナチスドイツは、もつと悪辣非道なことを平気でやっていたといえるだろう。

ユダヤ人のジェノサイドは当然として、同胞のドイツ人に対しても優性裁判を行い、劣悪種と判断されたものは、強制労働の末、殺害。女性に対しては強制的な不妊手術を施していた。

さらには、世界帝国を作り、ヨーロッパ諸国をその傘下におさめようと、暗躍した。これが第二次世界大戦が起こるきっかけになる。

カロツサ博士が企む優生計画なんて、周辺諸国に与える影響は、全然問題にならない程度だろう。

似たようなことは結局、後世でナチスが行うことになる。

逆に、ルードヴィツヒの5人のクローンが支配することによって、歴史上起こったユダヤ人撲滅や、アウシュヴィツツなどの、悲劇的な出来事を避けられるかもしれない。

メーヴェ：じゃなかった、ヤクト・ヒルシケーフアにしたって、ラアアスのメビウスのようにニュータイプ人間（超能力者）にしか十分に扱えない。

候補としては、カミュだが、彼さえ抑えれば、ヤクトなんちゃらで世界征服など、夢のまた夢だろう。

もしかして、超能力者がたくさんいる、クーヘンで幾人か、拉致されるかもしれないが、これこそ外交問題で解決するべきだ。

前世での、北朝鮮と日本のようなものだ。

国際問題に発展するので、そう簡単に拉致なんてできないはずだ。伯爵令息のカミュなんでもつてのほかだろう。

もし超能力者に対し、非人道的な生体実験が行われている、と憤慨するのであれば、国際連盟なり、国際社会で訴えればいい。

クーヘンで内乱を起こそうなんて考えにはとても賛同できない。

やはり、ルードヴィツヒはシユトラールでの統治では満足できずに、多くの国民を犠

性に自分だけの独裁政権を作りたいかかったように思われる。

本当は自分の野望を達成したかっただけだろうに。

ドイツ軍まで投入してクーヘン国民を戦争に巻き込む必要はあったのだろうか？

前世での情報を省きながらも『カロツサ問題を戦争の理由に使う』問題点を次々と指摘する。

論破され打ちひしがれた表情のルードヴィツヒに私はさらに追い打ちをかける。

『『革命』』といえ、今私がやっていることはあなたがやりたかった革命行為といえるでしょうね。』

私は売国テロ野郎の陰謀をつまびやかにした功績とその優秀さを買われて、今回、女性として初めてのシュトラール候補生に選ばれた。

男尊女卑のクーヘン政界において、これは画期的なことといえるだろう。

ルードヴィツヒと親戚関係にあるリヒャルト三世は当然反対したが、現使長、シュトラール候補生3人の連名、さらに海の向こうの石月伯爵の推薦が重なり、渋々ながらも特例に認めざるおえなくなった。

：．． 今の使長たちと私、今まであんまり関わりがなかったんだけど。

それほど、ティルクを排除した私に感謝してるといふことなのだろうか．．．。

しかし、私には願ってもないチャンスだ。

わがカーレンベルク家もこれで復興する。

できれば、今のようないびつなシュトラール独裁制を改め、議会民主制、国民皆選挙にまで持っていきたい。

今まで被支配層だった女性の私が政治体制を内側から民主的なものに変えていく。

これこそ、本来あるべき『革命』の形なのではないだろうか。

私は、今度こそ、ルードヴィツヒを憲兵に突き出し、学園から追放した。ヒロインと同じく彼は裁判を受け、やがて投獄されることになると思う。

国家反逆の罪は重い。

おそらくは終身に近い年数になるのではないかと思う。

ふー、しかし、まさかまたルードヴィツヒが教室に来るとはねー。

これ以上のトラブルはごめんだよ。

お見合い

「…お見合い?」

オーガスタが驚いた顔で私を見る。

あらあらまあまあとミンナも興味津々きょうみしんしんで私の方を覗のぞき込む。

…相変わらずこの子は、可愛い顔して寄ってくるなあ。

「そう、リヒテンシュタイン家とね。

お父様が

家のほうは心配しなくてもいいから断ことわってくれてもいいんだけど、
会あって見るだけはしてもいいんじゃないかって。」

「リヒテンシュタイン家…というとルドヴィツヒの下の弟…ということかしら。
たしか、あの家にはほかに2人いたわよね」

ここはシュトラール委員会室。

赤を基調とした豪華な部屋だ。

シュトラールに任命された私は真まつ先にオーガスタとミンナを私の補佐に入れた。

彼女たちは十分優秀なので、2年目まで待つ必要はないだろう。

学園都市の市政は多岐^{たき}にわたる。

2人は大変有能なので、正直助かっている。

それに…。

私はため息をつきながら目の前の光景を覗^{のぞ}き見る

「なあ、オルフェ、いいだろう?…。」

「エドヴァルド…、みんなの前だぞ。」

繰り広げられるB.L光景に他の女子補佐員は顔を真っ赤にしながら見つめている。

…これだもんなあ。

噂は本当だったな…。

実質、女子補佐員が実務を行っている、っていうやつ。

まあ、彼女たちの目の保養という意味なら少しは役に立っているんだけど…。

…ゲームの時から疑問に思ってたけど、シユトラールの彼らは実質ここ^{から}に絡みに来てるものだしなあ。

カミュは温室にこもりつきりだし…。

オーガスタは呆れた表情をしている。

毎日、アレを見せつけられて「百年の恋も冷めた」ということなのだろう。

この前、それとなく「エドヴァルドとはどうなってるの」と聞いた時、

一瞬逡巡しゅんじゆんしたうえで、「…今はほかにほっとけない人がいるから…。」と私の方を見る。

…おつ、これはどこかで新しい恋でも見つけちゃった？

オーガスタにしては、切り替え早いよね。

あとでミンナと盛り上がるぞ〜。

「それがね。

お兄さんのほうらしいの。」

「！お兄さん?!」

「…え、まさかルードヴィツヒ?!」

ミンナは嫌な顔をしている。

入学当初から彼女の憧れの男性であり続けたルードヴィツヒだったが、

2度にわたる女子教室への怒鳴り込み。

国を転覆させる反逆計画の一部始終を聞かされ、すっかり幻滅してしまったようだ。

「違うわよ。

ルードヴィツヒは今、監獄かんごくにいるし、

そのことで、この前リヒテンシュタイン家に復縁ふくえんしたという噂のユーリウス様のことじゃないの？」

オーガスタが説明する。

ユーリウス・ヘアツオーク・フォン・モーン・リヒテンシュタイン。

数年前にリヒテンシュタイン家で激しい家督騒動かどくが起こり、下の弟ルードヴィツヒに敗れ放逐された人だ。

今回、ルードヴィツヒが法のくびきにあい、晴れて復縁がかなうまで戸籍上のリヒテンシュタイン家は彼をのぞいた三人兄弟とされていた。

マリーンも噂だけは聞いているが、この人に関しては、謎に包まれている。

学園時代、奔放ほんぽうで始末に負えない乱暴者だったという話も聞かし、その逆の、品行方

正であり、成績優秀、容姿端麗の人物だったとの話も聞く。

「うーん、どんな人なのか…」

興味はあるのよねえ…。」

「ねーねー、会ってみるの？」

「うん、無理強いはないみたいだしね。」

ルードヴィツヒの拘束によりリヒテンシュタイン家は一気に凋落ちようらくした。

現国王との縁戚関係にあることなどから、没落とまではいかなかったが、風聞を恐れた王家がりヒテンシュタイン家の下の妹との婚約を解消させようとしているとの噂まである。

建国王の家系であり、シュトラールをも輩出した、勢いあるカーレンベルク公爵家とつながろうといった政治的な意味合いが強いのだろう。

向こうとしてはそれで必死なのだろうが、こちらとして別に受けなくてもいい話だ。

クーヘン国のパワーバランスが安定する、という意味合いからいえば、受けとしても損はない話なんだけどね。

そんなわけで、春休みを利用して、エアートベール・ブロッチエンのわが家に一旦、里帰りすることになった。

復活祭までには戻れるといいんだけどなー。

お見合い相手

「皆の衆、お嬢様が戻られたぞ！」

「おおっ！」

「あらあら。」

「ありがたや、ありがたや。」

私は領民りょうみんからはやたら人気がある。

おそらくマリーンの見た目の幼さから可愛がられている節ふしがあるのではないかと思う。

私は馬車の窓から彼らに向かって挨拶あいさつをする。

「領民の皆さまっ

お出迎えでむかありがとうございます！」

「おおっ、ご立派になられて……」

感涙^{かんのい}にむせび泣くブロッチェンの領民たちが車窓から見える。

… え、いくらなんでも少し大袈裟^{おおげさ}じゃない？

ラビイちゃんは故郷の森の様子をちよつと見てくるからといって、今は『中身』になっている。

埋め込みといっても、ずっとヌイグルミのままなわけではない。

自由な着脱^{ちやくだつ}可能になっている。

気が向いた時はまれにこのようにラビイちゃんの中身が出てくることがある。

… しかし、ラビイちゃんってこう見るとファンタジックすぎる見た目だね。

ここつて、ゲームだけど、現実なのよね？

神聖すぎて、コナン・ドイルも興味を持つわけだよ。

「ふふつ、お嬢様。

ボクのこと考えてくれてるの？

うっれしーなー。」

ラビイちゃんはウフフと笑い、そのまま、森へと遊びに行ってしまった。

「… お嬢様。何かすこし雰囲気が変わりましたね。」

馬車で迎えに来ていた執事のコーエンにそう言われる。

「… ん、そうかしら？」

そういえば、領民に対してのマリーンの喋り方つてもうちよつと間延びまのした感じだったかもなあ。

「… まあ、私にはそのほうが素すなお嬢様らしくて好きですがね。

…あの、その、もうあまり無理をなさらないでくださいね。」
なぜかコーエンから心配されてしまった。

私つてそんなに不安定に見えるんだらうか。

今度からは気をつけなきゃな、と気を引き締める。

「そういうところです。

お嬢様。

身内の間では、演技などせず、普段どおり楽になさってください。

私どもはいつでも、『あなたの味方』ですから……。」

不意に出たコーエンのその言葉にマリーンである私はウルつとしてしまった。

……その言葉を私は今日までどれほど待っていただろうか。

コーエンは私にハンカチを差し出す。

「……さあ、これで涙を拭いてください。

お見合い相手がベルネからもう来られて待つているようですよ。」

「……ぐすつ。

えつ、もう?」

私は、コーエンから渡されたハンカチで顔を整え、わが邸へと向かう。

「…ま、マリオンさん！」

邸の応接間に入ると父の隣には、顔を赤らめた緑髪的美青年がたっている。

…
私のお見合い相手はなんと門番だった。

「…えっ、門番さん？」

『晴天の霹靂』とはまさにこのことをいうのだろう。

門番さんこそ『ユーリウス・リヒテンシュタイン』。

数年前にリヒテンシュタイン公爵家から戸籍を抹消された張本人だったのだ。

門番さんは公爵家から追放されたその後、バルトロメウス校長先生のお世話になりながら、学園の警備の職についていたとのことだ。

…
いやー、しばらく姿を見てないな、と思ってただけど、そういうことだったの

か。

「なんと！

二人は知り合ひであつたか。

それはちようどいい。

あとは若いお2人で……」

お父様はニヤニヤと私たちを眺めながら、応接間を去つて行く。

なるほど、これはかなりの好物件かもしれない。

門番の人柄はお墨付きだ。

そして彼とは氣心が知れた仲だ。

おまけに相手は公爵家の長男。

リヒテンシュタイン家に今の私は特に含むところはない。

我が家をおとし陥れようとしたのだから、当時当主代行をしていたルードヴィツヒだつたという話を聞いている。

それに、前にも話したが、リヒテンシュタイン家とわがカーレンベルク公爵家が婚姻こんいん

によつて結びつくことによつてクーヘンの政情が大分安定する。

しかも今回向こうはかなり乗り気だ。

どうやら門番は以前から私に好意を持っていたらしい。

政略うんぬん抜きに考えても、この話は前向きに考えてもよいのではないだろうか。

積もる話と軽い顔合わせを終え、元門番ことユーリウスは所領しよりょうビルネへと戻る。

門番であつたころのノンビリした彼に比べ、今の彼は随分と忙しそうに見える。

領主であるリヒテンシュタイン公爵は数年前から原因不明の体調不良にあり、万全の状態ではない。

今はユーリウスが領土経営を代行しているという話だ。

領主代行であつたルードヴィツヒがかなり雑な運営をしていたため、以前の状態に戻すのにかなり手間取っているらしい。

とはいえ、ビルネって油田がたくさんあつて、クーヘンきつての一大工業地帯なわけだから、門番が下手こなければ、すぐに黒字回復するのではないだろうか。

……うん、それ、考えるとリヒテンシュタイン家とつながるのは政略的に見てかなり美味しいよね。

お父様は何も言わないけれど、
門番の人柄だったら私もやぶさかではないんだよなあ。

「お前の将来のことだ。」

…… ゆっくり考えなさい。」

とお父様は私に声をかける。

入学前とはえらい違いだ。

その夜、私とお父様は手紙のやりとりだけでは書ききれなかったことを含めて、色々話し合った。

お父様は、私の最も近い身内であり、家族なので、入学式の日^{よみがえ}に前世の記憶が私に蘇ったことについても包み隠さず全て話した。

私の話を聞いて、最初こそ驚いていたふうに見えたお父様だったが、

「…… そうか、やっぱりな。」

と妙に納得してしまっている。

…アレ、こんなもん？

もつとこうほら修羅場しゆらばとかがあるのかな、とか想像していたんだけど…。

まあ、前世のOLの記憶が戻っただけでマリーンが消えたわけでは全然ないんだけどね。

口調とかちよつと変わっているからてつきり変に思われるんじゃないかなあ、と思つてたんだよなあ…。

「マリーン今までお前につらくあたつてすまなかつたな。」

突然、お父様が訥々とつとつとしやべりだす。

「お前が女として生まれたことで、カーレンベルク家の地位が落ちてしまったと考えていたことは正直あつたと思う…。

だが、一番は、お前が女であつたことで

もしかしてあの『最悪の運命』がついにやってきたのかと内心不安だつたのだよ。」

そしてお父様は語る。

先代前からカーレンベルク家に言い伝えられてきた『恐るべき予言』を。

我が家がありもしない罪をでっち上げられ、財産を失い、没落し、一家が離散してし

まう、というもの。

先代のカーレンベルク家が予言した内容は警告として数代へと伝えられ続けていた。

「黄泉の国より蘇りし女が乗り切る」

しかし、それは数百分の1の運命の可能性しかない。

「そのお前がしているバラのコサージユ。

それは妖精との契約で得られたものだが、

非常時に特別な力を持つ。

それは、平行世界へと飛び立つというものだ。

カーレンベルク家が没落して何度も悲惨な運命を繰り返したお前はそのコサージユを使い、記憶を失いながらも何度も同じ人生をやり直したのだろう。

もしかして、今のお前は同じ運命を何度も繰り返した末に黄泉の記憶を奇跡的に思い出し、ここにたどり着いたのかもしれない。」

お父様の言葉にラビイちゃんがうなづいている。

いつのまに帰ってきたんだろうか。

「ボクは妖精だからね。」

記憶を共有していて、どのマリーンも知っているけれども、今のお嬢様のようにうまくはいかなかったようだね。

最後は泣きながらそのコサージュを作動させてたなあ。

マリーン、良かったね。

今までのマリーンの中で一番幸せそうなお嬢様を見れてボク本当に嬉しい。」
ラビイちゃんは涙ながらに言う。

私もらい泣きをしてしまう。

この世界は数多あるこのゲームの世界の中の唯一のバグなのかもしれない。

数あるゲームのエンディングの中で悲運と失意を繰り返してきたマリーンがある日
ついに黄泉から蘇った前世の私の記憶と結びついた奇跡。

それが、今の私だ。

これからの私の未来、大切にしていかなければならない。

これは何百人もいる私の涙から作られた今の私。

絶対に疎かにはできない大切な命なのだから。

E n d e

「民よ！我が客人となれ。」

勇壮なシユトラウスの音楽が私たちを包み込む。

人類初の聖火ランナーがギリシヤから持って来た灯火ともしびを今、点火台へと発火させた。

1936年 8月。

いよいよ待ちに待ったベルリンオリンピックが開幕された。
スタジアムはまさに興奮のるつぼにある。

その中をなぜか私がクーヘン国の旗手きしゅとして行進している。

・・・どうして、こうなった？

今年サルコウ氏の推薦により、私はフィギュアスケート世界選手権、パリ大会に向けたクーヘン代表強化選手に正式にエントリーされた。

今はシュトラー爾委員会と並行して、トレーナーとの体幹たいかんトレーニングに励む多忙な毎日だ。

当時の女子フィギュア界で著名な選手としてノルウエーのソニア・ヘニーがいる。

ロングスカート主流の女子フィギュア界において初めてミスカートを持ちこんだ改革者で、ルッツジャンプを武器にしていた。

ヨーロッパフィギュア選手権、世界選手権、そしてこの前の過去冬季オリンピック三連覇とことごとくメダルを総ナメにしている、押しも押されぬスター選手である。

そのスター選手に現在、私は絶賛ぜっさんライバル視されている。

曲がりなりに、ルッツ、サルコウ、ループ、フリップの多様なシークエンスを織おり交ぜながら、ダンスステップで芸術面を上げてくるスタイルの私と彼女は、この前の世界選手権パリ大会に向けたヨーロッパ地区予選でぶつかり、万年チャンピオンの彼女をワンツートップで負かしてしまったのだ。

快挙ともいえる新星の私のこの活躍がクーヘンスポーツ界で注目され、夏季ベルリンオリンピックのクーヘン代表団の旗手にとうとう祭り上げられてしまったのだけど……私、このオリンピックは観戦するだけで、全然出場しないんだけど、本当にいいのか

しら？

まあ、クーヘンでは三人の陸上選手しか出ないから見栄えが悪いというのも、理由に挙げられるのでしょうけど……。

人々の送る視線の熱気が凄い。

特に、あのノルウエーのスポーツ団の一人から注がれる私への視線が痛い……。

ソニアさん、そんなにギラギラ睨まないで。

私達女子フィギュアスケート界でいえば、あなたは《生ける伝説》みたいな人だから、そんなキツイ目で見られると正直ツライ……。

ナチスとの関与は擁護できないけど、私が今このレベルに達しているのも、彼女の歴史的功績のお陰っていうこともあるのよね。

……そして貴賓席でナチス式敬礼をしている

独裁者ヒトラーの存在感、すごいわ。

カリスマ性だけはあるのよね、あの男は。

……ん？

な、何かいるーっ！

ヒトラーの後ろにあやしげなフードの人が3人立ってるっ！

… 傀儡かいらいとはいえども、あからさまだなあ。

ゲームの中で傀儡かいらいとの噂がある、とルードヴィツヒも言ってたけど、そりゃあ、噂にもなるわけだ。

めっちゃ、目立ってるし…。

オリンピック前ということもあって、ドイツは国際世論の手前、一時的に平和で治安の良い国になっている。

しかし、すでに『悪の元凶』であるヒトラーが傀儡として使い物にならなくなってる現在、その後、前世のナチスほど酷い状態にはならないだろう、と私は予測している。

案外、あの三人のクローンは平和裡にドイツをまとめていくのではないだろうか。

反ユダヤ主義とか、過激な汎ゲルマン主義を持っているわけではない。

元になっているルードヴィツヒほど思い込みが強いタイプだと困るが、今のところそのような兆候は見せていない。

ゲームで彼らが行う『悪巧み』は現実の世界ではほとんど影響が出ないレベルだろう。

ホロコーストやアウシュヴィツツのような残虐な事件が今後一切起きないというだけでも私は儲けものだと思っている。

「久しぶりですね、マリーン殿。」

行進を終えた私を待っていたのは懐かしい直司の顔だった。

彼の奮闘にも関わらず、二・二六事件は結局防げなかった。

あの事件は歴史の必然性というやつなのだったのだろう。

その代わり、石月家ではこの事件を最大限に利用し、天皇が朝敵と定めた陸軍の不祥事に対し、綱紀肅正を訴えた。

この動きは世論を動かし、現在、軍部の影響力は事件前に比べ、かなり弱まっているという。

つまり、このクーデター事件が起きたことによって、史実とは真逆の現象が起きてしまったことになる。

確かに日本はあの時、陸軍側の不手際を徹底的に責めればこんな未来もありえたかも知れなかったのだ。

二・二六事件の直後、軍部に対する国民の不信感が高かった。

史実でも、斎藤隆夫代議士は軍の責任を追及する演説をし、反響も大きかったという。

しかし、やがて、組織の力に負け、議会の除名処分を受けることになる。

今回の場合、石月伯爵家の華族を中心とした貴族院のメンバーが初動から組織化されていたのが大きかったといえる。

日本の歴史は今、確実に変わりつつある。

資源問題は未だ続いているが、石油の豊富なクーヘン国との貿易が今後も続いてゆけば、A B C D包囲網を潜り抜けられるだろう。

クーヘンの貿易船は経済封鎖対象にはなり得ないからだ。

この流れで盧溝橋事件も起きずに、日中戦争も起きなければ、幻に終わるはずの私の札幌オリンピック出場も叶うかもしれない。

ただ、ここら辺はちよつと私の楽観視が入ってはいるけれどもね……。

……だって、ここまで来たら、オリンピック出たいじゃんさー！

「芳子、こつちへ来てご挨拶なさい。」

「こちらがマリーン殿だ。」

直司が日本語で妹に呼びかける。

短髪の顔が整った女の子だ。

洋装などころは今流行りのモダンガールを彷彿とさせる。

「ぐ、グーテンターク、イツヒハイセ……」

ココンニチハ：：、ワタシのナマエハ、ヨシコ、トモウシマス。
：：ヨロシクオネガイシマス。」

芳子よしこさんね。

片言のドイツ語で一生懸命話そうとする大和撫子やまとなでしこつて何か可愛いわね。

「あ、日本語でいいわよ、芳子さん。

よろしくね。」

「え————！」

嘘——。

何で喋しゃべれるの?」

芳子さんは心底驚おどろいている様子だった。

：：だって、元母国語りゆうこくごだもんね。

ミンナも私が隣りゆうちようで急に流暢りゆうちような異国語を話したもんだから、目を皿のように丸くしている。

近くの直司もズッコケてる。

あ、そういえば、コイツともなぜかドイツ語で話してたんだっけ。

「ま、マリーン殿。」

日本語を習得しておられたとは…。

…なぜそれを早く言ってくれない。」

直司はちよつとむくれてしまった。

ごめん、ごめん。

だって、いつも、ドイツ語で話しかけられるもんだから…。

「…そういえば、今日、お友達も一緒にいらつしやるつて言つてたけど…。」

私は芳子さんの後ろの方を見る。

「そう。ボーイフレンドなの。」

すました顔で芳子さんが後ろに立っている白い海軍服を着た子を紹介する。

とても、キラキラした美少年…のように見える。

「やあ、僕は伊集院景いじゅういんけいというんだ。

よろしく頼むよ。」

伊集院つて…まさか。

「…伊集院さん、あなた、女の子でしょ?」

「な、なにを馬鹿な事を言ってるんだ。」

…ちよ、ど、どこを触ってるんだ」

景は顔を真っ赤にさせて、身体をまさぐる私を見ている。

… うん、うん。ちゃんとあるじゃん。

サラシ巻いてるけど、こんな膨らんでる。

… フムフム、しかし、これは私よりも大きいと見た。

しいせつ! 神様はなんでこんなにも不公平なんだろう。

…私は天を仰ぎ見る。

芳子さんはビツクリした顔で私の奇行を見ている。

ミンナは両手で顔を覆いながらもすっかり私たちの様子を観察している。

オーガスタはそんな私たちを見てすつかり呆れ顔だ。

もはやこの顔は私たちの中で彼女のお家芸になっている。

「わ、わかった。」

ぼ、ぼくは、いや、… 私はこう見えても女の子です。

家の方針で成人するまで男装だんそうするように言われているんです。」

「え——っ！

そうだったの!？」

芳子さんは驚いて景の顔を覗きこむ。

そうそう友達とかにも話さないんだよね。

とき○モの中でも伊集院家の男装は謎の風習だよ。

2の妹ですら知らないんだもんなー

∴そのメイちゃんは男装すらしてないわけだから、一体どういう基準になっているのやら。。。

今日は女子水泳の観戦の日。

ベルリン・オリンピックで、私はこれが一番楽しみだった。

前畑秀子。

和歌山県生まれのこの天才女性スイマーは前大会のロサンゼルスで2000m平泳ぎ

に参加し、惜しくも日本女性初の金を逃した。

優勝したオーストラリアのクレア・デニスとの差はわずか0.1秒。

一時期は引退も考えた彼女だったが、全国からの励ましの手紙に支えられ、一念発起。再び、4年後のオリンピックに向かって努力し続けることになる。

そして、今日、日本中の期待を背負い、この場を迎えている。

対するはマルタ・ゲネンゲル。

ヨーロッパチャンピオンにして、ヒトラーが期待をかけるホープだ。

地元ドイツが一丸となって応援する中、完全、アウエイの前畑嬢！

さあ、どうする前畑嬢。

歴史に名を残す名勝負が今始まるうとしている…。

「もう、放送終了予定時間ですが、スイッチを切らないでください。」

私は河西アナさながらに実況を始める。

そんな私を何が始まったんだとミンナたちは驚きながら見つめている。

「ただ今ピストルが鳴ります。」

飛び込みました、一斉に飛び込みました。

これが我が前畑とゲネンゲルの競泳でございます。」

「…さあ、ゲネンゲルと前畑嬢の接戦となりました、他はだいぶおくれました。」

前畑嬢、ひとかきリード、わずかにひとかきリード、前畑ガンバレ！ガンバレ！前畑ガンバレ前畑ガンバレ前畑ガンバレ！

あと25、あと25、前畑リード、ゲネンゲルも出ております、がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！

私の迫真の実況も相まって、芳子と景の日本人2人はきやいきやいと大絶叫している。

なにせ、日本人女子初の金メダルである。

喜ばないほうがおかしいだろう。

私も大興奮である。

「マリーンちゃんつてずいぶん日本びいきなのね。

…別にいいけど。」

ゲネンゲルを応援していたミンナが私のとなりですっかりふてくされてる。

こ、これはまたレアな表情だ。

そんな顔もとっても可愛いよ、ミンナ。

大好き。

「しかし、すごい実況だったわ…。」

一瞬、息が止まるかと思つたわよ。」

「…殺人的よね。」

河西三省かさいさんせいのこの時のラジオ放送は全日本国民を熱狂の渦に巻き込んだ。

当時、心臓発作で運ばれる人もいたといわれるほどだ。

のちにレコード化までされることになる。

「ねえ、ナオジ様とはどうするつもりなの？」

興奮さめやまぬ私にオーガスタが聞く。

となりでミンナもウンウンうなづいている。

「私めおとと夫婦めおとになつてください。

マリーン・ヘアツオーギン・フロイライン・カーレンベルク殿。」

昨日、私は直司から正式なプロポーズを受けた。

「カーレンベルク公爵にはすでに話を通してあります。」

私の母上も父上も賛成しています。

妹もあなたのことを一目見て気に入ったようです。

日本帝国の輝かしい未来のためにもあなたはその見識の高さ、素晴らしい予知の能力は今後とも必要になってくるでしょう。

私の隣で妻としてその英知をどうか授けてください。

シユトラールのこともあるでしょう。

スケートのこともあるでしょう。

リヒテンシユタイン家との話もあるんでしょうが……

：返事は今すぐでなくてもいいんです。

どうか、私との話も考えてください。」

直司は誠実な男だ。

人柄も、悪くないと思う。

ちよつと騙されやすかったり、思い込みの激しいところはあるが、それぐらいの欠点は何とも思わない。

私の前世に多かつたように、女を騙して、泣かせる男よりよっぽどマシだ。

それに日本だ。

私にも馴染みのある国だし、元日本人としてその食文化は捨てがたい。

戦乱の影が見え隠れしている日本に行くのは少しリスクのある話かもしれないが、私の前世の知識を使えば、先の二・二六事件のように、ちよつとは事態を好転できるかもしれない。

…しかし、今の私はクーヘンを捨てられない。

シュトラールとなった現在であればなおさらだ。

ミンナやオーガスタとも離れたくない。

「一応考えてはみるけれども…おそらく彼との縁談を受けることはないと思う。」

直司とは今後とも良い友人でいたい。

「良かったつ！マリーンちゃん、私たちを置いて日本に行つちやうんじゃないかって、心配してたの。」

ミンナが私にむしやぶりついた。

フワつと柔らかな触感が私を包み込む。

「フフフ…すると、私の弟にもチャンスがあるわけね。ならば、私は晴れてあなたの

『お姉様』に！　グフフ…」

オーガスタが不穏に笑う。

…あ、あれ、オーガスタ、キャラ違う…。

何はともあれ、私たち3人は2週間にわたるベルリンオリンピックの日程を満喫するのだった。

最近になって私は思うのだ。

ここはゲームの世界だけど、

同時に現実だ。

一見、ゲームの設定に見えてもこの世界なりの理由で動いている。

例えば、

「カリスマフレーム」。

私はヒロインが『悪女認定』されたから、ヒロインを誘わなかったと考えていた。

でも、オーガスタから後で話を聞くと、あの時ヒロインと私の接触を極度に警戒していた彼女は、会話にヒロインの名前が出ないように私たちを誘導していたらしい。

ヒロインの電話にしたってそうだ。前世の記憶を改めて思い出してみるのが、ゲームではフランス先生は確か誕生日と好感度を教えるだけで、とき○モの好雄のように電話番号自体は教えなかったはずだ。ゲームの私達はおそらく出会った先のカフェで電話番号交換でもしていたんだろう。今回はそこに異分子いぶんしである私が入った。情報管理に

厳しい現代人の私は初対面の人間に電話番号を決して渡さない。爆弾処理のために困ったヒロインは、生徒名簿の持つフランシス先生に泣きついたというわけだ。ルードヴィツヒがヒロインからの電話を受けなかったわけは、当時、反乱計画を企てていたルードヴィツヒが生徒名簿に虚偽の連絡先を教えていたからだろう。ゲームでは、ルードヴィツヒがヒロインの能力を認め、招集した科学研究室で初めて本来の連絡先を教えることになっていたのだろう。

タロットやコロミコマンドにしても『プラシーボ効果』というやつだろう。

マリーンの私はもともと地頭がいいほうだし、授業や勉強でもそれなりに努力してきたつもりだ。

この世界はゲームの中であるけれども、私にとっては現実だ。

ゲームと現実を混合したヒロインの間違いを犯すわけにはいかない。

数あるゲーム世界の中で、この世界は数百分の1の可能性で起こった奇跡のバグだ。

将来のことについてもすぐには結論を出さずにじっくりと考えていきたい。

目下、シュトラール活動とスケートのことで頭がいっぱいだ。

使長として、国を民主的に改革していくのもいいし、フィギュアスケーターとして世界を股にかけ活躍していくのもいいだろう。

数百人のマリーンの涙に報いるためにも、これからも懸命に頑張りがらも、みんな

達、家族をはじめ私を思ってくれてる人達と楽しく生きていこうと思う。

これからマイネリーベをプレイする人に伝えたい。

ちよつとぐらいウザつたらしくて、

悪役っぽくみえても、

私はその中で必死にもがきながら生きている。

そして、いつか、あなたにも、私が主役の物語パグに出会えるといいな。